325
374

始

二28453

日蓮聖人

法華經講義大要

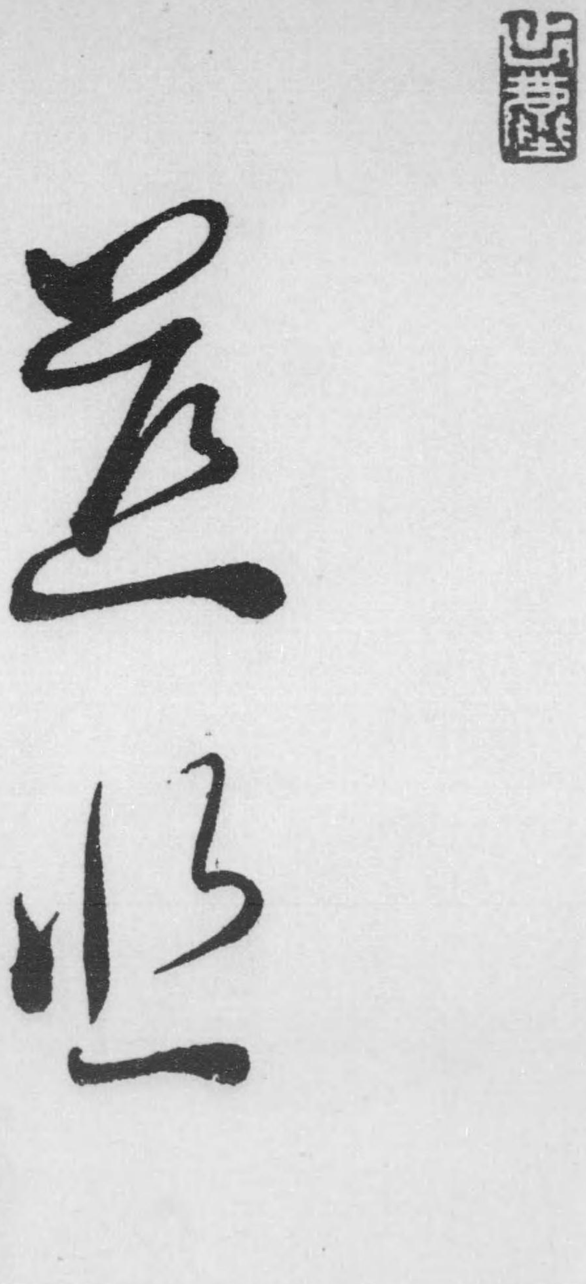
大正
4. 10. 6
内交

元亨利貞

隨卦象

乃信正

日隨



閩谷堂

以

信

得入

國會圖書館藏
唐渡日鑑

序

夫れ法華經は釋尊出世の本懷、衆生成佛の直道なり、故に苟も佛敎を信奉するものは一讀せざるべからず假令ひ一切經を反覆暗誦すとも法華經を讀まざれば佛陀の眞髓を知るに由なし、否な佛敎の本意を失ふて却て妄想顚倒の心を增上せしむるのみ、寧ろ一切經を讀まざるに加かじ、佛之を誡めて云く譬へば盲者大象の一部分を認めて種々の評を下だすが如く、滅後に至らば定めて法華涅槃の佛の本意を知らずして、妄りに種々の異見曲解を爲す者あらんと、宜なるかな今や金言的中せり、世には一切經を讀みし人、數多く、又法華經を

讀みし者多々あるべし、然りと雖も佛の本意を實の如く讀み得たる者幾人かある、四依の論師たる龍樹天親は暫く之を措く、支那に入りて之を翻譯せるもの多々ありと雖も、佛の本意を失はずして如實に譯せるもの僅に羅什一人のみ、又佛の本意を失はずして實の如く一切經を讀み、法華經を讀みし者亦僅に天台智者一人のみ、其の智者大師は如何樣に法華經を讀み、たるぞ、謂く理觀を專らとし迹門の中道實相を主眼として、迹門を表とし本門を裏にして迹門の意を以て本門を讀みしに過ぎざることは天台所述の三大部に依りて明々たり、日本の傳敎亦然り、佛、世を去る二千有餘年の今日

唯々我か聖日蓮のみ、遠く佛勅を奉じ本化の活眼を以て本門を表とし迹門を裏として本門の意を以て迹門否な法華經全部を活讀したまへり、本化の鑑識にあらずんば誰れか之を能くせん、約言すれば日蓮が主義とは何ぞ、曰く法華經主義なり、釋尊の魂たる本門の法華經を以て日本國の一切衆生を救ひ、日本の國土をして娑婆卽寂光の樂國土、眞の淨土たらしめ、日本國を土臺として廣く全世界に法華經の光輝を發揮し諸有世界卽ち法界の一切衆生を濟度せんとするに在り、此の主旨廣く聖祖の遺文に散在せりと雖も初心の者は廣博なる

御遺文之を讀みて其の甚深の妙味を達觀するに苦しむ、著者爰に見る所あり、聖祖講述のまゝ其の簡單平易なる要文を輯めて、法華經の本文に引き合はし、道俗一般老幼婦女をして容易に日蓮所讀の本門法華經の大意を領得せしめんとす、日蓮法華講義大要是れなり、今や脫稿刊行せんとし予に序を求めて止まざれば拙文鄙辭を顧みず聊か所感を述べて序に代ふ

大正三年臘月下澣　　桃井日晃識す

序

佛曰く我が說く所の諸經、法華最第一、

祖曰く無量の功德は皆是の經に集る、其れ然り、是の經は意味深長にして信じ難く解し難し、古來法華を解するの徒、弘法大師が如き碩學が一の字を三と讀めり、その他推して知るべし、蓋し一路斷崖を通じて一歩を過れば倒に深淵に陷らんとするの感あり矣、噫　孰れか能く其の迷を闡し其の玄を鈎せんや、唯だ絕倫無比の日蓮聖僧あるのみ、坊間法華經講義の著太だ多く牛に汗すと云ふべし、

然れども多くは舊時代の格式に拘泥し高尙複雜に

して活社會に適切ならず、

こゝに小橋氏の講義大要成る、

要は簡單にして明、精審にして遺闕する所なし、匠氏の盤根錯節を治するが如し、小橋氏の業勤めたりと云ふべし、

頃者梓に鏤め之を世に公にせんと余に序を祈む、余文の拙きを以て屢ば辭すること堅ければ荐りに請ふて已まず、故に數言を卷端に書し以て序とす

甲寅十二月　　清水撰

發行に就て

本書は其の内容を前人未發の方法に依りて編纂しました。

難解の字句等は皆悉く冠註に緻密周致なる註釋、註解、講義を施しましたそして其の出處及び頁をも載せてありますから容易に見出すことが出來ます、たとへば本文に『舍利弗』とあれば直に冠註を見れば【舍利弗】九十五頁を見よとありますから一々調べたりせぬでも可いから便利です、また經文には一々訓譯がしてありますから如何なる初學者でも、一讀直に容易に會得が出來ます、ですから難解に苦しむと云ふやうなことはありませぬ。

また本書におさめたるお經文や御妙判は皆悉く讀み下しに綴りて總假名をつけてありますから誰れ人にでも極平易に法華經の甚深の義を味ふことが出來ます。

本書は日蓮上人の御遺文「錄内」百四十八通「錄外」七百四十九通、日蓮

上人の著述たる「註法華經」十卷、日蓮上人の御口傳で日興上人が御筆受なされたる「御義口傳」二卷、日蓮上人の御口傳で日向上人が御筆受なされた「日向記」一卷等を以て、一々經文に當て篏めて、恰も日蓮上人が親しく法華經の講義をせられ、讀者は日蓮上人からまのあたりに法華經の講義を聞くが如く編纂しましたので「日蓮上人法華經講義大要」と題したのです。

本文中には私言は一口も入れてありませぬ、全部日蓮上人の御遺文にお任せ致してあります。

本書は二十八品の中で序品から藥王品までの大要講義です。

先づ讀んで御覽なさい、如何なる妙味があるかゝ知れます。

本書編纂に就て諸方面から題字や序文が寄せられましたが頁の都合で掲載、漏れになつたのがあります、一言謝して置きます。

開宗紀元六百六十三年　　編者しるす

日蓮聖人

法華經講義大要

目次

妙法蓮華經序品……一
妙法蓮華經方便品……五
妙法蓮華經譬喩品……一八
妙法蓮華經信解品……三三
妙法蓮華經藥艸諭品……三九
妙法蓮華經授記品……四五
妙法蓮華經化城諭品……四八
妙法蓮華經五百弟子受記品……五四
妙法蓮華經授學無學人記品……六〇
妙法蓮華經法師品……六二

妙法蓮華經見寶塔品……七六
妙法蓮華經提婆達多品……八六
妙法蓮華經勸持品……九九
妙法蓮華經安樂行品……一一〇
妙法蓮華經從地涌出品……一一七
妙法蓮華經如來壽量品……一二六
妙法蓮華經分別功德品……一四九
妙法蓮華經隨喜功德品……一五七
妙法蓮華經法師功德品……一六五
妙法蓮華經常不輕菩薩品……一七五
妙法蓮華經如來神力品……一九六
妙法蓮華經屬累品……二一一
妙法蓮華經藥王菩薩本事品……二一七

冠註目次

い ノ 部

伊蘭……一一一頁
一劫……六五頁
一切經……一四七頁
已今當……二一九頁
一闡提……一五一頁
一色一香……二〇頁

ろ ノ 部

六道……二八頁
六即佛……一六七頁
六根……一六八頁
六種震動……一九八頁
六方便……二一三頁
六群比丘……一四七頁
鹿野苑……三七頁
六親……一一六頁

は ノ 部

八部……一一〇頁
八自在……二〇一頁

に ノ 部

如意寶珠……九三頁
爾前……一二一頁
忍辱地……一八九頁
二處三會……二一六頁

二乘作佛……二一七頁
二乘凡夫……二二四頁
如是相……五頁
如是性……五頁
如是體……六頁

ほノ部

菩提……一〇九頁
煩惱……一三六頁
法界……一八九頁
本門……一五二頁

ちノ部

地獄……一七五頁
中有……二五頁
畜生……一七四頁

りノ部

龍樹……八八頁
龍神……八〇頁
靈山淨土……四一頁
利生……二二六頁
略開三顯一……八頁

かノ部

餓鬼……二九頁
開權顯實……一四六頁
合掌……一七九頁
開示悟入……一八五頁
開三顯一……一八五頁
開權顯實……一八五頁
開佛知見……一〇頁

たノ部

大覺世尊……八頁
多寶……一一二頁
帝釋……一二二頁
大論……一七〇頁
大梵天王……一二八頁
檀那……二〇七頁
大通智勝佛……二三七頁
大音聲……七八頁
檀王……二〇九頁
大海十相……二二一頁

むノ部

無作三身……一四二頁
無著菩薩……一九七頁

らノ部

海に五德あり……二二〇頁

くノ部

供養……一八五頁

けノ部

華嚴經……七六頁
懈怠……一〇九頁
教主釋尊……二二頁

ふノ部

不殺生戒……一四七頁
不輕菩薩……一八一頁
不可思議……一九九頁
分身卽……一八八頁

こノ部

五戒……三三頁
五障……九一頁
五常……九四頁
五種法師……六二頁
五波羅蜜……一四九頁
五天竺……一九三頁
劫の三量……七七頁
五陰世間……二〇三頁
强毒……一八一頁
此の三義……二一二頁

てノ部

傳教大師……八三頁
諦曲……九四頁
轉輪王……二三六頁

あノ部

阿難……一頁
阿羅漢……二頁
阿修羅……一四四頁
阿鞞多羅……一四四頁
阿鼻大成……二〇七頁
阿防羅殺……一四四頁
惡道……二九頁

さノ部

三因佛性……一八七頁
三觀……二〇八頁
三學……一五一頁
三觀三身……二一二頁

三逆……二三四頁
三千塵點劫……二一七頁
三毒……二三七頁
三身如來……一五三頁
三界……二四頁
三千大千世界……九一頁
三徙……九一頁
三蟲……九四頁
三業相應……六五頁
三惑……一二一頁
三墳五典……九五頁
三世……三一頁
三諦……一七七頁
三十三天……二三〇頁
三大秘法……一四一頁
三五の塵點……一四三頁
三鈷……八九頁

きノ部

疑惑……一九〇頁

ゆノ部

唯佛與佛……一四三頁
維摩……二三八頁

めノ部

馬鳴菩薩……一九五頁

みノ部

彌勒……三頁

しノ部

四衆……七九頁

四大聲聞……三八頁
師　子……七九頁
七　寶……七七頁
須扇多佛……一一二頁
須彌山……八二頁
十界互具……一三四頁
十　方……三一頁
十六王子……四〇頁
十信五品開合……一七三頁
諸法實相……二三二頁
四　敬……一四五頁
自愛用身……一四八頁
色心の二法……一五五頁
章　安……一五九頁
四佛知見……一八四頁
娑　婆……二〇四頁
生　死……二〇九頁
霊　且……二一五頁
十　界……二一九頁
聲　聞……二三三頁
娑竭羅……九三頁
舎利弗……九五頁
四　恩……一〇二頁
新發意菩薩……一五〇頁
種熟脫……一七一頁
十惡五逆……二二一頁
自受法樂……一四八頁
出世間……一七〇頁
四一開會……一九九頁
示敎利喜……二一四頁

須　臾……六四頁
十界界成……一三頁

ゑ ノ 部

閻浮提……一四五頁

ひ ノ 部

百界千如……一七二頁
七重の離易……六六頁

も ノ 部

目　連……三二頁

せ ノ 部

禪　定……九五頁
前四味經……三七頁
栴　檀……一一一頁
正像末……一三九頁
善無畏……一三八頁
栴陀羅……一六九頁
世　親……一九四頁
世　間……一四八頁
千中無一……六四頁

す ノ 部

隨　喜……一六三頁
隨喜品……一六二頁
隨他意……一五一頁

冠註目次終

妙法蓮華經序品第一

通茂

○如是我聞の事

如是我聞

かくこそときくの下水うち出て盡きぬながれを見るもかしこし。

阿難と文殊とは、八年の間、此の法華經の無量の義を一句一偈一字も殘さず聽聞してありしが、佛の滅後に結集の時、九百九十九人の阿羅漢が、筆を染めてありしに、妙法蓮華經とかゝせて、如是我聞と唱へさせ給ひしは、妙法蓮華經の五字は、一部八卷二十八品の肝心にあらずや。

（有、報恩抄、遺ノ一五〇三、内七ノ二十七）

千人の阿羅漢、佛の事を思ひいでゝ、涙をながし、ながしながら、文殊師利菩薩は、妙法蓮華經と唱へさせ給へば、千人の阿羅漢の中の、阿難尊者はな

如是とは所聞の法體を擧ぐ我聞とは能持の人也（文句一、十一丁）

所聞の體は、妙字卽也法體とは南無妙法蓮華經なり（御講聞書上ノ四）

「阿難」前五世紀、阿難陀と云ふ、略して阿難と云ふ、梵音アーナンダ、歡喜、慶喜、無染と譯す、釋尊十大弟子の一、二十餘年佛に隨ひ、多聞第一の稱あり、面は滿月の如く、眼は青蓮華の如し、と。第一の結集の時、摩訶迦葉の指揮に從ひ、修多羅藏を結集せり。

「文殊師利」又は曼殊室利、滿殊尸利、略して文殊、梵音

マンザュシュリー妙吉祥、妙德、妙首と譯す、華嚴は三聖の一譯、或は云ふ過去無量阿僧祇劫に龍種上尊王佛と云ひ、未來に成佛して普現如來と云ふ、或は現在北方の常喜世界にあると云ふ。

〔阿羅漢〕又は阿羅詞、阿盧詞、阿盧漢、略して羅漢と云ふ、梵音アルハット。應供、殺賊、無生、離惡と譯す。〔〕聲聞四果の見思の煩惱一切斷盡し、智慧無生智を得て無學位に住し、世間の供養を受るに堪へたる聖者をいふ、〔〕聲聞の究竟位、〔〕如來十號の一佛のこと。

き（泣）ながら、如是我聞と答へ給ふ、餘の九百九十九人は、なく（泣）なみだを硯の水として、又如是我聞の上に、妙法蓮華經とかきつけし也。

（諸法實相抄、遺ノ九六二、愛二ノ十五）

阿難尊者を高座に登せて、佛を仰ぐが如く下座にして、文殊師利菩薩、南無妙法蓮華經と唱へたりしかば、阿難尊者此れを承け取りて、如是我聞と答ふ九百九十九人の大阿羅漢等は、筆を染めて書留め給ひき、一部八卷二十八品の功德は、此の五字に收めて候へばこそ、文殊師利菩薩かく唱へさせ給ふらめ、阿難尊者又さぞかしと答へ給ふらめ。

（右、内房女房御返事、遺ノ一九七三、外ノ十ノ十一）

寂然法師

○靈鷲山の事

鷲の山すぐれて高き峰なれば
無上法の庭と定むる

○一切世間難信之法の事

〔多寶〕梵語には包林蘭羅佛東方寶淨世界の教主、賢顯華嚴證明によつて法華證明の爲め娑婆に來りての前述門を證し、後の本門を起すの大化を演ぜらるゝ法華經證明の佛なり。

綱勒、又は梅怛麗耶梵音マーイトレーヤ慈氏と譯す、姓は阿逸菩薩名、無能勝と譯す、南天竺の婆羅門に生れ、上生に居て當來に兜率天に現ずるなり、故に補處の菩薩と云ふ、釋迦の第五番の補處の菩薩なり、賢劫千佛の中の第五番の補處の菩薩なり、故に補處と云ふ、佛の滅後七千歲の時出世して彌勒と云ふ、釋迦の滅後五十六億七千萬歲の時出世して彌勒と云ふ、釋迦の滅後五十億七千萬歲の時出世して彌勒と云ふ、釋迦の滅後五十億七千萬歲の時出世して彌勒と云ふ、

夫れ在世の正機は過去の宿習厚き上、教主釋尊、多寶、十方分身の諸佛、地涌千界、文殊、彌勒等之を扶けて、諫曉せしむるに、猶信ぜざるものこれあり、五千人席を去り、人天移さる、況んや正像をや、何に況んや末法の初をや、汝之を信せば正法にあらじ。

（右、觀心本尊抄、遺ノ九三一、内八ノ五）

西行法師

○曼珠沙華栴檀香風
つほむよりなへてにも似ぬ花なれば
梢にかねてかほる春風

宗尊親王

○入於深山思惟佛道
山ふかみ尋ね入てぞまよひなき

○佛の道はしるべかりける
佛此夜滅度如薪盡火滅
人しれず法にあふ日を頼むかな

法性寺入道

たきゞ盡にし跡にのこりて

通村

○我見燈明佛

ふるき世を見し人なくば法の花

ひらかん時をいかでしらまし

問て云く、經に難信難解と云へり、世間の人此の文を引いて、法華經は機に叶はずと申し候は道理と覺え候は如何、答へて云く、謂れなきことなりその故はこの經を能く心得ぬ人の云ふ事なり、法華より已前の經は解り難く入り難し、法華の座に來りては解り易く、入り易しと云ふことなり、されば妙樂大師の御釋に云く、法華已前は不了義なるが故に難解と云ふ、卽ち今の經には咸く皆實に入るを指す、故に易知と云ふと、この文の心は法華より已前の經にては、機つたなくして解り難く入り難し、今の經に來りては、機かしこくなりて解り易く、入り易しと釋し給へり。

（右、法華初心成佛抄遺ノ一六八七、内廿二ノ廿三）

今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉るは是れ秘妙方也、便に妙法蓮華經也、故に妙法蓮華經と題し奉て乃至妙便品に云へり體内に爾前の人法を入る、便品は法華經方便品也、是を妙法蓮華經と云へり、前の人法を入る、便品は法華經方便品也、是を卽身成佛と也、如是本末究竟等とも說く乃至方便とは卽ち十方十方とは卽ち十界也、便とは卽ち不思議と云ふ事也

（御聲口傳上ノ十）

方とは秘也便とは妙也。

（文句三ノ五十九）

妙法蓮華經方便品第二

皇太皇宮大夫俊成

○難解難入の事

入り難く解り難しとき く門を

慈鎭僧正

ひらくは華のみのりなりけり

○諸法實相の事

津の國の難波のこともまことゝは

たよりのかどの道よりぞ知る

慈鎭

○如是相

よしの山雲か花かとながめけん

心はれなしこゝろなりけり

○如是性

宗良親王

はれくもる光は雲のしはざにて

離解離入

諸法實相

「如是相」とは色形にして我等の相を云ふ、是を應身解脫、假諦と云ふ

「如是性」とは我等の心にして是を報身とも、般若、空諦とも云ふ

「如是體」とは我等の身體を云ふ。是を法身とも、中諦とも中道とも法性とも寂滅とも云ふ

相、性、體、を三如是と云ふ此の三如是が始めとなり本となつて、力、作、因、縁、果、報、等の七如是が出來て十如是となるのである。始の三如是の三諦と終の七如是の三諦とが唯一なる故に本末究竟して等しと云ふことである。假諦とは百界である空諦は千如である中諦とは三千である八萬法藏實に廣しと雖も此の空假、中の三諦の外何ものもないのである。一念三千の法門あるもこれが本なり。委細は「十如是事」を見よ、内廿八ノ

もとより月はあり明の空

○如是體　　宋雅

草も木も露のめぐみをうけぬれば
　又春秋のすがたとぞなれ

○如是力　　宗良

川上の千引の石もなかれけり
　波はいくらの力なるらん

○如是作　　雅賢

よつの時種をわかちて誰世より
　つくりそめけん民の草葉も

○如是因　　耕雲

すみにごる心の水の末ならば
　こん世もげにぞ汲てしられん

一にあり。尚細に至らんとせば「一念三千法門」を見よ、（外十七廿五）

○如是縁　　光廣

法はたゝえにしもとめよ吹風を
　まほにうけたる舟をみるにも

○如是果　　為尹

秋ふかみ落るこかげの柴栗の
　この身をしぼる山風ぞふく

○如是報　　為滿

過來つる身のことはざを思ふには
　よそのむくひの程もしらるゝ

○如是本末究竟等　　實隆

何ことも本末ありとしらま弓
　法の道までためしにぞひく

「大覺世尊」とは釋迦如來のこと。
「末顯眞實」とは無量義經說法品第二の文。
「要當說眞實」とは法華經方便品の文
多寶佛とは二頁を見よ。
「皆是眞實」とは法華經見寶塔品の文
「長舌を梵天につぐ」とは法華經如來神力品の時。

‖訓釋‖
具足の道を聞かんと欲す。
「略開三顯一」とは略して開三顯一を說くこと。百二十四頁を見よ
「一念三千」九十六頁を見よ
「舍利弗驚く也」舍利弗
「六十頁を見よ
「轉輪聖王」百六十二頁の轉輪王を見よ

○要當說眞實の事

大覺世尊は四十餘年の年限を指して、その內恒河の諸經を未顯眞實、八年の法華經は要當說眞實と定め給ひしかば、多寶佛は大地より出現して皆是眞實と證明し、分身の諸佛は來集して長舌を梵天に付く、この言赫々たり明々たり青天の日よりも明かに、夜中の滿月の如し、仰いで信せよ、伏して懷ふべし。

（右、開目抄、遺ノ七五一、內二ノ六）

○欲聞具足道の事

法華經方便品の略開三顯一の時、佛略して一念三千心中の本懷を宣べ給ふ事なれば、時鳥の聲をねをびれたる者の一音きゝたるが樣に、月の山の端を出でたれども、薄雲のをほへるが如く、かすかなりしを、舍利弗等驚いて、諸天、龍神、大菩薩等をもよをして、諸天、龍神、等其數恒沙の如し、佛を求むる諸の大數八萬有り、又諸の萬億國の轉輪聖王の至れる、合掌して敬心を以て具足の道を聞かんと欲すと請せしなり、文の心は四味、三教、四十餘年の間いまだきかざる法門うけたまはらんと請せしなり、此文に欲聞具足道と申すは大經に云く、薩とは具足の義に名く等と乃至南無妙法蓮華經これなり。

（右、開目抄、遺ノ七八二、內二ノ四六）

○五千人退座の事

かの五千の上慢は聞いて悟らず、不信の人なり、然れども謗せざりしかば三月を經て佛になりにき、若は信若は不信則ち不動國に生ずと涅槃經に說かるゝはこの人のことなり。

（右、法蓮抄、遺ノ一一五九、內十五ノ十五）

教主釋尊乃至彌勒等之を扶けて諫曉せしむるに尙信せざる者これあり五千席を去り、人天移さる、況正像をや、何に況んや末法の初をや、

（又、觀心本尊抄、遺ノ九三一、內八ノ五）

「上慢」とは具で、四増上慢と云ふ、七慢の一、殊勝の法及び證果を得すして得たりと思ひたかぶること
涅槃經は南本大涅槃經四十卷あり。
「彌勒」三頁見よ

○五千退座

その御法心にいらでいでにしは　前大僧正慈鎮

えぬをえたると思ふ人のみ　寂蓮法師

○時一現耳の事

まれにさく花のにほひに目かれすな

またみちとせをまつもはるけし　前大僧正慈鎮

○出現於世の事

月影の出ずばいかにながめまし

わがやみふかき庭のはちすを　讀み人同じ

○開佛知見の事

世に出でゝ佛の道を開く人は

もとの心のとほるなりけり　讀み人同じ

○唯有一乘法

＝訓譯＝時に一たび現ずるのみ。

「開佛知見」とは四佛知見の一、百二十三頁を見よ

いづくにもわが法ならぬ法やあると

空ふく風にとへどこたへぬ　讀み人同じ

○唯有一乘法の事

いづかたものこさずゆきてたずぬとも

はなはみ法の華ばかりこそ　僧都源信

○無二亦無三の事

妙法のたゞ一つのみありければ

また二つなしまた三つもなし　前大納言行成

○唯此一事實の事

世の中にいでといでます佛をば

唯ひとことのためとしるらん

○此事爲不可の事

法華經に云く、此事爲不可と、佛自ら云ふ、我世に出でゝ華嚴、般若等を說

＝訓譯＝唯だ一乘の法のみ有て

唯有一乘法と信ずるを如說修行の人とは佛は定めさせ給へり（内廿三ノ廿二）

＝訓譯＝二も無く亦三も無し。

＝訓譯＝唯だ此の一事のみ實なり。

＝訓譯＝此の事は爲で不可なり。

「華嚴」四十六頁を見よ

て法華經を說かずして涅槃に入りなば、愛子に財を惜み、病者に藥を與へずして死するが如し、佛自ら地獄に墮つべしと云云不可と申すは地獄の名なり況んや法華經の後、爾前の經に著して法華經へうつらざるものは、大王に民の從はざるが如く、親に子の見えざるが如し。

（右、諫暁八幡鈔、遺ノ二〇三七、内廿七ノ廿一）

○如我等無異の事

經に云く、如我等無異等と云云法華經を心得る者は、釋尊と齊等なりと申す文なり、譬へば父母和合して子を生む、子の身は全體父母の身なり、誰か之を諍ふべき、牛王の子は牛王なり、未だ獅子とならず、獅子王の子は獅子王となる、未だ人王、天王とならず、今法華經の行者は、其中衆生悉是吾子と申して、教主釋尊の御子なり、教主釋尊の如く法王とならんこと、難かるべからず、但し不孝のものは父母の跡をつがず。

（右、日妙上抄、遺ノ八六二、内十九ノ五十七）

不可とは地獄の名也

「爾前」とは、七十七頁を見よ

＝訓譯＝

我か如く等しくして異ること無し。

法華經行者。

＝訓譯＝

我れ昔の所願の如きは今は已に滿足しぬ。

「利生」百五十四頁を見よ

「菩薩」四十六頁を見よ

「阿修羅」九十五頁を見よ

十界皆成

「彼の達多」九十九頁提婆達多參照

「十界皆成」とは十界悉く成佛すること云ふこと十界とは百四十九頁を見よ

「二乘」とは（一）に聲聞乘（二）に緣覺乘なり。

「三敎」とは（一）に漸敎（二）頓敎（三）に不定敎の略語なり。

後五百歲中廣宣流布。

△△△△當體蓮華

○如我昔所願今者已滿足の事

然るに因圓果滿なれば、後の三願は滿ず、利生の一願甚だ滿し難しとなす、かの華嚴の力、十界皆成佛道を成ずること能はず、阿含方等般若も又爾なり後番の五味、皆成佛道の本懷なること能はず、今この妙經は十界皆成佛道なること分明なり、彼の達多、無間に墮するに天王佛の記を授け、龍女成佛し十羅刹女も佛道を悟り、阿修羅も成佛の總記を受け、人、天、二乘、三敎の菩薩、圓妙の佛道に入る、經に云く、如我昔所願今者已滿足化一切衆生皆令入佛道と衆生界盡きざるが故に未だ佛道に入らざる衆生ありと雖も、然れども十界皆成佛すること、唯今經の力にあり、故に利生の本懷なりと云云。

（右、爾前二乘菩薩不成佛抄、遺ノ二九八、内三十八ノ三十五）

久遠實成の釋迦如來は、如我昔所願今者已滿足化一切衆生皆令入佛道とて御願已に滿足して、如來の滅後、後五百歲中、廣宣流布の付屬を說かんが爲に地涌の菩薩を召し出し、本門の當體の蓮華を、要を以て付屬し給ふ文（神力品の如來

「現當二世」百十六頁を見よ

我が昔の願の如きは今者已に満足しぬ。

常に自ら寂滅の相なり。

乃至以二一華一供養於畫像一乃至擎二一手一或復小低頭

日蓮聖人曰く。低頭擧手は是れ緣因の種なり等云々（内十四ノ五十九）

一切所有の法等の文）なれば釋尊出世の本懷、道場所得の秘法、末法の我等が現當二世を成就する、當體蓮華の誠證は此の文なり

（右、當體義抄、遺ノ九九四、内二十三ノ十七）

○如我昔所願今者已滿足　前大僧正慈鎮

かつしかや法の道にぞ渡しける
むかしおもひしまゝのつぎはし　讀み人同じ

○常自寂滅相の事

昔よりこゝろのどかに行舟は
まとひし浪の末をしるぞ知る　藤原秀茂

○一華供養の事

うすすゝぎ御法の花の色はみな
ひとつの蓮の實とぞなるべき　藤原秀茂

○擧手低頭の事

若し是の法を聞くこと有れば皆已に佛道を成ぜん。

深く五欲に著すること犛牛の尾を愛するが如し。

正直に方便を捨て但だ無上道を説くべし。神明は正直の者の頭には住給ふ也、不正直の者の頭には宿り給はず（受三ノ十二）我が滅度の後末法の中に於て大明神と現じ衆生利益をなす。（悲華經）

玉鉾やゆくてに迷ふすさびにも
おがめば佛導き給ふ　慈鎮

皆已成佛道

さま〳〵にうきよの花は匂へども
おなじ佛のみとぞなるべき　西行法師

如犛牛愛尾の事

こりもせず浮世のやみに迷ふかな
身を思はぬは心なりけり

○正直捨方便の事

八幡の御誓願に云く、正直の人の頂を以て栖とし、諂曲の人の心を亭とせず、夫れ月は清水に影をやどす、濁にすむことなし、乃至正直に二あり、一には世間の正直、二には出世間の正直なり。

（右、諫暁八幡抄、遺ノ二〇三八、内二十七ノ廿二）

女人をば河に譬へたり、一切まがれるが故なり、而るに法華經は正直捨方便等、皆是眞實等、質直爲柔輭等申して、正直なること弓の絃をはれるが如く墨の繩をうつが如くなるものゝ信じまゐらする御經なり、糞をば栴檀と申すとも檀栴の香なし、妄語のものをば不妄語と申すとも不妄語にあらず、一切經は皆佛の金口の說、不妄語の御言なり、然れども法華經に對しまゐらすれば、妄語の如く、綺語のごとし、惡口の如く、兩舌のごとし、この御經こそ實語の中の實語にて候へ、實語の御經をば正直のものも心得候なり、今實語の女人にておはすか、當に知るべし、須彌山をいだきて大海を渡る人をば見るとも、この女人をば見るべからず、砂をむして飯となす人をば見るとも この女人をば見るべからず。

（右、日妙抄、遺ノ八六四、内十九ノ五十四）

家隆

○聞是法亦難の事

いく代ふとまれに御法の華のへに

「栴檀」七十頁を見よ

（一切經）九十七頁を見よ

餘經は妄語、綺語惡口、兩舌也

「須彌山」五十一頁を見よ

無量無數劫にも是の法を聞くこと亦難し。

又聞きかたき鷲の聲　俊成

○同　上

はかりなく數なき代々をつくしても

一たび聞くはかたき法なり

○同　上　大僧正慈鎭

のりの道あふれしさにいはつゝじ

かたくも色にいでにけるかな

○方便品のこゝろを　傳敎大師

三つの川一つの海となるときは

舍利弗のみぞまづわたりける

傳敎大師

民部卿爲藤

號して華光如來と日ん。

妙法蓮華經譬喩品第三

○譬喩品　民部卿爲藤

いつまでか我身ひとつの出てがてに
ふるさとかすむ月をみるべき　平宣時朝臣

○同じく

を車ののりのおしへを頼まずば
なほ世にめぐる身とやならまし　入道親王覺譽

○眞是佛子

今ぞ聞く鹿なく野邊に霧はれて
もとこしみちもへだてなしとは　俊成

○號曰華光如來

行末の華の光の名を聞くに

我等も亦是の如く必ず當に作佛することを得べし。

火宅の内に於て嬉戲に樂著して覺らず知らず驚かず怖れず

是の朽故宅は一人に屬せり「三界」廿四頁を見よ「煩惱」八十九頁を見よ

屬于一人

「三千大千世界」五十六頁を見よ「衆生」百十八頁を見よ

かねてぞ春に逢ふ心地する　大僧正慈鎮

○我等亦如是必當得作佛

たかき嶺にさきだつ人を見るからに
我も行くべき道をしる哉　慶政上人

○不覺不知不驚不怖

驚かで今日もむなしくくれぬなり
あはれ浮身の入相の空

○是朽故宅屬于一人の事

此宅とは三界火宅也、火と云ふは煩惱の火也、此火と宅とを屬于一人とて釋迦一佛の御利益也、彌陀、藥師、大日等の諸佛の救護にあらず、釋尊一佛の御化導也、唯我一人能爲救護とは是れなり、此の屬于一人の文を重ねて五の卷提婆品に說いて云く、三千大千世界を觀るに乃至芥子許りも、是れ菩薩の身命を捨てたまふ處に非ざること有ること無し、衆生の爲の故なり、妙樂大

師、屬于一人の文を釋する時、記の五に云く、咸く長者に歸す、一色一香皆然りと判せり、既に咸く長者に歸すと釋して、法界に有としある、一切衆生の受くる苦惱をば釋尊一人の長者に歸すと釋せり、一色一香皆然りとは、法界の千草萬草、飛華落葉の體たらく、是れ皆無常遷滅の質を見て、佛道に歸するも屬于一人の利益也、この利益の本源は南無妙法蓮華經の内證に引き入れしめんが爲なり、所詮末法に入て屬于一人の利益は日蓮が身に當りたり日本國の一切衆生の受くる苦惱は、悉く日蓮が身一人が、屬于一人也。

（日向記廿三丁）

「一色一香」たとひ微薄なる一の色、一の香たりとも中道の理、佛の性を具して居るから皆咸く長者に歸すと云ふ。

飛花落葉　日本國の一切衆生の受る苦惱は悉く日蓮一人が苦也

「衆生」百十八頁を見よ

三界は安きこと無し猶火宅の如し

「三界」廿四頁を見よ

○三界無安猶如火宅の事

三界は安きこと無し猶火宅の如しとは如來の敎へ、所以に諸法は幻の如く化の如しとは菩薩の詞なり、寂光の都ならずば何くも皆苦なるべし、本覺の栖を離れて何事か樂みなるべき、願はくは現世安穩、後生善處の妙法を持つのみこそ、只今生の名聞、後世の弄引なるべけれ、須らく心を一にして、南無妙法蓮華經と、我も唱へ他をも勸めんのみこそ今生人界の思出なるべし。

（右、持法華問答抄遺ノ四七六、内廿一ノ十四）

大僧正慈鎭

猶大字の如し。

大僧正慈鎭

今此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり而も今此の處は諸の患難多し唯だ我れ一人のみ能く救護を爲す。

「華嚴經」四十六頁を見よ

○猶如火宅

まよひゆくうき世の中にもゆる火を

ふるさとゝのみ思ひける哉

○今此三界乃至能爲救護の事

今此の三界は皆是れ我が有なり、其の中の衆生は悉く吾が子なり、と云々敎主釋尊は此功德を法華經の文字となして、一切衆生の口になめさせ給ふ、赤子の水火をわきまへず、毒と藥とを知らざれども、乳を含めば身命をつぐが如し、阿含經を習ふ事舍利弗等の如くならずとも、華嚴經をさとる事、解脫月等の如くならざれども、乃至一代聖敎を胸に浮べたる事、文殊の如くならざれども、一字一句をも之を聞きし人佛にならざるはなし、彼の五千の上慢は聞いてさとらず、不信の人なり、然れど誘せざりしかば三月を經て佛に

「文殊」一頁を見よ

「上慢」九頁を見よ

七歩の蛇

胎内の七日

「教主釋尊」廿三頁を見よ

「此の三義」とは主の義。師の義。親の義。即ち主、師親の三德なり。

なりにき、若は信、若は不信則ち不動國に生るゝと涅槃經に說けるは此の人の事なり、法華經は不信の者すら謗せざれば聞つるが不思議にて佛になるなり、所謂七歩蛇に食れたる人、一歩乃至七歩をすぎず、毒の用不思議にて八歩をすごさぬなり、又胎内の子の七日の如し、必ず七日の内に轉じて餘の形となる、八日をすごさず、今の法蓮上人も亦此の如し、教主釋尊の御功德、御身に入りかはらせ給ひぬ。

（右、法華抄遺ノ一一五九、内十五ノ十五）

阿彌陀佛は此三義ましまさず、而るに三德の佛を閣きて他佛を晝夜朝夕に稱名し、六萬八萬の名號を唱へまします、あゝ不孝の御所作にあらずや、彌陀の願も釋迦如來說かせ給ひしかども、終にくひ返し給ひて、唯我一人と定め給ひぬ、其後全く二人三人と見へ候はず、隨つて人にも父母二人なし、何れの經に彌陀は此國の父、何れの論に母たる旨見へて候や、觀經等の念佛の法門は法華經を說かせ給はん爲のしばらくのしつらひなり、塔をくまん爲の

狂歌。「方便を一ぱい空也上人の調子にのりのおどり念佛」

「中有」廿五頁を見よ

「三惡道」五十二頁を見よ

「阿防羅殺」九十五頁を見よ

「教主釋尊」とは釋迦のことなり教主とは一切衆生の教主なる故、八萬法藏廣大なるも皆釋迦一佛の教なる故に名く、釋尊とは釋迦牟尼世尊の略語なり。

「五百塵點劫」百十頁を見よ

足代の如し。

（右、賴基陳狀、遺ノ一六一二、内二十九ノ十六）

現在の主師親たる、釋迦佛を閣きて、他人たる彌陀佛の十萬億の他國へにげ行くべきよしをねがはせ給ひ候、阿彌陀佛は親ならず、主ならず、師ならず、されば一經の内虛言の四十八願を立て給ひたりしを、愚かなる人實と思ひて、物狂はしく金拍子をたゝき、おどりはねて、念佛を申し、親の國をばいとひ出でぬ、來迎せんと約束せし阿彌陀佛の約束の人は來らず、中有のたびのそらに迷ひて、法謗の業にひかれて、三惡道と申す獄屋へおもむけば、獄卒、阿防、羅刹悅びをなし、とらへからめて、さいなむ事限りなし。

（右新池抄、遺ノ一八四六、内三十六ノ十）

此土の我等衆生は五百塵點劫より已來、教主釋尊の愛子なり、不孝の失に依つて今に覺知せずと雖も他方の衆生には似るべからず、有緣の佛と結緣の衆生とは譬ば天月の清水に浮ぶが如く、無緣の佛と衆生とは譬ば聾者の雷の聲

三界とは欲界。色界。無色界の事
【欲界】に四欲あり(一)には飲食(二)には睡眠(三)には婬(四)には情なり諸欲を以て充滿せるが故に欲界と名くる也。
【色界】とは欲界に勝る果報を世界に別して總じて十六天、十八天あり
【無色界】とは更に進んだ境界であつて色身を有せず心のみ存在して居るなり。

「檀那」百四十頁を見よ

を聞き、盲者の日月に向ふが如し、而るに或る人師は釋尊を下して大日如來を仰崇し或人師は世尊は無縁なり、阿彌陀は有縁なりと、或人師の云く、小乘の釋尊と、此等の諸師並に檀那等釋尊を忘れて、諸佛を取ること、例せば阿闍世太子の頻婆娑羅を殺し、釋尊に背いて、提婆達多に付きしが如し。

（右、法華取要抄、遺ノ一〇三八、内九ノ五）

其故は今此の三界は皆是れ我が有なり、其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり、而も今此の處は諸の患難多し、唯我れ一人のみ能く救護を爲すと說いて、日本國中の一切衆生のためには、釋迦佛は主なり、師なり、親なり、天神七代、地神五代、人王九十代の神と王とすら、猶釋迦佛の所從なり、阿に況んや其神と王との眷屬をや、今日本國の大地、山、河、大海、草、木等は皆釋尊の御財ぞかし、全く一分も藥師佛、阿彌陀佛等の他佛の物にはあらず、又日本國の天神、地神、九十餘代の國主並に萬民、牛馬、生きとし生ける、生ある者は皆教主釋尊の一子なり、又日本國の天神、地神、諸王、萬民

「教主釋尊」廿三頁を見よ
「中有」とは四有の一、前世に死して後未だ次の生を受けざる間をいふ。この間の人類の身量は五六歲位の形にして微細なる浮色を以てなり、肉眼に見ゑず而はその時日は或は七日又は七七日又は無限なりとその說一定せず。

俊成

等の天、地、水、火、父、母、主、君、男、女、妻、子、黑、白等を辨へ給ふは、皆教主釋尊御教の師なり、全く藥師、阿彌陀等の御教にはあらずんば此佛は我等が爲には、大地よりも厚く、虛空よりも廣く、天よりも高き御恩まします佛ぞかし、かゝる佛なれば、王臣萬民倶に、人ごとに父母よりも重んじ神よりもあがめ奉るべし。

（右妙法尼抄、遺ノ一七七四、内十三ノ三十六）

○今此三界の文のこゝろを　　俊成

子を思ふ道こそ聞けばうれしけれ
心のやみもさとりはるなり

○同　　同じ人

みなし子となに思ひけん世の中に
かゝる御法のありけるものを

○同　　家隆

うき世とて身はみなし子となりはてぬ
われまよはすな法のたらちね　同じ人

○同

たらちねの栖家やいづく我子ぞと
聞くに心のゆくかひぞなき　大納言經任

○同

子を思ふ親のおしへのなかりせば
かりのやどりに迷ひはてまし　慈鎮

○貪欲爲本

心からこゑゆく道のくるしきは
嶺の花まで思ふなりけり

○以信得入非己智分の事

譬喩品に云く、汝ぢ舍利弗尙此の經に於ては、信を以て入ることを得たり、

大納言經任

慈鎮

諸苦の所因は貪欲爲れ本なり。

汝ぢ舍利弗、尙此の經に於ては信を以て入ることを得たり、況や餘の聲聞をや其の餘の聲聞をや佛語を信ずるが故に此の經に隨順す、己が智分に非ず。「舍利弗」六十頁を見よ

況んや餘の聲聞をや、文の心は大智舍利弗も法華經には信を以て入る、其智分の力にはあらず、況んや自餘の聲聞をやとなり、されば法華經に來りて信せしかば、永不成佛の名を削りて、華光如來となり、嬰兒に乳を含むるに、其味をしらずと雖も、自然に其身を成長す、醫師が病者に、藥を與ふるに、病者藥の根源をしらずといへども、服すれば任運と病癒ゆ、若し藥の源をしらずと云つて、醫者の與ふる藥を服せずば、其病癒ゆべしや、藥を知るも知らざるも服すれば、病の癒ゆることを以て是れ同じ、既に佛を良藥と號し、法を良藥に譬へ、衆生を病人に譬ふ、されば如來一代の敎法を、擣篩和合して、妙法一粒の良藥に丸せり、豈に知るも知らざるも、服せんもの、煩惱の病癒えざるべしや、病者は藥を知らず、病をも辨へずとも、服すれば必ず癒ゆ、行者も亦然なり、法理も知らず、煩惱をも知らずといへども、只信ずれば、見思、塵沙、無明の三惑の病を同時に斷じて、實報寂光の臺にのぼり、本有三身の膚を磨かんこと疑ひあるべからず。

「煩惱」八十九頁を見よ

若し人信ぜずして此の經を毀謗せば乃至其人命終て阿鼻獄に入らん

「六道」とは（一）地獄（二）餓鬼（三）畜生（四）修羅（五）人間（六）天上「多寶」七十一頁を見よ

「源空」法然房のこと、淨土宗の開祖長承二年四月七日美作國久米の南條に生る、建永の年讃岐に配流せられ、建暦元年赦されて京にかへり、翌二年洛東大谷寺にて入滅す、年正に八十

（一）慈恩大師（二）太宗皇帝（三）玄奘三藏「爾前」七十七頁を見よ

「天臺大師」「地獄」百十七頁を見よ

「法多種」のこと「華嚴經」四十六頁を見よ

「惡道」とは善道の對、惡業に引かれて到るべき處、六道の中地獄、餓鬼畜生を三惡道といふ。

「餓鬼道」墮す「八道」三塗。三惡

「餓鬼」六趣の一、此の界の有情は常に饑餓に苦むが故に名くなり。地下五百由旬の闇冥の界を本とす、此の有情は大別して三種あり（一）は罪業深重の者永劫に飢渴の苦を受くること（二）は人前の名だに聞かず糞穢を儲ひて食す（三）は一時飽食すること有り。惡業を道り性、慳貪なる者は此の文句の三の細に墮す委を見よ

○毀謗此經の事

（右、聖愚問答抄、遺ノ五八〇、外一ノ五十一）

亦法華經誹謗の相貌は四十餘年の諸經の如く、小善成佛を以て、別時意趣と定むる等なり、故に天臺の釋に云く、若し小善成佛を信ぜずんば、則ち世間の佛種を斷ずるなりと、妙樂重ねて此義を宣べて曰く、此經は遍く六道の佛種を開す、若し此經を謗せば義斷に當るなりと、釋迦多寶十方の諸佛、天親天臺、妙樂の意の如くんば、源空は法謗の者なり、所詮選擇集の意は人をして、法華眞言を捨てしめんと定め書き了ぬ、法謗の義疑ひなきものなり。

（右、國家論、遺ノ二三八、内ノ十ノ二十五）

慈恩大師は玄賛十卷を作りて、法華經を讃めて、地獄に墮つ、此人は太宗皇帝の御師、玄奘三藏の上足、十一面觀音の後身と申すぞかし、音は法華經に似たれども、心は爾前の經に同ずる故なり、嘉祥大師は、法華玄論十卷を作りて、既に無間に墮つべかりしが、法華經を讀むことを捨てゝ、天臺大師に

仕へしかば、地獄の苦を免れ給ひき。

（右、簡御器抄、遺ノ一九三六、内廿一ノ二十四）

法謗多種なり、大小流布の國に生れて、一向に小乘の法を學して身を治め、大乘に遷らざる是れ法謗なり、亦華嚴、方等、般若等の諸大乘經を習へる人も、諸經と法華經と同等の思ひを作し、人をして同等の義を學ばしめ、法華經に遷らざる是れ法謗なり、亦偶圓機ある人の法華經を學ぶをも我法に付けて、世利を貪るが爲に、汝が機は法華經に當らざる由を稱して、此經を捨てしめ、權經に遷らしむるは是れ大法謗なり、此の如き等は皆地獄の業なり

（右、明因果抄、遺ノ三一〇、内十六ノ二十二）

法華經に云く、若し人信ぜずして此經を毀謗せば乃至常に地獄に處することを園觀に遊ぶが如く、餘の惡道に在ることが己が舍宅の如しと、慳貪、偷盜、等の罪によりて餓鬼道に墮することは世人知り易し、慳貪等なき諸善人も法謗により、亦法謗の人に親近し、自然に其義を信ずるに依て、餓鬼道に墮す

ることは智者にあらざれば之を知らず、能く〳〵恐るべき歟。

（右、明因果抄、愚ノ三一二、内十六ノ二十五）

白癩の病を得ん

法華經に云く、若し人信せずして此經を毀謗せば乃至若し人と爲ることを得ては、諸根闇頓にして、盲聾背傴ならん乃至口の氣常に臭く、鬼魅に著せられん、貧窮下賤にして人に使はれん、多病羸瘦にして依怙する所なく乃至若は他の反逆し、抄劫し、竊盗せん、是の如き等の罪横に其殃に罹らん文八の卷に云く、若し復是の經典を受持するを見て、其過惡を出さん、若は實にもあれ、若は不實にもあれ、此人は現世に白癩の病を得ん、若し之を輕笑することあらんものは、當に世々に牙齒疎缺醜き唇、平める鼻、手脚繚戾し、眼目角膝に身體臭穢にして、惡瘡、膿血、水腹、短氣諸の惡重病あるべし

（右、十法界明因果抄、遺ノ三一四、内十六ノ二十八）

但だ樂て大乘經典を受持して乃至餘經の一偈をも受けず。

○但樂受持大乘經典乃至不受餘經一偈の事

或は法華經を行ずる人の、一口は南無妙法蓮華經、一口は南無阿彌陀佛なんど申すは、飯に糞を雜へ、沙石なんど入れるが如し、法華經の文に但だ大乘の經典を受持することを樂ふて乃至餘經の一偈をも受けずと說くは是れなり世間の學匠は、法華經に餘行を雜へて苦しからずと思へり、日蓮もさこそ思ひ候へども、經文は爾らず、譬へば后の大王の種子を妊めるが、又民とともつけば、王種と民種と雜りて、天の加護と氏神の守護とに捨てられて、其國破る緣となる、父二人出來れば王にもあらず、民にもあらず、人非人なり、法華經の大事と申すは是れなり、種熟脫の法門、法華經の肝心なり、三世十方の佛は必ず妙法蓮華經の五字を種として、佛に成り給へり、南無阿彌陀佛は佛種にあらず、眞言五戒等も種ならず、能く〳〵この事を習ひ給ふべし。

（右、筒御器抄、遺ノ一九三〇内三十ノ十六）

王種と民種

破國の緣

種熟脫の法門百十四頁を見よ

「三世」過去、現在未來を云ふ

「十方」東、西、南北、四維、上、下を云ふ。

「五戒」三十三頁を見よ

法華一部二十八品の題號の中に信解品の一字より起りて三世の諸佛の一字より成道する也信の字は元品の無明を切る所の剣也信は疑惑を断破する利剣也、疑は迷惑也、解は智慧の名、解は智慧也信は南無妙法蓮華経也、御義口傳上ノ二十五）

「目連」（前六世紀）目犍連、目犍連夜那、摩訶目犍連とも云ふ、梵音マーウドガルヤーヤナ、胡豆、菜茯根、采菽氏などと譯す佛十大弟子の一、名を拘律陀と云ふ始め舍利弗と共に外道に事へたりしが釋尊王舎城説法の時共に各一百の弟子を率いて佛の弟子となれり神通第一と稱せらる、

無量の珍寶求めざるに自から得たり

因行果德の二法

「四大聲聞」卅八頁を見よ

無上の寶聚求めざるに自から得たり

「五戒」とは

（一）不殺生戒

（二）不偸盗戒

（三）不邪婬戒

（四）不妄語戒

（五）不飲酒戒をいふ。

諸國に周流すること五十餘年

崇德院御製

式部太夫廣範

妙法蓮華經信解品第四

○無量珍寶不求自得の事

例せば崑崙山の崩れて、寶の山に入りたる心地してこそおはしぬらめ、されば領解の文に云はく、無上の寶珠、求めざるに自ら得たり等云云。

（右、新講抄、遺ノ八九五、内十六ノ四十二）

四十餘年の座席にありし身子目連等の聲聞乃至法華經を聞いては、無上の寶珠求めざるに、自ら得たりと悅び給ふ。

（右、法華初心成佛抄、遺ノ一六七五、内二十二ノ六）

釋尊の因行果德の二法は、妙法蓮華經の五字に具足す、我等この五字を受持すれば、自然に彼の因果の功德を譲り與へ給ふ、四大聲聞の領解に云く、無上の寶珠求めざるに自ら得たりと。

（右、觀心本尊抄、遺ノ九三八、内八ノ十四）

○無上寶聚不求自得

まよひける心もはるゝ月影に

もとめぬ玉や袖にうつりし

俊成

○同　上

前大僧正慈鎮

まよひ來ておもひもよらぬ深山邊に

やがてまことの道の有ける

○周流諸國五十餘年の事

崇德院御製

○周流諸國五十餘年

かぞふればとおちの里にをとろへて

五十年あまりの年かへりにける

式部太夫廣範

○同　題

今ぞみる五十年あまりの春をへて

わかれしまゝのふる鄕の空

前大納言尊氏

○同　題

五十年までまよひ來にけるはかなさよ

たゝかりそめの草の庵に

参議經盛

○同　題

年ふれて行衛もしらぬたらちねよ

子はいかにして尋ねあひけん

俊成

○同　題

うらやましいそぢの波にしほれも

かひある浦に廻り逢けん

藤原宗秀

○同　題

おろかにてまよひいでにし末にこそ

やがてまことの道はありけり

○止宿草菴の事

前大納言尊氏

参議經盛

藤原宗秀

俊成

仲菴に正宿して自から貪瞋を念ふ我れに此の物なしと

大僧正實超

○上宿艸菴

はかなくも心とめけるいにしへの

かりそめぶしの草の枕に

大僧正慈鎮

○同　上

いかにして都のほかの草の菴に

しばしもとまる身となりにけん

選子内親王

○同　上

その菴に年へしほどの心には

露かゝらんと思ひかけきや

大僧正慈鎮

○淨佛國土の事

○淨佛國土

あたのはな心をしめて詠むれば

佛のやどにともものみやつこ

大僧正實超

選子内親王

佛の國土を淨めん

大僧正慈鎮

久しく梵行を修して今無漏無上の大果を得ん。
了然上人

佛道の聲を以て一切をして聞かしむべし。
慈鎮大僧正

‖訓譯‖

世尊は大恩まします、希有の事を以て憐愍教化したまふ。誰か能く報ずるものあらん、手足をもつて供給し、頭頂をもつて禮敬し、一切をもつて供養すとも皆報ずること能はじ（下略）

○今得無漏無上大果の事　了然上人
○今得無漏無上大果
尋ねつる雲より高き山こして
又うへもなき花を見るかな　大僧正慈鎮
○以佛道聲令一切聞の事
○以佛道聲令一切聞
松風の聲につたふることの葉も
鹿のそのにやなびきそめけむ
○世尊大恩乃至亦不能報の事

四大聲聞の領解の文に云く、我等今は眞に聲聞なり、佛道の聲を以て、一切をして聞かしむべし、我等今は眞に阿羅漢なり、諸の世間、天人、魔梵に於て、普く其中に於て供養を受くべし、世尊は大恩まします、希有の事を以て憐愍教化して、我等を利益し給ふ、無量億劫にも、誰か能く報ずるものあ

信解品偈文。
「四大聲聞」卅八頁を見よ
「阿羅漢」二頁を見よ
「前四味經」とは法華已前の經を云ふなり
「供養」百二十四頁を見よ
迦葉尊者
須菩提尊者
富樓那
「舍利弗」六十頁を見よ
二百五十戒
「鹿野苑」とは又は鹿苑、野苑といふ波羅捺國にある窣苑釋尊成道三七日の後五比丘を教化し給ひたる地名
「四大聲聞」

らん、手足をもつて供給し、頭頂をもつて禮敬し、一切をもつて供養すとも皆報ずること能はず、若は以て頂戴し、兩肩に荷負して、恒沙劫に於て、心を盡して恭敬し、又美膳無量の寶衣、及び諸の臥具、種々の湯藥を以てし牛頭栴檀及び諸の珍寶を以て塔廟を建て、寶衣を地に布き、斯の如き等の事をもつて、供養すること、恒沙劫に於てすとも、亦報ずること能はじ等云々、諸の聲聞等は前四味の經々にいくばくその呵責を蒙り、人天大會の中にして、恥辱がましきこと其數を知らず、然れば迦葉尊の涕泣の音は三千をひゞかし、須菩提尊者は茫然として、手の一鉢をすつ、舍利弗は飯食を吐き富樓那は畫瓶に糞を入ると嫌はる、世尊鹿野苑にして阿含經を讃歎し、二百五十戒を師とせよなんど、慇懃にほめさせ給ひて、今又いつのまに我所說をばかうはそしらせ給ふ。云々

（右、開目抄、遺ノ七七六、内二ノ三十八）

此經文は四大聲聞が譬喩品を聽聞して、佛になるべき由を心得て、佛と法華

(一)舍利弗
(二)目連尊者
(三)迦葉尊者
(四)阿羅漢者
「聲聞」とは百六十頁を見よ

「二乘」十三頁を見よ

經との恩の報じがたき事を說けり、されば二乘の御爲には此經を行ずる者を
ば、父母よりも、愛子よりも、兩眼よりも、身命よりも、大事にこそおぼし
めすらめ。

（右、新藏抄、遺ノ八九四、內十六ノ四十）

止觀の五に云く、香城に骨を粉き、雪嶺に身を投ぐとも、亦何を以て德を報
ずるに足らんやと云へり。

（右、身延記、遺ノ一三〇〇、內十八ノ四）

源信僧都

妙法蓮華經藥草喩品第五

讀人不識

○藥草喩品

諸共に一味の雨はかゝれども
松はみどりに藤はむらさき

源信僧都

○同　上

おなじこと一味の雨の降りぬれば
草木も人も佛とぞなる

おなじひと

○同　上

ひとゝきにそゝぎし雨のうるひつゝ
三草二木も枝さしてけり

おなじひと

○同　上

大空の雨はわきてもそゝがねど

攝政太政大臣

うるふ草木はをのがさま〳〵

○同　上

法性寺入道前攝政太政大臣

慈覺大師

法の雨はあまねくそゝぐ物なれど

うるふ草木はをのがしな〳〵

○同　上

慈覺大師

崇德院御製

雲しきて降る春雨はわかねども

秋のかきねはをのがいろ〳〵

○同　上

崇德院御製

大僧正行尊

さま〳〵にちぐの草木の種はあれど

ひとつの雨にぞめぐみ初めぬる

○同　上

大僧正行尊

草も木も種はひとつをいかなれば

二葉三葉にめぐみ初めけん

現世は安穩にして後に善處に生ぜん

相構へて心を翻へさず一筋に信じ給ふならば現世安穩後生善處なるべし（外九上野抄）

大地はさゝばはづるとも虛空をつなぐ者はありとも潮のみちひぬ事はありとも日は雲り出るとも法華經の行者の祈りの叶はぬ事はあるべからず（内十六の五十六）

「靈山淨土」とは極樂淨土に同し

吹く風も枝をならさぬ行末はちらぬ華をや宿にながめむ（慈鎭）

○現世安穩後生善處の事

先づ生前を安んじて更に沒後を扶けん。

（右、立正安國論、遺ノ三九一、内一ノ二十五）

今生には祈りとなり、財となり、御臨終の時は月となり、日となり、道となり、橋となり、父となり、母となり、牛馬となり、輿となり、車となり、蓮華となり、山となり、二人を靈山淨土へ迎へ取りまゐらせ給ふべし、南無妙法蓮華經。

（右、單衣抄、遺ノ一三一三、内十八ノ十四）

但し又法華經は、今生の祈りとなり候なれば、もしやとしていきさせ給ひ候はゞ、あはれとく〳〵見參して、みづから申しひらかばや、語はふみつくさず、ふみは心をつくしがたく候へば、とゞめ候ひぬ、恐惶謹言。

（右、南條抄、遺ノ五二五、内三十一ノ十八）

吹く風枝をならさず、雨壞を碎かず、代は義農の世となりて、今生には不

祥の災難を拂ひ、長生の術を得、人法共に、不老不死の理り顯れん時を各御覽せよ、現世安穩の證文疑ひあるべからざるものなり。

（右、如説修行抄、遺ノ九六八、内二十二ノ三十一）

前大僧正慈鎮

○現世安穩後生善處

吹く風も枝をならさぬ行末は
ちらぬ華をや宿にながめむ

○衆生種相の事

此の衆生の種相

就類種
相對種

種の一字に二あり、一には就類種、二には相對種なり、其就類種とは、釋に云く、凡そ心ある者は是れ性(正)因の種なり、隨つて一句を聞くは是れ了因の種なり、低頭擧手は是れ緣因の種なり、等云々其相對の種とは煩惱と業と苦との三道、その當體を押へて、之を法身、般若、解脫と稱する是れなり、乃至 又法華經の迹門の中の供養舍利已下の二十餘行の法門も、大體就類種の開會なり。

「迹門」百五十六頁を見よ
迹門の中の供養舍利已下二十餘行

「煩惱」八十九頁を見よ

煩惱。業。苦

「煩惱」八十九頁を見よ

二乘の卽身の成佛

「二乘」十三頁を見よ

されば、とて煩惱、業、苦が三身の種とはなり候はず、今法華經にして、有餘無餘の二乘が、無き煩惱、業、苦をとり出して、卽身成佛と說き給ふとき、二乘の卽身成佛するのみならず、凡夫も卽身成佛するなり。

（右、太田女房御返事、遺ノ一、二七一、内三十八ノ二十六）

大僧正慈鎮

○普皆平等の事

普皆平等
けふの空にあまねくそゝぐ雨の色は
みな人ごとの心にぞそむ

○無有彼此愛憎之心の事

無有彼此愛憎之心
春雨はこのもかのもの草も木も
わかす綠に染むるなりけり

皇太后宮大夫俊成

普く皆平等して

大僧正慈鎮

彼此愛憎の心有ること無し。

皇太后宮大夫

大僧正公豪

利根にも鈍根にても等しく法雨を雨らさん。「阿耨多羅三藐三菩提」九十五頁を見よ

「凡夫二乘」を五十三頁の二乘凡夫を見よ

汝等の所行は是れ菩薩の道なり漸々に修學して悉く當に成佛すべし。

大僧正慈鎮

同　上

おなじ野にわかぬ時雨は染むれども
草も木の葉も色かはりつゝ

大僧正公豪

○利根鈍根等雨法雨の事

利根鈍根に等しく法の雨を雨すと説いて、一切の菩薩、阿耨多羅三藐三菩提は皆此經に屬せりと説くは何に、是等の文の意は利根にてもあれ、鈍根にてもあれ、持戒にてもあれ、破戒にてもあれ、貴きもあれ、賤しきもあれ、一切の菩薩、凡夫、二乘は法華經にて成佛得道なるべしと云ふ文なるをや。

（右、法華初心成佛抄、遺ノ六七七、内廿二ノ八）

○汝等所行是菩薩道の事

汝等所行是菩薩

大僧正慈鎮

鹿の園にながめし花の色ながら
露もかはらぬ春の大山路

法性寺入道前攝政太大臣

右京大夫

後嵯峨院

妙法蓮華經授記品第六

○授記品

法性寺入道前攝政太政大臣

種くちし佛のみちにきらはれし
人をもすてぬ法とこそきけ

右京大夫秀能

○同　上

み草のみしげき濁りとみしかども
さても月すむ江にぞありける

後嵯峨院御製

○同　上

ふけゆかば出づべき月と聞くからに
かねてこゝろの闇ぞはれぬる

讀み人しらず

○同　上

行末を聞くうれしさにこしかたの

魔事有ること無し魔及魔民有りと雖も皆佛法を護らん　前大僧正慈鎮

うかりしよりもぬるゝ袖かな

○無有魔事の事

無有魔事

目に見えずあやしと思ふたぐひまで　前大僧正慈鎮

けふの御法を守るべき哉

○如從飢國來忽遇大王膳の事

飢たる國より來て忽に大王の膳に遇ふが如し。爾前の人は餓鬼也（餓鬼十八頁參照）（爾前七十七頁を見よ）

爾前の國は貧國なり、爾前の人は餓鬼なり、法華經は寶の山なり、富める人なり、問て云く、爾前を貧國と經文如何、答て云く、授記品に云く、飢たる國より來りて忽ちに大王の膳に遇が如し等○云云

心尚憂懼を懷く　前大僧正慈鎮

○心尚懷憂懼の事

心尚懷憂懼

さとりゆく人はふたりになりにけれ　前大僧正慈鎮

うらやましきにぬるゝ袖かな

末來世に於て成佛すること を得べし。　俊成

○於未來世成得成佛の事

於未來成得成佛

いかばかり嬉しかりけんさらでだに

こん世のことのしらまほしきに　俊成

○同題　定家

行末はついにほとけのくらゐ山

かひある名をやけふは聞くらん　定家

我れ及び汝等が宿世の因緣。　法印公超

○宿世因緣の事

宿緣

結びおく世々の契もふかくさの

露のかゝとにぬるゝ袖かな　法印公超

妙法蓮華經化城喩品第七

○觀彼久遠猶如今日の事　　大僧正慈鎮

觀彼久遠猶如今日

する墨のいふ計りなきいにしへも

けふかきつくる心地こそすれ

||訓譯||我れ如來の知見力を以ての故に彼の久遠を觀ること猶今日の如し。

○從冥入於冥の事　　惟空上人

從冥入於冥

||訓譯||冥より冥に入る。

頼むべし闇よりやみにうつるとも

影にかげそふ月も出なん　　雅致三女式部

同題

くらきよりくらき道にぞ入りぬべき

はるかに照せ山の端の月

○返し　　惟空上人

かくばかりくらきに迷ふ身なりとも

照さゞらめや山の端の月

○以大慈悲力度苦惱衆生の事　　俊成

以大慈悲力度苦惱衆生

大慈悲の力を以て苦惱の衆生を度したまへ　　俊成

世の中のくるしき道はあはれみの

ちから車のはこぶなりけり

○願以此功德の事　　慈鎮

願以此功德

願くは此の功德を以て普く一切に及ぼし我等と衆生と皆共に佛道を成ぜん。　　慈鎮

おこなひのはてにとなふることくさを

うへける袖や天の羽衣

○西方二佛一名阿彌陀の事

其の二人の沙彌は東方にして作佛す一を阿彌陀と名く。歡喜國に在す。二を須彌頂と名く。

三の卷の心ならば、阿彌陀等の十六の佛は、昔大通智勝佛の御時、十六の王

東南に二佛。一を師子音と名け、二を師子相と名く、南方に二佛、一を虛空住と名け、二を常滅と名く、西南に二佛、一を帝相と名け、三を梵相と名く、西方に二佛、一を阿彌陀と名く、二を度一切世間苦惱と名く、北方に二佛、一を多羅跋南檀香神通と名け、二を須彌相と名く、北方に二佛、一を雲自在と名け、二を雲東北方の佛を瓔珞切世間飾と名く、第六は我れ釋迦牟尼佛なり此の娑婆國土に於て阿耨多羅三藐三菩提を成ぜり。以上十六王（御講口傳上三十六）

子として、法華經を習ひて、後に正覺をならせ給へりと見えり。

（右、題目彌陀名號勝劣抄、遺ノ四九二、内十八ノ四十二）

第二の化道の始終の時、過去の世に於て、法華經結緣の輩あり、爾前の中に於て、且く法華の爲に、三乘當分の得度を許す、所謂種熟脫の中の熟益の位なり、是は尙迹門の說なり、本門觀心の時は是れ實義にあらず、一往許すのみ、其實義を論ずれば、如來久遠の本に迷ひ、一念三千を知らざれば、永く六道の流轉を出づべからず。

（右、十法界抄、遺ノ二八九、内三十四ノ二十九）

阿彌陀と云ふも、觀經の阿彌陀佛にはあらず、所以に觀經の阿彌陀佛は、法藏比丘の阿彌陀、四十八願のあるじ、十劫成道の佛なり、法華經にも迹門の阿彌陀は、大通智勝佛の十六王子の、第九の阿彌陀にて、法華經大願のあるじの佛なり、本門の阿彌陀は、釋迦分身の阿彌陀なり、隨つて釋にも更に觀經等を指すべからずと釋し給へり。

寶處は近きに在り

康資王母

源光俊

赤染衞門

○寶處在近の事

法華經の寶處を知らずんば、同居の淨土、方便土の淨土へも至るまじきなり

（右、戒體卽身成佛義、遺ノ一三、内卅九ノ十七）

○化城寶所の譬

康資王母

みちとほみ中天にてや歸らまじ
思へばかりの宿ぞうれしき

○同じく

源光俊

ゆくべしといひてはつひに歸らまし
ひなの長路に宿なかりせば

○同じく

赤染衞門

こしらへてかりのやどりにやすめずば
眞の道をいかでしらまし

（右、初心成佛抄、遺ノ一六八七、内二十二ノ二十一）

大僧正慈鎮

○同じく

のりの道にけふかり初の草枕　大僧正慈鎮

結びし末の宿ぞうれしき

○同じく　讀み人同じ

思ふなようき世の中を出ではてゝ

やどる奥にも宿はありけり

源三位頼政

○同じく

かりの屋にしばしやすむるしるべあれば

つひに眞の道に來にけり

西行法師

○同じく

やすむべき宿をば思へ中空の

旅もなにかはくるしかるべき

在在諸佛土常與師俱生

○在在諸佛土常與師俱生の事

蓮生法師

以是本因緣今說法華經

大僧正慈鎮

在在諸佛土常與師俱生　蓮生法師

おしへ置く露のかゝとを便りにて

ひとつ草葉にやどる月影

○以是本因緣今說法華經の事

以是本因緣今說法華經　大僧正慈鎮

みぬ昔はるかに結ぶ岩代の

松の契もいまやとくらん

妙法蓮華經五百弟子授記品第八

家定　○五百品のこゝろを　定家

源信僧都　戀しとてこがるゝ色もあらし吹く
　はゝそが原に人も宿らで　源信僧都

法性寺入道　○同　上
　玉かけし衣のうらをかへしてぞ
　おろかなりける心をばしる　法性寺入道前攝政太政大臣

靜圓僧正　○同　上
　きてつぐる人なかりせば衣手に
　かゝる玉をも知らずやあらまし　靜圓僧正

靜圓僧正　○同　上
　吹きかへすわしの山風なかりせば

祐盛法師　衣の裏の玉を見ましや　祐盛法師

○同　上
　立ちかへりとはずばいかでから衣
　うらにかけたる玉もしらまじ　赤染衛門

赤染衛門　○同　上
　醉のうちにかけし衣の珠ぞとも
　昔の友にあひてこそきけ　俊成

俊成　○同　上
　うちなりし玉とも象てしらざりき
　醉さめてこそ嬉しかりけれ　前權僧正快雅

前權僧正快雅　○同　上
　嬉しさに袖につゝみし玉ぞとも
　けふこそ聞きて身にあまりぬる

平垣正

○同　上

衣手にありとしりぬる嬉しさに
涙の玉をかけぞうえつゝ

性殿法師

○同　上

いつかけし衣のうらの玉とだに
知らでうき世に迷ひきぬらん

寂蓮法師

○同　上

おろかなる涙をかけて歎くかな
衣のうらの玉をしらねば

九條左大臣

○同　上

涙をや衣の玉と結びけん
ありと聞くよりぬるゝ袖かな

平垣正

性殿法師

よみ人知らず

寂蓮法師

九條左法臣

行尊大僧正

おろかなる心からこそ我が袖に
かけゝる玉を涙とは見れ

○同　上

衣手につゝみし玉のあらはれて
うらなく人にみゆるけふかな

西行法師

○同　上

おのづからきよき心にみがゝれて
玉ときかくる法をしるかな

法印憲實

○同　上

まよひこし玉の行衛もあらはれぬ
身を空蟬のうすき袂に

大僧正慈鎮

○同　上

袖の上の露のまよひをうちかへし

行尊大僧正

西行法師

法印憲實

大僧正慈鎮

衣のうらのたまを見る哉　　權僧正永緣

○同　上

いかにして衣の玉をしりぬらむ
思ひもかけぬ人もある世に　　慈惠大僧正

○同　上

夢さめて衣のうらを今朝みれば
玉かけながら迷ひぬるかな

○内秘菩薩行外現是聲聞の事

舍利弗、目連等は現在を以て之を論ずれば、智慧第一、神通第一の大聖なり過去を以て之を論ずれば、金龍陀佛、青龍陀佛なり、未來を以て之を論ずれば、華光如來、靈山を以て之を論ずれば、三惑頓盡の大菩薩、本を以て之を論ずれば、内秘外現の古菩薩なり

（右、法華取要抄、遺ノ一〇四一、内九ノ十）

内に菩薩行を秘し外に是れ聲聞なりと現ず但だ示して聲聞となるのみに非ず外道及び三毒の凡夫と作る、身子は瞋を示し、難陀は貪を示し、調達は痴を示す（文句七）「三惑」七十八頁を見よ「舍利弗」六十頁を見よ「目連」三十二頁を見よ

○内秘菩薩行外現是聲聞　　大僧正慈鎮

山の端の月にぞのりししばしこそ
野べ行く鹿にかくる小車

○其不在此會汝等爲宣說の事

其不在此會汝等爲宣說　　大僧正慈鎮

法の花ちれどもうせぬ物なれば
けふみぬ人になほもつたへよ

○世尊於長夜常愍見敎化の事

世尊於長夜常愍見敎化　　俊成

ながき夜も猶さてのみやすぐさまし
哀れとみつゝおしへざりせば　　俊成

内秘菩薩行外現是聲聞　大僧正慈鎮

世尊於長夜常愍見敎化　俊成

學とは法也無學とは妙也所謂南無妙法蓮華經也（御義口傳上卅九丁）

前中納言定家

我願既滿衆望亦足

大僧正慈鎮

壽命無有量以慰衆生故

俊成

妙法蓮華經授學無學人記品第九

前中納言定家

○人記品

諸ともに思ひそめける紫の
ゆかりの色もけふぞしらるゝ

大僧正慈鎮

○我願既滿衆望亦足の事

我願既滿衆望亦足

俊成

我ねがひみちて嬉しきまとゐ哉

誰ものぞみのかなふ筵に

○壽命無有量以慰衆生故の事

壽命無有量以慰衆生

かぎりなき命となるもなべて世の
ものゝ哀をしればなりけり

令我念過去無量諸佛法如今日所聞

慈鎮大僧正

學無學二千人聞佛授記歡喜踊躍

○令我念過去無量諸佛法如今日所聞の事

令我念過去無量諸佛法如今日所聞

讀み人不知

昔いま鏡をかけてしるのみか
行末とても曇りやはする

大僧正慈鎮

○二千人の得記

さきの人なにかへだてむおなじとき
みな佛にしならんとすれば

法師品御義口傳に曰く妙法の法師なれば十界皆妙法受持の一句一偈の法師也蓮華の法師なれば十界三千清淨の法師也十界の衆生の色法は能持の人也十界の心性は所持の法也、仍て色身共に法師にして自行化他を顯す也、謂ふ所の南無妙法蓮華經の法師なるが故也云云(御義口傳上四十)

‖訓譯‖一念も隨喜せん者には我れ皆授記を與ふ。隨喜とは隨順の義也(內、十一ノ二十六)受持とは法を受け持つ、讀とは經文を見てよむ、誦とはそらでよむ、解說とは人の爲めに解き說く、書寫とは經文を書きうつすこと是を五種の修行と云、この修行する人は五種法師である。

妙法蓮華經法師品第十

法師品　傳敎大師

この法をたゞひとことも說く人は

よもの佛のつかひならずや

〇一念隨喜者我皆與授記の事

一念隨喜者皆與授記　實聰大僧正

いつはりのなきことの葉の末の露

後の世かけて契をく哉

〇受持讀誦解說書寫の事

その上五種法師にも、受持、讀、誦、書寫の四人は自行の人なり、大經の先の四人は解り無きものなり、解說は化他、後の五人は解り有る人と證し給へり。

法師の事法とは諸法也師とは諸法直に師となり弟子となるべき也今日蓮等の類は南無妙法蓮經と唱へ奉れば法師の中の大法師也諸法實相の開覺顯れて見れば地獄燈燃の猛火乃至佛果に至る迄悉く具足して一念三千の法師也、又曰く法とは題目、師とは日蓮等の類也(御義口傳上、四十)衆生を愍れむが故に惡世に生れて廣く此經を演るなり、廣くとは南閻浮提也、此經とは題目也。(御義口傳上ノ四十)當に知るべし是の人は則ち如來の使なり、如來の所遣として如來の事を行ずるなり。法華經行者は如來の使に來れり、如來とは釋迦如來、事とは南無妙法蓮華經也。(御義口傳上、四十)若し人一の惡言を以て在家、出家の

(右、唱法華題目抄、遺ノ三二八、內、十一ノ廿六)

〇愍衆生故生於惡世廣演此經の事

愍衆生故生於惡世廣演此經　俊成

これぞこのうき世のためとむまれきて

かくは御法を說くとこそきけ

〇當知是人則如來使所遣行如來事の事

經に云く、能く此經を說き、能く此經を持つ人、則ち如來の使なり、八卷、一卷、一品、一偈の人、乃至題目を唱ふる人、如來の使なり、始、中、終、すてずして、大難をとをす人、如來の使なり。

(右四條抄、遺ノ一七九二、內十七ノ四十三)

〇若人以一惡言毀呰在家出家讀誦法華經者其罪甚重の事

一人の持經者を罵る、其罪尙かくの如し、況んや、書を造り、日本國の諸人に罵らしむる罪をや、何に況んや此經を千中無一と定めて、法華經を行ずる

法華經を讀誦する者を、毀謗せん、其の罪甚だ重し。「千中無一」とは法華經を信ずるもの千の中に一人も成佛せずといふて法華經誹謗の語。法謗とは違背の義也。（内十一ノ廿六）

須臾も之を聞けば即ち阿耨多羅三藐三菩提を究竟することを得んこと公澄大僧正

「須臾」とは しばらくの間、一晝夜の三十分の一

而も一劫の中に於て合掌して我が前に在て讃めん、是の偈を以て無數の偈を讃め、佛に由るが故に、無量の功德を得ん、持經者を讃ぜば其の福復彼れに過ぎん。

人に、疑を生せしむる罪をや、何に況んや此經を捨てゝ觀經等の權經に遷らしむる謗法の罪をや。

（右、守護國家論、遺ノ二三八、内十ノ二十五）

○須臾聞之即得究竟の事

須臾問之即得究竟　公澄大僧正

ひと聲をきゝそめてこそ郭公

なくに夜ふかき夢はさめけれ

○而於一劫中合掌在我前以無數偈讃由是讃佛故得無量

功德歎美持經者其福復過彼の事

文の心は釋尊ほどの佛を、三業相應して、一劫が間、ねんごろに供養し奉るよりも、末代惡世に、法華經の行者を供養せん功德はすぐれたりとときかれて候

（右、千日尼抄、遺ノ一二五一、内廿ノ一）

妙樂の云く、若し分に破れ、供養する者は頭七分に破れ、福十號に過ぐと。（十六ノ六十九）說法者を惱亂せば頭破れて七分に作ること阿黎樹の枝の如くならん。（法華經陀羅尼）

「三業相應」とは身口、意に經へたるを云ふ。

「供養」百二十四頁を見よ

「一劫」とは一增一減を云ふ即ち人壽八萬歲より百年に一を減じ又百年に一を減じ斯くして十歲となり十歲より百年に一歲を增し又百年に一歲を增し又增し終に元の八萬歲に歸るを云ふ。

「供養」百二十四頁を見よ

釋迦如來の末法に世のみだれたらん時、王、臣、萬民、心を一にして一人の法華經の行者を、あだまん時、此行者、旱魃の小水に魚のすみ、萬人にかこまれたる鹿の如くならん時、一人ありて、とぶらはん人は、生身の釋迦如來を、一劫が間、三業相應して、供養しまゐらせたらんより、なほ功德すぐるべきよし、如來の金言分明なり。

（右、南條抄、遺ノ一三七五、内廿五ノ廿七）

是れほどに貴き、教主釋尊を一時、二時ならず、一日二日ならず、一劫が間掌を合せ、兩眼を佛の御顏にあて、頭を低れて他事を捨てゝ、頭の火を消さんと欲するが如く、渴して水を思ひ、飢て食を思ふが如く、間なく供養し奉る功德よりも、戲論に一言、繼母をほむる如く、心ざしなくとも、末代の法華經の行者を、讃め供養せん功德は、彼の三業相應の信心にて、一劫が間、生身の佛を供養し奉るに、百千萬億倍すぐべしと說き給ひて候。

（右、法蓮抄、遺ノ一一五五、内十五ノ十）

我が所説の経典、無量千萬億にして、已に説き今説き、當に説かん、而も其中に於て此の法華経最も爲れ難信難解なり。（法華経方便品）已説は法華より已前の四十餘年の諸経を云ふ今説とは無量義経を云ふ當説とは涅槃経を云ふ。（内廿二ノ一）

「章安大師」百六頁

七重の難易

外道　易信難解

小乘　易信難解

大日　難信易解

般若　易信難解

華厳　難信易解

涅槃　易信難解

法華　難信易解

迹門　難信易解

本門　難信難解

○我所説経典無量千萬億已説今説當説而於其中此法華経最爲難信難解の事

法華経法師品に云く、難信難解、寶塔品に云く、二門悉く昔と反すれば難信難解なり、章安大師云く、佛此れを以て大事となす、何ぞ解し易きことを得べけんや、傳教大師云く、此法華経は最も爲れ難信難解なり、隨自意の故に等云云。

（右、觀心本尊抄、遺ノ九三一、内八ノ五）

日蓮謹んで云く、外道の経は易信易解、小乘経は難信難解、小乘経は易信易解、大日経等は難信難解、大日経等は易信易解、般若経は難信難解なり、般若と華厳と、華厳と涅槃と、涅槃と法華と、迹門と本門と重々の難易あり、問ふて云く、此義を知つて何の詮かある、答へて曰く、生死の長夜を照す大燈明、元品の無明を切る大利劒は、此法門に過ぎざるか。

（右、難易抄、遺ノ一九四九、内十七ノ廿五）

難解易入

妙樂大師の釋

當世の責のおそろしさと申し、露の身の消し難きに依りて、或は落ち、或は心ばかりは信じ、或はとからず、御經の文に難信難解を説いて候が、身に當つて貴く覺え候ぞ、謗ずる人は大地微塵の如し、信ずる人は爪上の土の如し、謗ずる人は大海、進む人は一滴。

（右筒御器抄、遺ノ一九三八、内廿一ノ廿六）

問ふて云く、義に難解難入と云へり、世間の人此文を引いて、法華経は機に叶はずと申し候は、道理と覺へ候が如何、答へて云く、謂れなきことなり、其故は此經を能くも心得ぬ人の云ふ事なり、法華より已前の經は解し難く入難し、法華の座に來りては、解し易し入り易しと云ふ事なり、されば妙樂大師の御釋に曰く、法華已前は不了義なるが故に難解と云ふ、則ち今の教には、咸く皆實に入るを指す、故に易知と云ふ文、此文の心は法華より已前の經にては、機つたなくして、解し難く入り難し、今の經に來りては機かしこく成りて、解し易く入り易しと、釋し給へり。

藥王今汝に告ぐ我が所説の諸經而も此の經の中に於て法華最も第一なり

大僧正慈鎮

而も此の經は如來の現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや

天台大師傳教大師（五十一頁を見よ）

「天親」とは世親に同じ百三十一頁の世親を見よ

龍樹（二世紀）梵那伽悩那、又龍猛といふは南印度（或は西印度）の人、

○我所説諸經而於此經中法華最第一の事　（右、初心成佛抄遺ノ一六八七、内廿二ノ廿二）

法華最第一

大僧正慈鎮

春の花秋の野はらを詠め捨て
庭にはちすの花を見る哉

○如來現在猶多怨嫉況滅度後の事

始めに此文を見候ひし時は、さしもやと思ひ候ひしに、今こそ佛の御言は違はざりけるものかなと、殊に身に當つて思ひ知られて候。（右、四恩抄遺の四一九、内四十の三）

天台大師も恐らく、いまだ此經文をよみ給はず、一切世間皆信受せし故なり、傳教大師も及び給ふべからず、況滅度後の經文に符合せざるが故に。（右、單衣抄遺の一三一二、内十八の十三）

況滅度後の大難は、龍樹、天台、天親、傳教、いまだ値ひ給はず、法華經

幼にして顯悟、早く學に當時の諸の人、初は欲の滿足生、情の酒に酔ひ、樂の人にあり、色に耽り、謀りなし、王宮の妃に行き、三友命を損ず、獨逸れて深く欲に耽り、苦本なり、悟り迦毗羅衛に從ひ、小乘の三藏に學ぶ、後雪山の地方に至り、老比丘に遇ひて、大乘經典を授けられ、深く其奥義を極め、龍宮に入りて、殿に遊ぶ、後世は宗の祖師と云ふ、經を將來すと云ふ、後崇めらる、大智度論百卷、十住毘婆沙論十七卷、十二門論一卷、中論四卷、等の著作あり。

「傳教」八十三頁を見よ

＝訓讀＝

陀人の爲に説く者には如來の衣を以て之を覆ふべし、陀方の現在の諸佛に護念せらるゝことを

の行者ならずといはゞいかでか、行者にてをはせざるべき。（右、御難抄、遺の一八七六、内廿二の廿一）

而るに日蓮、二十七年が間、弘長元年辛酉五月十二日に伊豆の國へ流罪、文永元年甲子十一月十一日頭にきずをかほむり、左の手を打ちをらる、同文永八年辛未九月十二日佐渡の國へ配流、又頸の座に臨む、其外弟子を殺され、切られ、追出、くわれう等かずをしらず、佛の大難には及ぶか、勝れたるか、其は知らず、龍樹、天親、天台、傳敎は余に肩を並べがたし。（右、御難抄、遺の一八七六、内廿二の廿一）

爲陀人説者則爲以衣覆之又爲陀方現在諸佛之所護念乃至當知是人與如來共宿則爲如來手摩其頭の事

釋迦、多寶、十方分身の諸佛の、或は共に宿し、或は衣を覆ひ、或は守護せんと、慇懃に説せ給ひしをも、實か虚か知つて信心をも增長せんと、退轉なく勵みし程に、案に違はず、去る文永八年九月十二日に都て一分の失なくし

べし、乃至當に知るべし、是人は如來と共に宿するなり如來の手を以て其頭を摩でたまふ。文永八年九月十二日佐渡流罪。人身受け難く破れ易し。日蓮が頭には大覺世尊かはらせ給ひぬ。

「檀那」百四十頁を見よ

＝訓譯＝

如來の室は一切衆生の中の大慈悲心是れなり、如來の衣は柔和忍辱心是れなり。如來の座は一切法空是れなり。

日蓮が慈悲廣大ならば。

て、佐渡の國へ流罪せられ、外には遠流と聞えしかども、内々は頸を切らんと定めぬ、予は又兼て此事を推する故に弟子に向つて云く、我願既に滿じ、悦び身に餘れり、人身は受け難くして破れ易し、過去遠々劫より、由なき事には身を失ひしかども、法華經の爲に、命を捨てたる事なし。

（右、下山御消息、遺の一五七六、内廿六の卅七）

日蓮が頭には大覺世尊かはらせ給ひぬ、昔と今と一同なり、各は日蓮が檀那なり、爭でか佛にならせ給はざるべき。

（右、乙御前抄、遺の一二九三、内十四の廿一）

○如來室者一切衆生中大慈悲心是如來衣者柔和忍辱心是如來座者一切法空是の事

源遠ければ流れながしといふこれなり、周の代の七百年は、文王の禮孝による、秦の世はどもなし、始皇の左道なり、日蓮が慈悲廣大ならば、南無妙法蓮華經は、萬年の外未來までも流布すべし、日本國の一切衆生の盲目を

「傳教」八十三頁を見よ

極樂百年の修行は穢土一日の功に及ばず。

「龍樹」八十八頁を見よ

「無間地獄」百二十三頁を見よ

建長五年四月廿八日より弘安三年十二月に至る廿八年の間。

日蓮一人の苦と申すべし。

ひらける功德あり、無間地獄の道をふさぎぬ、功此功德は、傳教・天台にも超へ、龍樹、迦葉にもすぐれたり、極樂百年の修行は、穢土一日の功に及ばず、正像二千年の弘通は、末法の一時に劣るか、是れはひとへに日蓮が智のかしこきにあらず、時のしからしむるのみ。

（右、報恩抄、遺の一五〇九、内七の卅五）

今日蓮は去んぬる建長五年癸丑四月二十八日より、今年弘安三年太歲庚辰十二月に至るまで、二十八年が間、又他事もなく、只南無妙法蓮華經の七字、五字を日本國の一切衆生の、口に入れんとはげむ許りなり、此れ卽ち母の赤子の口に、乳を入れんとはげむ慈悲なり。

（右、諫曉八幡抄、遺の二〇三五、内廿七の十八）

涅槃經に云く、一切衆生、異の苦を受くるは、悉く、是れ如來一人の苦なり等云云、日蓮云く、一切衆生の一切の苦を受くるは、悉く是れ日蓮一人の苦と申すべし。

「傳教」八十三頁を見よ

日蓮が法華經の智解は。

「少欲・知足」とは欲を少くして足ることを知るといふ、少欲とは、求めず取らざること、知足とは少を得て悔恨せざるをいふ遺教經より出でたる語。

日蓮が法華經の智解は、天台、傳教には千萬一分も及ぶことなけれども、難を忍び、慈悲のすぐれたる事は、おそれをいだきぬべし。

（右、諦曉八幡抄遺の二〇三八、内廿七の廿二）

よき師とは、指したる世間の失なくして、聊かもへつらふことなく、少欲知足にして、慈悲あらん僧の、經文に任せて、法華經を讀み持つて、人をも勸めて持たせん僧をば、佛は一切の僧の中に、よき第一の法師なりと讃められたり。

（右、開目抄、遺の七七二、内二の廿三）

○漸見濕土泥決定知近水の事

漸見濕土泥決定知近水　　俊成

むさしの丶堀かねの井もある物を
嬉しく水のちかづきにけり

（右、初心成佛抄、遺の一六八一、内廿二の十四）

定家

＝訓讀＝漸く濕へる土を見ては決定して水に近づくを知る。

俊成

同　上　　定家

尋ねゆく清水にちかき道ぞこれ
御法の花の露のした影　　讀人同じ

同　上

尋ねきてちかづく水にしるき哉
まづひらくべき胸の蓮は

○柔和忍辱衣の事

柔和忍辱衣

＝訓譯＝柔和なる忍辱のこころも

藤原伊信

我ためにうきを忍ぶのすり衣
みだれぬ色や心なるらん　　藤原伊信

同　上

墨染の袖をとはゝや法のしに
それぞまことの忍ぶもぢ摺　　慈鎮和尚

慈鎮和尚

〇加刀杖瓦石念佛故應忍の事

加刀杖瓦石念佛故應忍　寂蓮法師

ふかき夜の窓うつ雨に音せぬは
うき世を軒の忍ぶなりけり

〇寂寞無人聲讀誦此經典我爾時爲現清淨光明身の事

慈鎮和尚

草のいほに聲も心もすみぬらし
人は影せぬ光をぞみる

俊成

同　題

とふ人の跡ふき柴の菴にも
さしくる月の光をぞまつ

源信僧都

同　題

しづかにて法とく人ぞたのもしき

源信僧都

〇訓譯〇刀杖瓦石を加ふともに佛を念ずるが故に忍ぶべし

〇訓譯〇寂寞として人の聲無からんに此の經典を讀誦せば我れ爾時爲めに清淨光明の身を現ぜん

われらみちびく使と思へば
静かなるところはやすく有りぬべし
心すまさんかたのなき哉

少僧都源信

同　題

空すみて心のどけきさよ中に
有明の月の光をぞます

選子内親王

同　題

心すむ草の菴の法の水
うれしく月の影やさすらん

後京極

同　題

闇晴れぬ人の心をさそふとて
うき世をめぐる山の端の月

參議雅經

選子内親王

後京極

參議雅經

妙法蓮華經見寶塔品第十一

〇爾時佛前有七寶塔高五百由旬縱廣二百五十由旬
從地涌出住在空中の事

證前の寶塔の上に起後の寶塔あつて、十方の諸佛來集せる、皆我が分身なりとなのらせ給ひ、寶塔は虛空に、釋迦、多寶、座を並べ、日月の靑天に並出せるがごとし、人天大會は星をつらね、分身の諸佛は大地の上、寶樹の下の、師子のゆかにまします、華嚴經の蓮華藏世界は、十方此土の報佛、各々に國々にして、彼の界の佛、此土に來りて、分身をなのらず、此界の佛彼の界へゆかず、但法慧等の大菩薩のみ、互に來會せり、大日經、金剛頂經等の八葉九尊、三十七尊等、大日如來の化身とはみゆれども、其化身三身圓滿の古佛にあらず、大品經の千佛阿彌陀經の六方の諸佛、いまだ來集の佛にあらず、大集經の來集の佛、又分身ならず、金光明經の四方の四佛は化身なり、

訓讀＝爾の時に佛前に七寶の塔有り高さ五百由旬。縱廣二百五十由旬なり。地より涌出して空中に住在す

「多寶」七十一頁を見よ

「師子」七十九頁を見よ

「華嚴經」は龍宮に上本は三十本あり、世界微塵數の品は四十本、中本は十品なり、下本は八品なり、但本は四十品あり、今の本は三十九品あり、舊譯には三十四品あり、舊譯は六品、新譯は八十品、華嚴舊譯は七處八會の說、新譯には七處九會の說と云へり

總じて一切經の中に、各修各行の三身圓滿の、諸佛を集めて、我が分身とはとかれず、これ壽量品の遠序なり、始成正覺四十餘年の釋尊、一劫十劫等已前の諸佛を集めて分身ととかる、さすが平等意趣にも似ず、をびたゞしくをどろかしぬ、又始成の佛ならば、所化十方に充滿すべからざれば、分身の德は備はりたりとも、示現して益なし、天台云く、分身既に多し、當に知るべし、成佛の久しきことを云云、大會のをとろきし意をかゝれたり。

（右、開目抄、遺の七八五、內三の二）

後嵯峨院　御製

〇爾時佛前有七寶塔

いにしへも今もかはらぬ月影を
雲の上にてながめてしかな

同

目もあやに雲井にぞ見るいにしへの
聖のすみし宿のけしきを

前大僧正　慈鎭

「一劫」六十五頁を見よ

小の一劫
一千五百九十九萬八千年

中の一劫
三億一千九百九十六萬年

大の一劫
十二億七千九百八十四萬年

訓讀＝爾の時に佛前に七寶の塔あり

七寶
1 金　2 銀　3 靑色寶　4 水玉　5 靑白色寶　6 瑪瑙　7 赤眞珠

‖訓譯‖爾の時に寶塔中より大音聲を出して善哉善哉釋迦牟尼世尊能く平等大慧敎菩薩法佛所護念妙法華經を以て大衆の爲めに說きたまふ是の如し釋迦牟尼世尊の所說の如きは皆眞實なり。

○爾時寶塔中出大音聲歎言善哉善哉釋迦牟尼世尊
能以平等大慧敎菩薩法佛所護念妙法華經爲大衆
說如是如是釋迦牟尼世尊如所說者皆是眞實の事

敎主釋尊の御語すでに二言になりぬ、自語相違と申すは是なり、外道が佛陀を大妄語の者と笑ひしことこれなり、人天大會けふさめてありし程に、その時に東方寶淨世界の多寶如來、高さ五百由旬、廣さ二百五十由旬、の大七寶塔に乘じて、敎主釋尊の人天大會に自語相違をせめられてとのべ、かうのべ、さま〳〵に宣べさせ給ひしかども、不審猶ほはるべしともみえず、もてあつかひおはせし時、佛前に大地より涌現して虛空にのぼり給ふ、例せば暗夜に滿月の東山より、出づるが如し。

（右、開目抄、遺の七五九、內二の十七）

二佛座を並べしこと、宛も日月の如く、十方分身の諸佛は、高さ五百由旬の寶樹の下に、五由旬の師子の座を並べ敷き、衆星の如く列座し給ひ、四百萬億那由陀の大地に、三佛二會に充滿し給ふ儀式は、華嚴寂場の華藏世界にも勝れ、眞言兩界の、千二百餘尊にも超へたり。

（右、曾谷抄、遺の一一〇二、內廿五の十一）

但し妙法蓮華經皆是眞實の文を以て、迹門に於て爾前の得道を許すが故に爾前得道の義ありと云ふは、此れは是れ迹門を爾前に對して、眞實と說くかを而も未だ久遠實成を顯はさず、是れ卽ち彼の未顯眞實の分域なり。

（十法界抄、遺の二九四、內三十四の卅六）

○以大音聲普告四衆誰能於此娑婆國土廣說妙法華經今正是時の事

法華經の第四寶塔品に云く、その時に多寶佛、寶塔の中に於て半座を分ち釋迦牟尼佛に與ふ、其時に大衆二如來の、七寶の塔の中の、師子の座の上に結跏趺坐し給ふを見たてまつる、大音聲を以て、普く四衆に告げ給はく、誰か能く、此の娑婆國土に於て、廣く妙法華經を說かん、今正しく是れ時なり如來久しからずして、當に涅槃に入るべし、佛此の妙法華經を以て、付屬し

‖訓譯‖爾の時に寶塔中より大音聲を出して善哉善哉釋迦牟尼世尊能く平等大慧敎菩薩法佛所護念妙法華經を以て大衆の爲めに說きたまふ是の如し釋迦牟尼世尊の所說の如きは皆眞實なり。

大音聲は大音聲。法華經は權敎。小音聲は小音聲也。廿八品は大音聲也。題目は大音聲也（中略）今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉れは大音聲也。（御義口傳上四十五）

「二百五十由旬」四十八頁由旬を見よ

一由旬は四十里、三十里、十六里、十里、異說あれど一般には四十里を一由旬として用ひる

先佛已に居し今佛並坐す當佛も亦然なり矣（文句八、三十丁）

由旬の三量
大由旬—八十里
中由旬—六十里
小由旬—四十里
（「華嚴經」「譯名義集」）

七十六頁を見よ皆是眞實と未顯眞實亦門と本門

「迹門」百五十六頁を見よ

「爾前」七十七頁を見よ

‖訓譯‖大音聲を以て普く四衆に告げたまはく誰か能く此の娑婆國土に於て廣く妙法華經を說かんと說かれ時なり。

大論に云く師子の形に非ず師子の座は師子の中の師子を人中の師子と爲すに由る故に佛の所坐は地皆師子と名く也（註法華經四の卅五ウ）

「四衆」とは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を云ふ

第一の勅宣

||訓譯||爾の時に世尊重れて此義を宣べんと欲して偈を說て言はく聖主世尊久しく滅度したまふと雖ども

「龍神」海中に住して雨水を掌る神、不思議力を有す云ふ、畜生界に屬す。

て在ることあらしめんと欲す等云、第一の勅宣なり。

（右、開目抄、遺の七九五、内三の十五）

○爾時世尊欲重宣此義而說偈言聖主世尊雖久滅度の事

又云く、その時に世尊重ねて、此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく、聖主世尊、久しく滅度し給ふと雖も、寶塔の中にましまして、尙法の爲めに來り給へり、諸人云何ぞ、勸めて法にむかはざらむ、又我が分身の諸佛恒沙等の如く來れる、法を聽かんと欲して、各妙なる、土及び弟子衆、天人、龍神、諸の供養の事を捨てゝ、法をして久しく、住せしめんが故に、此に來至し給へり、譬へば大風の小樹の枝を吹くが如し、是の方便を以て、法をして久しく住せしむ、諸の大衆に告ぐ、我が滅度の後、誰か能く、此經を護持し讀誦せん、今佛前に於て、自ら誓言を說けと、第二の鳳詔なり。

（右開目抄、遺の七九六、内三の十六）

第二の鳳詔

○此爲難事宣發大願諸善男子各諦思惟の事

||訓譯||此れは爲れ難事なり宜く大願を發すべし諸の善男子各々諦らかに思惟せよ

「多寶」七十一頁を見よ

六難九易「須彌」とは八十二頁を見よ

第三の諫曉

生盲の者
邪眼の者
一眼の者
各謂自師の者
邊執家の者

多寶如來及び我が身集むる所の化佛當に此の意を知るべし、諸の善男子各諦かに思惟せよ、此れはこれ難き事なり、宜しく大願を發すべし、諸餘の經典、數恒沙の如し、此等を說くと雖も未だ難しとするに足らず、若し須彌をとつて、他方無數の佛土に、擲げ置かんも、亦未だこれ難しとせず、若し佛の滅後、惡世の中に於て、能く此經を說かん、是れ則ち難し、たとひ劫燒に乾きたる草を擔ひ負ふて、中に入つて燒けざらんも、亦未だこれ難しとせず、我が滅度の後に、若し此經を持ちて、一人の爲にも說かん、是れ則ちこれ難し、諸の善男子、我が滅後に於て、誰か能く、此經を護持し讀誦せん、今佛前に於て、自ら誓言を說け等云、第三の諫曉なり、第四、第五の二個の諫曉、提婆品にあり、下にかくべし、此經文の心は眼前なり、青天に大日輪の懸れるが如し、自面に醫あるに似たり、而れども生盲の者と、邪眼の者と、一眼の者と、各謂自師の者、邊執家の者はみがたし、萬難をすてゝ道心あらん者にしるしとゞめてみせん。

幸なる哉一生の内無始の謗法を消滅せんことよ悦ばしひ哉未だ見聞せざる教主釈尊に侍り奉らんことよ

【須彌】とは具には須彌山と云ふ梵音スメール妙高山と譯す一世界の中央と金輪の八の海環りの列り八山海より水面より高さ八萬由旬縱廣又然しり四面各々一色にして東は黄金南は頗梨西は白銀北は瑪瑙日月之諸天之により巡居し六道四聖之により住せり山腰は須彌海なり周圍は四萬由旬なり九山八海七海合すして

（右、開目抄遺七九六、内三ノ十六）

日蓮此の道理を存じて、既に二十一年なり、日來の災、月來の難、此の兩三年の間の事、既に死罪に及ばんとす、今年今月、萬が一も身命を脱れ難きなり、世の人疑ひあらば、委細の事は、弟子に之を問へ、幸なる哉、一生の内に無始の謗法を消滅せんことよ、悦ばしい哉、未だ見聞せざる、教主釋尊に侍り奉らんことよ、願ほくは我れを損する國主等をば、最初に之を導かん、我れを扶くる弟子等をば、釋尊に之を申さん、我れを生める父母等未だ死せざる已前に、此の大善を進めまゐらせん、但今夢の如く、寶塔品の心を得たり、此の經に云く、若し須彌をもつて、他方無數の佛土に擲げ置かんと、亦未だこれ難からず、乃至若し佛の滅後に、惡世の中に於て、能く此經を說かん、則ちこれ難し等云云、傳教大師云く、淺きは易く深きは難しとは、釋迦の所判なり、淺きを去りて、深きに就くは丈夫の心なり。

（右、顯佛末來記遺の九七七、内廿七の廿三）

||訓譯||此の經は持ち難し若しは暫くも持つ者は我れ即ち歡喜す諸佛も亦然なり、是の如き人は諸佛の歎たまふ所なり、「十方、三世」世八頁を見よ

||訓譯||是れ則ち勇猛なり是れ則ち精進なり是れ戒を持ち頭陀を行ずる者と名く

「傳教大師」西暦七百六十七年に生れ同八百二十二年に寂す諱は最澄法師と云ふ日本天台宗の開祖近江滋賀の人なり俗名三津首七歳にして家塾に學び十二歳にして近江國分寺に入り十行表に師とす十九歳にして日枝の山中に入て燭經法華經金光明經讃「般若經」等を讀し後東大寺の戒壇に登り具足戒を受けたる人なり。

此經難持若暫持者我即歡喜諸佛亦然如是之人諸佛所歎の事

慈母深重の經文、心安ければ、唯我一人の御苦しみもかつがつやすみ給ふらん、釋迦一佛の悦び給ふのみならず、諸佛出世の本懷なれば、十方三世の諸佛も悦び給ふべし、我即歡喜、諸佛亦然、と說かれたれば、佛悦び給ふのみならず、神も即ち隨喜し給ふなるべし。

（右、持法問答抄、遺の四七五、内廿一の十三）

○是名持戒の事

傳教大師は、佛の滅後一千八百年像法の末に相當りて、日本國に生れて小乘、大乘、一乘の諸戒一々に之れを分別し、梵網、瓔珞の別受戒を以て、小乘の二百五十戒を破失し、又法華、普賢の圓頓の大王戒を以て、諸大乘經の臣民の戒を責め下す、此の大戒は靈山八年を除いて、一閻浮提の内に、未だ有らざる所の大戒場を叡山に建立す、然る間八宗共に編執を倒し、一國擧げて弟子となる、觀勒の流の三論、成實、道昭の渡せる、法相、倶舍、良辨の傳

三論宗の吉蔵
法相宗の慈恩
華嚴宗の法藏、澄
觀
眞言宗の善無畏
金剛智、不空、
慧果、弘法

「善無畏」九十一頁を見よ

(通申と
(別申

(申と
(不申

「二乘」十三頁を見よ

正像既に過ぎぬれば持戒は市の中の虎の如し。(内十六の五十六)

ふる所の華嚴宗、鑒眞和尚の渡す所の律宗、弘法大師の門弟等、誰か圓頓の大戒を持たざらん、此義に違背するは逆路の人なり、法の戒を信仰するは、傳敎大師の門弟なり、日本一洲、圓機純一、朝野遠近、同歸一乘とは此の謂ひ歟、此の外は漢土の三論宗の、吉藏大師並びに一百人、法相宗の慈恩大師華嚴宗の法藏澄觀、眞言宗の善無畏、金剛智、不空、慧果、日本の弘法、慈覺等の三藏の諸師は、四依の大士にあらざる暗師なり、愚人なり、經に於ては大小權實の旨を辨へず、顯密兩道の趣きを知らず、論に於ては通申と別申とを糾さず、申と不申とを曉らめず、然りと雖も、彼の宗々の末學等此の諸師を崇敬して、之を聖人と號し、之を國師と尊ぶ、今先づ一を擧げんに萬を察せよ。

(右、曾谷抄、遺の一一〇七、内廿五の十九)

人天の揚葉戒の人は、二乘の瓦器、菩薩の金銀戒を具し、菩薩の金銀戒に人天の揚葉二乘の瓦器を具す、餘は以て知んぬべし、三惡道の人は現身に於

「三惡道」とは一に地獄道二に餓鬼道三に畜生道を云ふなり

○○○○○
三惡道の十界

「三惡道」五十二頁を見よ
安然和尚の廣釋「十界」百四十九頁を見よ
「爾前經」七十七頁爾前を見よ

小乘の戒と
大乘の戒
諸戒

迹門の戒と
本門の戒

「五戒」二十頁を見よ
「迹門」百五十六頁を見よ
「爾前」七十七頁を見よ

て戒なし、過去に於て人天に生れし時、人天の揚葉、二乘の瓦器、菩薩の金銀戒を持ち、退して三惡道に墮す、然りと雖も、其功德未だ失せず之あり、三惡道の人、法華經に入る時、其戒之を起す、故に三惡道にも亦十界を具す故に爾前の十界の人、法華經に來至すれば、皆持戒なり、故に法華經に云く是を戒と名くと、安然和尚の廣釋に云く、能く法華を說く是れを持戒と名く、爾前經の如く、師に隨つて戒を持せずとも、但此の經を信ずるが卽ち持戒なり。

(右、十法界明因果抄遺の三二一、内十六の廿九)

今の戒とは小乘の二百五十戒等、並びに梵網の十重禁、四十八輕戒、華嚴の十無盡戒瓔珞の十戒等を捨てゝ、未顯眞實と定め畢つて、方便品に入つて持つ所の五戒、八戒、十善戒、二百五十戒、五百戒、乃至十重禁等なり、經に是名持戒とは則ち此の意なり、迹門の戒は、爾前大小の諸戒に勝ると雖も而も本門の戒に及ばざるなり。

(右、本門戒體抄遺の一八八四、内卅の廿二)

行基大僧正　皇后宮權大夫　顯照法師　僧都覽雅

○妙法蓮華經提婆達多品第十二

行基大僧正

提婆品の心を
法華經をわがえしことは薪こり
　菜つみ水くみつかへてぞえし

皇后宮權太夫師時

同
けふぞ知る鷲の高根にてる月を
　谷河くみし人のかげとは

顯照法師

同
谷水を掬べばうつる影のみや
　ちとせを送る友となりなん

像都覽雅

同
ちとせまで結びし水も露ばかり
　我身のためと思ひやはせし

定家　參議雅經　西行法師　俊成

定家

同
もとめける御法の道のふるければ
　氷をたゝく谷河の水

參議雅經

同
法の水掬びし谷のかげの袖
　千代にいくたびぬれてほしける

西行法師

同
いかにしてきくことのかくやすからん
　あだに思ひてえつる法かは

俊成

同
薪こり嶺のこのみを求めてぞ
　えがたき法はきゝはぢめける

寂蓮法師

法印慶忠

＝訓譯＝王、仙の言を聞て歡喜踊躍し、即ち仙人に隨て所須を供給し、果を採り水を汲み、薪を拾ひ、食を設け、乃至、身を以て身心作務に怠無かりき、千時に孝事すること千歲を經て法の爲の故に精勤し給侍し、令無所乏の事をもしてしき所無から令き。

「阿鼻城百」四十頁を見よ

同

なにとなく涙の玉やこぼれけん
嶺のこのみをひろふ袂に

寂蓮法師

同

法のため身をしたがへし山人に
かへりて道のしるべをぞする

法印慶忠

○王聞仙言。歡喜踊躍。卽隨仙人。供給所須。採果汲水。拾身設食。乃至以身。而作牀座。身心無倦。千時奉事。經於千歲。爲方法故。精勤給侍。令無所乏の事

又佛大國の王と御座せし時は宿善內に催し、月卿雲客の政をも忘れ、百官萬乘に仰がれ給ふ十善の樂も、風の前の燈、あだなる春の夢、離につたふ槿華の日影をまつ程ぞかし、然るに過去の戒善いみじきに依りて、今生には大國の王たりと雖も、無常の殺鬼にさそはれて、一期空しくて後、修すると

殺利、須陀

「阿防殺」九十五頁の「阿防羅殺」參照

「三鈷」とは鐵鋼などにて其兩端、一本にして分れざる也獨鈷と云ひ三叉（ミツマタ）あるを三鈷と云ふ。

阿私仙人

「七珍」とは七寶に同じ七十七頁參照

ころの善なくば、阿鼻大城の炎の底に沈み、殺利も須陀も、かはらぬために、三熱の炎にまじはり、鐵繩五體をしばり、三熱のまろかしを口に入れ、阿防殺三鈷のひしほこを手にとり、邪見の音をあらゝかにして、五體身分を取々に責るならば、音を天に響かして叫ぶとも、地に臥して歎くとも、百官萬乘も來つて助くること無く、親類眷屬も來つて救ふことなからん、又錦帳の內にして、よな〳〵のねざめ牀にして、天にあらば比翼の鳥、地に住まば連理の枝とならんと、月日を送り、年を重ねて、契りし妻子も來つて、訪ふことはあらじなんどゝ、樣々に思ひつゞけ給ひて、自ら藏を開きて、金銀等の七珍高寶を、僧に供養し、象馬妻子を布施し、然して後、大法の螺をふき、大法の鼓を擊つて、四方に法を求め給ふ、爾時に阿私仙人と申す、仙人來つて申しける樣は、實に法を求め給ふ志御座さば、我が云はん樣に仕へ給へと云ひければ、大に悅んで、山に入つては果を拾ひ、薪をこり、菜をつみ、水をくみ、給仕し給へること千歲なり、常に御口ずさみには、情存妙法故身

源有長朝臣

心無懈惓とぞ唱へ給ひける、文の心は、常に心に妙法を習はんと存ずる間、身にも、心にも仕れども、ものうき事なしと云へり、斯の如くして習ひ給ひける法は、卽ち妙法蓮華經の五字なり、その時の王とは、今の釋迦牟尼佛是れなり。

（右、身延記、遺の一二九八、内十八の二）

源有長朝臣

乃至以身而作牀座

仙人の苦のむしろに身をかへて
いかにちとせをしき忍ぶらん

○皆因提婆達多善知識故の事

皆因提婆達多のこゝろを
ありし昔われみちびきし仙人を
けふはあだとや人は見るらん

大僧正慈鎮

○觀三千大千世界乃至無有如芥子許非是菩薩捨身命處爲衆生故

※訓譯※皆提婆達多が善知識に因るが故なり

※訓譯※三千大千世界を觀るに、芥子許りも是れ菩薩にして、身命を捨てたまふ處に非らざることなし。

三千大千世界
小千世界
中千世界
大千世界

（長阿含經）「小千世界」とは一千の須彌山、「中千世界」とは百萬の日月、「大千世界」とは萬億の須彌山、百萬の須彌山、萬億の日月、（以上略記）

※訓譯※又聞て菩提を成すること唯佛のみ當に證知し、我れ大乘の教を聞て苦の衆生を度脫せん

「五障」とは一には梵天王と作ること得ず、二には帝釋、三には魔王、四には轉輪聖王、五には佛身

「三從」一には幼にして父母に從ふ、二には嫁して夫に

經に云く、三千大千世界を觀るに乃至芥子ばかりも、是れ菩薩にして、身命を捨て給ふ處に、あらざること有ること無し文、此三千大千世界は、皆釋迦如來の、菩薩にておはしまし候ひける時の、御舍利なり、我等も此の世界の五味をなめて、設けたる身なれば、又我等も釋迦如來の舍利なり、故に經に云く、今此の三界は皆是れ我が有なり、其中の衆生は悉く是れ我が子なり、等云々、法華經を知ると申すは、此文を知るべきなり。

（右、戒體卽身成佛義、遺の一五、内卅九の廿）

○又聞成菩提唯佛當證知我闡提大乘教度脫苦衆生の事

靈山最上にして卽身成佛せし龍女は、小乘經には五障の雲厚く、三從のきづな強しと嫌はれ、四十餘年の諸大乘經には、或は歷劫修行にたえずと捨てられ、或は初發心の時便成正覺の言も、有名無實なりしかば、女人成佛を許さゝりしに、設ひ人間、天上の女人なりとも、成佛の道には望みなかりしに龍畜下賤の身たる上、女人と生れ年さへいまだゝけず、わづかに八歲なりき

從ふ三には老いて子に從ふ人生れて嬰人の身と作る勿れ、百年の苦樂他人に因る（白樂天）

行淺功深以顯經力

「文殊」一頁を見よ

＝訓譯＝又聞て菩提を成ずること唯だ佛のみ當に證知したまふべし

＝訓譯＝爾の時に龍女一つの寶の珠あり。價値三千大千世界なり、持て以て佛に

かた〳〵思ひもよらざりしに、文殊の教化によりて、海中にして、法師、提婆の中間わづかに、寶塔品を說かれし時刻に佛になりたりし事は、ありがたき事なり、一代超過の法華經の御力にあらずば、いかでか、かくは候べきされば妙樂は、行淺功深、以顯經力とこそ書かせ給へ、龍女は我が佛になれる經なれば、佛の御諫めなくとも、いかでか、法華經の行者を捨てさせ給ふべき、されば自讃歎佛の偈に云く我れ大乘の教を闡ひて苦の衆生を度脫せんと。

又聞成菩提唯佛當證知
誰かしらん我身をひとにいひかけて
よせくる波の底のふかさを

（右、新禱抄遺の九〇〇、內十六の四十八）

大僧正慈鎭

○爾時龍女有一寶珠價値三千大千世界持以上佛佛卽受之の事

娑竭羅龍王は、龍畜の身なれども、子を思ふ志深かりしかば、大海第一

上る、佛卽ち之を受け給ふ。

「如意寶珠」靈妙不可思議なる德ある玉にして梵語の摩尼又は珍多摩尼と云ふ。

＝訓譯＝當時の衆會、龍女の忽然の間に變じて男子と成て菩薩の行を具し卽ち南方無垢世界に往て寶蓮華に坐して等正覺を成じ、三十二相、八十種好あつて普く十方の一切衆生の爲めに妙法を演說するを見る。

改轉の成佛と一念三千の成佛「一念三千」九十六頁を見よ

「娑竭羅」とは梵音サーガラ、海と譯す、八大龍王、一雨を供給する神と

の寶、如意寶珠をも娘にとらせて、卽身成佛の御布施にせさせしなり、此の珠は値三千大千世界にかふる珠なり。

（右、新禱抄、遺の九〇一、內十六の四十九）

○當時衆會皆見龍如忽然之間變成男子具菩薩行卽往南方無垢世界坐寶蓮華成等正覺三十二相八十種好普爲十方一切衆生演說妙法の事

龍女が成佛此れ一人にあらず、一切の女人の成佛をあらはす、法華己前の諸の小乘經には、女人の成佛をゆるさず、諸の大乘經には成佛、往生をゆるすやうなれども、或は改轉の成佛にして、一念三千の成佛にあらざれば有名無實の往生なり、擧一例諸と申して、龍女が成佛は、末代の女人の成佛往生の道をふみあけたるなるべし、儒家の孝養は今生にかぎる、未來の父母を扶けざれば、外家の聖賢は有名無實なり、外道は過、末をしれども、父母を扶くる道なし、儒道こそ父母の後世を扶くれば、聖賢の名はあるべけれ、

して敬はる、此の龍王の女八歳にして成佛したる由法華經提婆品に見ゆ

女人及惡人の成佛

一代聖教の中に法華經第一法華經の中に女人成佛第一三皇。

(一)伏羲皇　(二)神農皇　(三)黄帝皇

五帝

(一)小昊セウカウ　(二)顓頊ゼンギョク　(三)帝嚳テイコク　(四)堯ギヤウ　(五)舜シユン

「韶曲」韶とは小煩惱地法の一、甘蹈煩惱一、心所の名他人に向ひて内心を隱し、詐りて親む精神作用を云ふ。

しかれども、法華經已等の大小乘の經宗は、自身の得道猶ほかなひがたし、何に況んや父母をや、但文のみあつて義なし、今法華經の時こそ女人成佛の時、悲母の成佛も顯はれ、達多、惡人成佛の時、慈父の成佛も顯はるれ、此の經は内典の孝經なり。

（右、開目抄、遺の八〇四、内三の廿六）

一代聖教の中には法華經第一、法華經の中に女人成佛第一なりと、ことはらせ給ふにや、されば日本の一切の女人は、法華經より外の一切經には、女人は成佛せずと嫌ふにも、法華經にだにも、如人成佛ゆるされなば、なにかくるしかるべき。

（右、千日尼抄、遺の一七五六内二十の八）

女人をば内、外、典に是れをそしり、三皇、五帝三墳五典にも韶曲の者と定む、されば災は三女より起るといへり、國の亡び、人の損する源は女人を本とす、内典の中には、初成道の大法たる華嚴經には、女人は地獄の

「三墳、五典」とは三墳は三皇の書、五典は五帝の書名也

「三千界」九十一頁の三千大千世界を見よ

「五戒」卅三頁を見よ

「惡道」廿九頁を見よ

「禪定」とは梵語には禪那と云ふ定とは譯したる名なり故に禪定とは梵漢二語なり梵音ドフヤーナ定、靜慮、思惟、など譯す

「舍利弗」とは梵語音シヤーリプトラ舊譯に鶖鷺子と譯す、新譯に鶖鷺子と譯す、佛十大弟子の一、名優波長沙と云ふ、もと目連と共に六

使なり、能く佛の種子を斷つ、外面は菩薩に似て、内心は夜叉の如しと文、雙林最後の大涅槃經には、一切の江河必ず回曲あり、一切の女人必ず諂曲ありと文、又云く、あらゆる三千界の、男子の諸の煩惱を合集して、一人の女人の業障と爲る等云云、大華嚴經の文に、能斷佛種と說かれて候は、女人は佛になるべき種子をいれり、譬ば大旱魃の時、虛空の中に大雲をこり、大雨を大地に下すに、かれたるが如くなる、無量無邊の草木花さき菓なる、しかりと雖も、いりたる種はおひずして、結句雨しげゝればくちうするが如し佛は大雲の如く、說教は大雨の如く、かれたるが如くなる、草木を一切衆生に譬たり、佛教の雨に潤ふて、五戒、十善、禪定等の功德を得るは、花さき菓なるが如し、雨ふれども、いりたる種のおひずして、かへりて、くちうするは、女人の佛教に遇へども、生死をはなれずして、かへりて、佛教を失ひ、惡道に墮ちるに譬ふ、是れを能斷佛種とは申すなり、涅槃經の文に、一切の江河のまがれるが如く、女人も又まがれりと、說かれたるは、水はやわ

師外道の一沙然に從ひ、各一百の弟子を有せしが釋尊成道後幾ならずして目連と共に弟子となる、佛の教團中必須の位地を稱め、智慧第一の占あり、法王子の號あり、法華經の功德に依て華光如來と云ふ佛になる、釋尊より先つて寂す

「五障三從」九十一頁を見よ

法華經の金文に依て銀色女經も涅槃經も華嚴經も大論も散々に破れたり

「文殊師利」一頁の文殊を見よ

【多寶】二頁を見よ

「舍利弗」九十五頁を見よ

らかなる物なれば、石、山なんどの、こわき物に、さへられて、水のさまひるむゆゑに、かしこ、こゝへ行くなり、女人も亦是の如く、女人の心をば、水に譬たり、心よわくして水の如くなり、道理と思ふ事も、男のこわき心に値ぬれば、せかれて、よしなき方におもむく、又水に、ゑがくに、とゞまらざるが如し、女人は不信を體とするゆゑに、只今さあるべしと見る事も、又しばらくあれば、あらぬさまになるなり、佛と申すは正直を本とす、故にまがれる女人は、佛になるべきにあらず、五障三從と申して、五つのさはり、三つしたがふ事あり、されば、銀色女經には、三世の諸佛の、眼は大地に落つとも、女人は佛になるべからずと說かれ、大論には、清風はとるとも、女人の心はとりがたしとも云へり、此の如く、諸經に嫌はれたりし、女人を、文殊師利菩薩の、妙の一字を說き給ひしかば、忽ちに佛になりにきあまりに、不審なりし故に、寶淨世界の、多寶佛の、第一の弟子、智積菩薩、釋迦如來の、御弟子の、智慧第一の、舍利弗尊者、四十餘年の、大小乘經の意を

智積菩薩も舍利弗も閉口頓首せり

「舍利弗」九十五頁を見よ

二千五百の河

「南閻浮提」九十六頁閻浮提を見よ

もつて、龍女の佛になるまじき由を、難せしかども、終に叶はずして、佛になりにき、初成道の、能斷佛種子も、雙林最後の、一切江河、必有回曲の文も破れぬ、銀色女經、並びに、大論の龜鏡も、空しくなりぬ、又智積菩薩、舍利弗は舌を卷き、口を閉ぢ、人天大會は、歡喜のあまりに、掌を合せたりき、是れ偏に、妙の一字の德なり、此の南閻浮提の內に、二千五百の河あり、一々に皆まがれり、南閻浮提の、女人の心のまがれるが如し、但し娑婆耶と申す河あり、繩を引きはえたるが如くにして、直に西海に入る、法華經を信ずる女人も亦復是の如し。

（右、法華題目抄、遺の五九二、內十一の十三）

大僧正慈鎭

龍女成佛のこゝろを
玉ゆゑにいでぬとみえし海の月
やがて南にさしのぼるかな

同

法性寺入道前關白太政大臣

大僧正慈鎭

法性寺入道

定家

わたつ海の底よりきつる程もなく
此身ながらに身をぞきはむる

即往南方無垢世界のこゝろを

定家

わたつ海の底の玉もに宿かりて
南の空をてらす月影

崇德院

參議雅經

西行法師

藤原敦仲

○妙法蓮華經勸持品第十三

勸持品　崇德院御製

おほそらにわかぬ光をあま雲の
しばし隔つと思ひけるかな

同　參議雅經

あまの雲よ所にも何か恨みけん
さすがにやがてはるゝ物から

同　西行法師

あま雲のはるゝみ空の月影に
恨なくさむをば捨の山

同　藤原敦仲

恨みけるけしきや空にみえつらん

俊成

をば捨山をてらす月影

同

かく許り心晴ける月影を
をば捨山となに思ひけむ

定家

同

霧はれて行末てらす月影を
よもさらしなと何思ひけむ

從三位行家

同

わたつ海の底まで照す月影に
もれたるあまはさぞ恨みけむ

源三位頼政

同

けふこそあれつゐに佛と思ふをば
しらでや我をうらみがほなる

御鳥羽院下野

同

恨みつゝ浪にしほれぬあま小舟
つゐにかひある道はまよはじ

前大僧正慈鎮

同

芭蕉葉やいかなる風をいたむらん
秋の心ぞ色に出ぬる

○憍曇彌我先總說一切聲聞皆已授記今汝欲知記者將來之世當於六萬八千億諸佛法中爲大法師及六千學無學比丘尼俱爲法師汝如是漸漸具菩薩道當得作佛號一切衆生喜見如來乃至佛告耶輸陀羅汝於來世百千萬億諸佛法中修菩薩行爲大法師漸具佛道於善國中當得作佛號具足千萬光相如來の事

方等、般若、四十餘年の經々に、皆女人をきらはれたりき、但天女成佛經、觀經等にすこし、女人の得道の經文ありといへども、但名のみ有て實な

御鳥羽院下野

前大僧正慈鎮

訓釋 憍曇彌、我れ先に總じて、一切の聲聞に皆已に授記すと說きぬ、今汝記を知らんと欲せば將來の世に當に六萬八千の諸佛の法の中に於て大法師及び六千の學無學の比丘尼も俱に法師となるべし、汝是菩薩の如く漸漸に當に道を具して作佛すること得べし、一切衆生喜見如來と號せん。

乃至、佛耶輸陀羅に告ぐ汝、來世の百千萬億の諸佛の法の中に於て菩薩の行を修し、大法師となり、漸く佛道を具し、善國の中に於て當に作佛すること得べし具足千萬光相如來と號せん

八歳の龍女

憍曇彌

耶輸陀羅

比丘尼

〔四恩〕と〔一〕には一切衆生の恩〔二〕には父母の恩〔三〕には國の恩〔四〕には三寶の恩なり

きなり、其上、未顯眞實の經なれば、如何が有けん、四十餘年の經々に、皆女人を嫌はれたり、又最後に說き給ひたる、涅槃經にも、女人を嫌はれたり、何れか四恩を報ずる敎ありと、尋ぬれば、法華經こそ女人成佛する經なれば、八歳の龍女成佛し、佛の姨母、憍曇彌、耶輸陀羅比丘尼、記別にあづかりぬ、されば我等が母は但女人の體にてこそ候へ、畜生にもあらず、蛇身にもあらず、八歳の龍女だにも佛になる、如何ぞ此經の力にて、我が母の佛にならざるべき、されば、法華經を持つ人は父と母との恩を報ずるなり、我が心には報ずると思はねども、此經の力にて報ずるなり。

（右、上野抄、遺の一三六八、外九の二十）

〇惡鬼入其身の事

諸經の勝劣は、成佛の有無なり、慈覺、智證の理同事勝の眼、善導、法然の餘行非機の目、禪宗が敎外別傳の所見は、東西動轉の眼目、南北不辨の妄見なり、牛羊よりも劣り、蝙蝠鳥にも異ならず、衣法不依人の經文、毀謗此

理同事勝
餘行非機
敎外別傳
衣法不依人

＝訓譯＝
惡鬼其の身に入る

＝訓譯＝
我れ身命を愛せず
但だ無上道を惜む

我れ等佛を敬ふが故に惡鬼を忍ばんは是の諸の人は輕慢の言を受くべし。濁劫惡世の中には多く諸の恐怖

＝訓譯＝

經の文をば、如何に恐れさせ給はざる哉、惡鬼入其身の、無明の惡酒に醉ひ沈み給ふらん。

（右、敎行證抄、遺の一一一、外二十の九）

我不愛身命但惜無上道　　大納言齊時

かずならぬ命はなにかをしからむ
法とく人を忍ぶばかりぞ

同　　正三位經家

さらずとていく世もあらじいさやさは
法にかへつる命と思はん

〇我等敬佛故。悉忍是諸惡。爲斯所輕言。汝等皆是佛。
如此輕慢言。皆當忍受之。濁劫惡世中。多有諸恐怖。
惡鬼入其身。罵詈毀辱我。我當敬信佛。當著忍辱鎧。
爲說是經故。忍此諸難事。我不愛身命。但惜無上道。

あらん、惡鬼其の身に入て我を罵詈せんに、我を敬信すべし、是の經を說かば、此の我等を惡鬼魔魅等の念を離れ、但だ無上道を愛惜せず、我等の所嘱に持たば、當に知て世尊の如き善告勅を是の人は佛の使の事を爲ん、惡口罵詈し、刀杖瓦石を加へんに、我れ自ら當に忍ぶべし、是れ惡世の惡比丘は佛の方便隨宜所說の法を知らず、惡口して擯出せられ、數數見擯出せられ、遠離せん、是の如き等の惡を忍ぶべしと云々。

我等於來世。護持佛所嘱。世尊自當知。濁世惡比丘。不知佛方便。隨宜所說法。惡口而擯出。數數見擯出。遠離於塔寺。如是等衆惡。念佛告勅故。皆當忍是事の事

記の八に云く、文に三初に、一行は通じて、邪人を明かす、卽ち俗衆なり次に一行は、道門增上慢の者を明かす、三に七行は、僧聖增上慢の者を明かす、此の三の中、初めは忍ぶべし、次の者は前に過ぎたり、第三最も甚だし後々の者は、轉た識難きを以ての故に等云々、東春の智度法師云く、初めに有諸より下の五行は、第一に一偈は三業の惡を忍ぶ、是れ外惡の人なり、惡世の下の一偈は、是れ上慢出家の人なり、第三に或有阿練若より下の三偈は、卽ち是れ出家の處に、一切の惡人を攝すと等云々。

（右、開目抄、遺の八〇五、内三の廿八）

今末法の始め、二百餘年なり、況滅度後のしるしに、鬪諍の序となるべきゆゑに、非理を前として、濁世のしるしに、召し合せられずして、流罪乃至命にもおよばんとするなり、されば日蓮が法華經の智解は、天台、傳敎には千萬が一分にも、及ぶ事なけれども、難を忍び、慈悲のすぐれたる事は、をそれをもいだきぬべし、定めて天の御計らひにも、あづかるべしと存ずれども、一分のしるしもなし、いよ〳〵重科に沈む、還りて此事を計りみれば、我が身の法華經の行者にあらざるか、又諸天善神の此の國をすてゝ去り給へるか、かた〳〵疑はし、而るに法華經の第五の、勸持品の二十行の偈は、日蓮だも此國に生れずば、ほとんど、世尊は大妄語の人、八十萬億、那由陀の菩薩は、提婆が虛誑罪にも墮ちぬべし、經に云く、有諸無智人、惡口罵詈等加刀杖瓦石等云々、今の世を見るに、日蓮より外の諸僧、たれの人か、法華經につけて、諸人に惡口罵詈せられ、刀杖を加へらるゝ者ある、日蓮なくば、此一偈の未來記は妄語となりぬ、惡世中比丘、邪智心諂曲、又云く、與白衣說法、爲世所恭敬、如六通羅漢、此等の經文は、今の世の念佛者、禪宗、律宗等の法師なくば、世尊は又大妄語の人、常在大衆中、乃至、向國王大臣、

「傳敎」八十三頁參照

法華經の御爲には身をも捨て命をも惜まざれ（外廿五の二）

日蓮なくば佛の未來記は大妄語日蓮に依て法華經は活きたる金文なり日蓮が法華經が日蓮か知れる人ありや

婆羅門居士等、今の世の僧等、日蓮を讒奏して流罪せずば、此經文むなし、又云く、數々見擯出等云々、日蓮法華經のゆゑに、度々ながされずば、數々の二字いかゞせん、此二字は天台、傳教もいまだすみ給はず、況んや餘人をや末法の始めのしるし、恐怖惡世中の金言のあふゆゑに、但日蓮一人これをよめり。

（右、開目抄、遺の七七二、内二の廿四）

日蓮聖人と法華經とは勿論切ても切れぬ密接の關係あるは言はずもがなと日蓮と勸持品と日蓮＝鳴呼＝勸持品と日蓮＝嘔噓＝何たる因緣ぞ萬代不變の色の生々しき活血の流通は＝二十行の偈文＝一字一字末世五濁の天地に活躍＝實現是れ日蓮を語るにあらずや。日蓮又勸持品を語るにあらずや。

其上勸持品には、法華經の敵人三類を擧げられたるに、一には在家の俗男俗女なり、此の俗男俗女は、法華經の行者を、憎み罵り、打ちはり、きり殺し、所を追出し、或は上へ讒奏して遠流し、なさけなくあだむ者なり、二には出家の人なり、此の人は慢心高くして、内心には、物を知らざれども、智者げにもてなして、世間の人に、學匠と思はれて、法華經の行者を見ては、怨み、妬み、輕しめ、賤しみ、犬、野干よりも、わろきやうに、人に云ひうとめ、法華經をば、我一人心得たりと思ふものなり、三には阿練若の僧なり

「世間」九十八頁を見よ
「供養」百二十四頁を見よ

此の僧は極めて、貴き相を形に顯し、三衣一鉢を帶して、山林の閑かなる所に籠り居て、在世の阿羅漢の如く、諸人に貴まれ、佛の如く萬人に仰がれて法華經を說の如くに、讀み持ち奉らん僧を見ては、憎み、妬みて云く、大愚癡の者、大邪見のものなり、總て慈悲なきもの、外道の法を說くなんど云はん、上一人より仰いで信をとらせ給はゞ、其已下の萬人も、佛の如くに供養をなすべし、法華經を說の如くよみ持たん人は、必ず此三類の敵人に怨まるべきなり、と、佛說き給へり。

（右、初心成佛抄、遺の一六九〇、内廿二の廿五）

「無間地獄」百三十三頁を見よ

數々とは度々なり、日蓮擯出度々、流罪は二度なり、法華經は三世說法の儀式なり、過去の不輕品は今の勸持品、今の勸持品は過去の不輕品なり、今の勸持品は未來の不輕品たるべし、其時は日蓮は卽ち不輕菩薩たるべし。

（右、寺宿抄、遺の七〇〇、内十七の九）

過去の不輕菩薩と末法の日蓮

日蓮は過去の不輕の如く、當世の人々は、彼の輕毀の四衆の如し、人は替

〔勤持品と不輕品〕
〔不輕菩薩と日蓮聖人〕
「阿鼻大城」百四十頁を見よ
「三五の塵點」九十四頁を見よ

はれども因は是れ一なり、父母を殺せる人異なれども、同じ無間地獄におついかなれば不輕の因を行じて、日蓮一人釋迦佛とならざるべき、又彼の諸人は、跋陀婆羅等と云はれざらん、但千劫阿鼻地獄にて、責られん事こそ、不便にはおぼゆ、是れをいかんとすべき、彼の輕毀の衆は、謗ぜしかども、後には信伏隨從せり、罪多分は滅して、小分有りしが父母千人殺したる程の大苦をうく、當世の諸人は 飜す心なし、譬喩品の如く、無數劫をや經んずらん三五の塵點をやおくらんずらん。

（佐渡御書、遺の八三四、内十七の廿五）

是れ程の卑賤無智無戒の者の、二千餘年已前に說かれて候、法華經の文にのせられて、留難に値ふべしと、佛記しをかれまゐらせて候事の、うれしさ申し盡し難く候、此の身に學文つかまつりし事、やう〳〵二十四五年にまかりなるなり、法華經を殊に信じまゐらせ候ひし事は、わづかに此の六七年よりこのかたなり、又信じて候ひしかども、懈怠の身たる上、或は學文

「懈怠」なまけ、大煩惱地法の一廿隨煩惱の一、心所の名にして人をしてらざらしむる精神作用にして勤の反對である
晝夜十二時の法華經修行
「菩提心」菩提とは梵音ボードヒ智、道覺、など譯す上は菩提を求め下は衆生を化す

と云ひ、或は世間の事にさへられて、一日にわづかに一卷一品題目ばかりなり、去年の五月十二日より今年正月十六日に至るまで、二百四十餘日の程は晝夜十二時に、法華經を修行し奉ると存じ候、其故は法華經の故にかゝる身となりて候へば、行、住、坐、臥に法華經を讀み行ずるにてこそ候へ、人間に生を受て、是れ程の悅びは何事か候べき、凡夫の習ひ、我れとはげみて、菩提心を發して、後生を願ふといへども、自ら思ひ出し、十二時の間に一時二時こそはげみ候へ、是は思ひ出さぬにも御經をよみよまざるにも、法華經を行ずるにて候か。

（右、四恩抄、遺の四〇九、内四十の四）

○妙法蓮華經安樂行品第十四

前大僧正慈鎮

○在於閑處修攝其心　藤原盛方

法のためやすく行べき道やいづこ
人もとひこぬ山のべの里

同　藤原盛方

山ふかみまことの道に入る人は
のりの花をやしをりにはする

○諸天晝夜常爲法故而衛護之の事

大地をさせば、はづるゝとも、虛空をつなぐものはありとも、潮のみちひぬ事はありとも、日は西より出るとも、法華經の行者の祈りの叶はぬ事はあるべからず、法華經の行者を諸の菩薩、人天八部等、二聖、二天、十羅殺等、千に一も來つて、守護し給はぬ事侍らば、上は釋迦諸佛をあなづり奉り、下は九界をたぼらかす失あらん、行者は必ず不實なりとも、智惠は愚なりとも、身は不淨なりとも、戒德は備へずとも、南無妙法蓮華經と申さば、必ず守護し給ふべし、袋きたなしとて金を捨つる事なかれ、伊蘭をにくまば栴檀あるべからず、谷の池を不淨なりと嫌はゞ蓮をとるべからず、行者を嫌ひ給まはゞ誓ひを破り給ふなん、正像既に過ぎぬれば、持戒は市の中の虎の如く、智者は麟角よりも希ならん、月を待つまでは燈を憑むべし、寶珠なき處には金銀も寶なり、白烏の恩をば黑烏に報ずべし、聖僧の恩をば凡僧に報ずべし、はや〳〵利生をさづけ給へと、强盛に申すならば、いかでか祈りのかなはざるべき。

（右、所爲抄、遺の九〇六、内十六の五十六）

○於無量國中乃至名字不可得聞の事

法華經の第一の卷に云く、無量無數劫にも、是の法を聞かんこと亦難しと云々、第五の卷に云く、是の法華經は、無量の國の中に於て、乃至、名字をも

＝訓譯＝閑かなる處に在て其の心を修攝せよ

＝訓譯＝諸天は晝夜に常に法の爲の故に而も之を衛護せん

「八部」とは天、龍夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、（飜譯名義集）

「伊蘭」梵音エーランダー此の木は腐爛せる屍體の如き臭氣を有す惡臭四十由旬に及ぶ其花は紅花にして人若し食すれば發狂すと云ふ此の伊蘭の生する處に必ず栴檀生ずと云ふ

「栴檀」我が國に生ずるのと遠ひ支那雲南、占城、布哇シャム、ウンナンジャウハアイ遍羅等の熱帶地方に產する香木で、「チャンダナ」と云ふものである

＝訓譯＝無量の國の中に於ても乃至、名字をも聞くこと得べからず

「須扇多佛」は菩薩を教化せんと欲して自から佛となりて說法せられしが其弟子が未熟であるから自ら涅槃に入り其化佛を留むる事一劫と云ふ間である

「多寶佛」梵語にては鉢羅部多羅但羅と云ふ、此の佛は過去に於て天人の讀に應じて爾前權教を說きすして法華經を說かんとして大願を起してつの大塔に入りて涅槃の大願を起してある其の大願は末代に於て法華經を說く時に出現して我が全身の寶塔に入りて其の事を證明するとの事である法華經には深大なる緣故のある佛陀である

「須彌山」八十二頁を見よ

聞くこと得べからず、等云々、法華經の御名を聞くことは、をぼろげにも有り難き事なり、されば、須扇多佛、多寶佛は世に出させ給ひたりしかども、法華經の御名だにも說き給はず、釋迦如來は、法華經のために、世に出させ給ひたりしかども、四十餘年の間は、名をも語り出し給はず、佛の御年七十二と申せし時、始めて妙法蓮華經と、唱へ出させ給ひたり、然りと雖も、摩訶尸那、日本の邊土の者、御名をも聞かざりき、佛の滅後、一千餘年を過ぎて三百五十餘年に及んでこそ、わづかに御名計りをば聞きたりしなり、されば この經に値ひたてまつる事をば、三千年に一度華さく優曇華、無量無邊劫に一度値ふなる、一眼の龜にもたとへたり、大地の上に針を立て、大梵天宮より、芥子をなぐるに、針のさきに、芥子のつらぬかれたるよりも、法華經の題目に値ひ奉る事かたし、此の須彌山に針を立てゝ、彼の須彌山より大風のつよくふかん日、絲をわたさんに、針の穴にいたりて、絲のさきのいりたるよりも、法華經の題目に、値ひ奉る事かたし、さればこの經の題目

をとなへさせ給はん人は、をぼしめすべし、生盲の始めて眼あきて、父母等をみるよりも、うれしく強きかたきに、とられたる者のゆるされて、妻子を見るよりも、めづらしとおぼすべし。

（右、法華題目抄、遺の五八九、内十一の四）

崇德院御製

於無量國中乃至名字不可得聞
名をだにも聞かぬ御法をたもつまで

大藏卿行宗

いかに契を結びをきけん

同

世々をへて名をだにきかで過ごしこし
法に嬉しく逢ひみつるかな

〇唯髻中明珠不以與之所以者何獨王頂上有此一珠乃至如彼
強力之王久護明珠今乃與之の事

第五の卷に云く、唯だ髻中の明珠、又云く、獨り王の頂上に此の一の珠あ

‖訓譯‖ 無量の國の中に於て乃至名字をも聞くこと得べからず

‖訓譯‖ 唯だ髻中の明珠の所以は何んぞ獨り王の頂上に此一つの珠を與へずや乃至彼の強力の王の久く護れる明珠を今乃ちこれを與へるが如し

一切經卷數七千三百九十九卷
日本國男女數四十九億九萬四千人百二十八人

爾前數は
（足代と寶塔）
法華經は
（未顯眞實）南無阿彌陀佛（地獄）
（足代大塔）
（極樂）南無妙法蓮華經（皆是眞實）

り、又云く、彼の強力の王の久しく護れる明珠を、今乃ち之を與ふるが如し等云々、文の心は、日本國に一切經わたれり、七千三百九十九卷なり、彼の經々は、皆法華經の眷屬なり、例せば日本國の男女の數、四十九億九萬四千八百二十八人候へども皆一人の國王の家人たるが如し、一切經の心は、愚痴の女なんどの、唯一時に心うべきやうは、たとへば大塔をくみ候には、先づ材木より外に、足代と申して、多くの小木を集め、一丈二丈計りゆひあげ候なり、かくゆひあげて、材木を以て大塔をくみあげ候ひつれば、返つて足代を切り捨て、大塔は候なり、足代と申すは一切經なり、大塔と申すは法華經なり、佛一切經を說き給ひし事は、法華經を說かせ給はんための足代なり、正直捨方便と申して、法華經を信ずる人は、阿彌陀經の南無阿彌陀佛大日經等の眞言宗、阿含經等の律宗の二百五十戒等を切り捨て、拋ちてのち法華經をば持ち候なり、大塔をくまんがためには、足代大切なれども、大塔をくみあげぬれば、足代を切り落すなり、正直捨方便と申す文の心是れな

待賢門院堀川

光俊朝臣

＝訓譯＝是の經を信ぜずば則ち爲れ大ひなる失なり

＝訓譯＝天の諸の童子を以て給使と爲さん、刀杖も加へず毒も害すること能はず

り、足代より塔は出來て候へども、塔をすてゝ足代をがむ人なし、今の世の道心者等、一向に南無阿彌陀佛と唱へて、一生をすごし、南無妙法蓮華經と、一返も唱へぬ人々は、大塔をすてゝ足代をがむ人々なり、世間にかしこくて、はかなき人と申すは是れなり。

（右、上野抄、遺の一九九五、外八の二十二）

待賢門院堀川

○髻中明珠

ふたつなき玉をこめたるもとゆひの
とく事かたき法とこそきけ

光俊朝臣

不信是經則爲大失
たのまれぬ心ぞみゆるきては又
むなしく空に歸るかりがね

○天諸童子以爲給使刀杖不加毒害の事

日蓮はあす佐渡へまかるなり、今宵の寒さにつけても、牢の中のありさま

「六親」とは我に最も親しき六種の人、父、母、妻、子、兄、弟。父の六親あり母の六親あれど略す

色心二法修行
「色心二法」百四頁を見よ

思ひやられて、いたはしくこそ候へ、あはれ殿は法華經一部を、色心二法ともに、あそばしたる御身なれば、父母、六親、一切衆生をたすけ給ふべき御身なり、法華經を餘人のよみ候は、口ばかり、ことば、ばかりはよめども心はよまず、心はよめども、身によまず、色心二法ともに遊ばしたるこそ貴く候へ、天諸童子、以爲給使、刀杖不加、毒不能害と說かれて候へば、別の事はあるべからず、籠をば出させ給ひ候はゞ、とく〳〵來りたまへ、見たてまつり、見えたてまつらん。

（右、土籠御書抄、遺の六九五、外の十一の十五）

藤原家隆

○若於夢中但見妙事

覺りえてしばしまどろむ短夜の
夢にも妙に月は見えけり

同

俊成成

さま〴〵にたへなる花ぞちりまがふ
法をたもてば春の夜の夢

＝訓譯＝若し夢の中に於ても但だ妙へなることを見る

妙法蓮華經從地涌出品第十五

＝訓譯＝爾の時に佛、諸の菩薩摩訶薩衆に告げたまはく、止れ善男子、汝等が此の經を護持せんことを須ひじ

「大音聲」七十八頁（參考）

「娑婆」百三十七頁を見よ

「多寶」百十二頁を見よ

「須臾」六十四頁を見よ

前三後三の釋

○爾時佛告諸菩薩摩訶薩衆止善男子不須汝等護持此經の事

爾の時に佛、諸〳〵の菩薩摩訶薩衆に告たまはく、止ね善男子、汝等が此經を護持せんことを須ひず等云云、法師より已下の五品の經文、前後水火なり、寶塔品の末に云く、大音聲を以て、普く四衆に告たまはく、誰か能く此の娑婆國土に於て、廣く妙法蓮華經を說くものなる等云云、設ひ敎主一佛たりとも之を奬勸し給はゞ、藥王等の大菩薩、梵、帝、日、月、四天等は重んずべき處に、多寶佛、十方の諸佛、客佛と爲りて、之を諫曉し給ふ、諸の菩薩等は、此の慇懃の付屬を聞いて、我不愛身命の誓言を立つ、此等は偏に佛意に叶はんが爲なり、而るに須臾の間に佛語相違して、過八恒河沙の、此の土の弘經を制止し給ふ、進退維谷まる、凡智に及ばず、天台智者大師、前三後三の六釋を作して、之を會し給へり、所詮迹化他方の大菩薩等に、我が內證の

壽量品を以て授與すべからず、末法の初めは謗法の國にして、惡機なる故に之を止めて、地涌千界の大菩薩を召して、壽量品の肝心たる、妙法蓮華經の五字を以て、閻浮の衆生に授與せしめ給ふなり、又迹化の大衆は、釋尊の初發心の弟子に非ざる等の故なり、天台大師の云く、是れ我が弟子なり、我が法を弘むべし、妙樂の云く、子父の法を弘む世界の益あり、輔正記に云く、法是れ久成の法なるが故に久成の人に付す等云々。

（右、觀心本尊抄、遺の九四三、内八の二十一）

地涌千界出現して、濁惡末代の當世に、別付屬の妙法蓮華經を一閻浮提の一切衆生に取り次ぎ給ふべき、佛の勅使なれば、八十萬億の諸の大菩薩を、止ね善男子と嫌はせ給ひしか等云々、又彼の邪宗の者どもの習ひとして、強ちに證文を尋ぬる事之れあり、涌出品並に文句の九、記の九の前三後三の釋を出すべし、但日蓮門家の大事之に如かず。

（右、教行證抄、遺の一一二一、外二十の十一）

森量品の肝心「闍浮提」は九十六頁

天台云く

輔正云く

取り次ぎとは釋尊より上行菩薩に取り上行菩薩の手に給ふ、今上行菩薩に又末法當て給ふべき衆生是を取次ぎ末法に云へば廣く取次ぎ末萬年の取次ぎ也、令斷記に云く、日蓮門下の止觀家の明門の鏡の一字は秘事なり。秘すべし。秘すべし。

仰に云く、この門の家の大事、涌出品なり、前三後三の釋なり、此の迹門の付屬不同の本化迹門の起盡の本門の法華經の題目なり、此の本化の迹門の末法の始の五百歳に一閻浮提に流布すべき者なり、上行菩薩の末法の始の五百歳に出現して、南無妙法蓮華經の五字の大事の法門を授與し給へば、本化の菩薩の衆中に於て最も爲上首唱導の師なり。

○是菩薩衆中有四導師一名上行二名無邊行三名淨行四名安立行是四菩薩於其衆中最爲上首唱導之師の事

其の上地涌千界の大菩薩、大地より出來せり、釋尊に第一の御弟子とおぼしき、普賢、文殊等にもにるべくもなし、華嚴、方等、般若、法華經の寶塔品に來集せる大菩薩、大日經等の金剛薩埵等の十六の大菩薩なんども、此の菩薩に對當すれば、獼猴の群がる中に、帝釋の來り給ふが如し、山人に月卿等のまじはるにことならず、補處の彌勒すら猶迷惑せり、何に況んや其の己下おや、此の千世界の大菩薩の中に四人の大聖まします、所謂上行、無邊行淨行、安立行なり、此の四人は虛空、靈山の諸菩薩、等眼もあはせ心もおよばず、華嚴經の四菩薩、大日經の四菩薩、金剛頂經の十六大菩薩等も、此の菩薩に對すれば、翳眼のものゝ日輪を見るが如く、海人の皇帝に向ひ奉るが如し、大公等の四聖の衆中に在りしに似たり、商山の四皓が惠帝に仕へしにことならず、巍々堂々として尊高なり。

是四菩薩の師有り一名上行二名無邊行三名淨行四名安立行と名く是の四菩薩衆の中に於て最も爲上首唱導の師なり。（訓譯八十四のう）

「本門」百一頁を見よ
「迹門」百五十六頁を見よ
本迹の菩薩を對照せば
（迹は猿。猴。本は帝釋。）
「帝釋」七十九頁參照
＝訓譯＝我れ此の衆の中に於て乃し一人なも識らず、忽然に地より出たり、願くば其の因緣を說きたまへ
「彌勒」三頁を見よ
「文殊」一頁を見よ

本門の所化を以て、迹門の所化に比較すれば、一滴と大海と一塵と大山なり、本門の一菩薩を、迹門の十方世界の文殊、觀音に對向すれば、猿猴を以て帝釋に比するに尙及ばず。

（右、觀心本尊抄、遺の九三四內、八の九）

○我於此衆中乃不識一人忽然從地出願說其因緣の事

天台云く、智人は智を知り、蛇は自ら蛇を識る等云々、問ふて云く、心いかん、答へて云く、上行菩薩の大地より出現し給ひしをば、彌勒菩薩、文殊師利菩薩、觀世音菩薩、藥王菩薩等の、五十一品の無明を斷せし人々も、元品の無明を斷ぜざれば愚人といはれて、壽量品の南無妙法蓮華經の、末法に流布せんずるゆゑに、此の菩薩を召し出されたりとはしらざりしといふ事なり故に涌出品に至つて、爾前迹門の斷無明の菩薩を、五十小劫謂如半日と說く、則ち壽量品の久遠圓佛の、非長非短不二の義に迷ふが故なり、爾前迹門の斷惑とは外道の、有漏斷の退すれば起るが如し、未だ久遠を知らざるを以て惑者の本と爲す、故に四十一品斷の彌勒、本門立行の發起、影響、當機、結緣の地涌千界の衆を知らず、既に一分の無明を斷じて、十界の一分の無始の法性を、得れば何ぞ等覺の菩薩を知らざらん、設ひ等覺の菩薩を知らずとも、爭でか當機結緣の衆を知らざらん、乃不識一人の文は最も末斷三惑の故歟

（右、十法界抄、遺の二九三、三十四の三十五）

例せば漢王の四將の、張良、樊噲、陳平、周勃の四を、商山の四皓、季里枳角先生園公夏黃公等の四賢に比するが如く、天地雲泥なり、四皓が爲體頭に白雪を頂き、額には四海の波を疊み、眉には半月を移し、腰に多羅枝を張り、惠帝の左右に侍して、世を治められたる事、堯舜の古を移し、一天安穩なりし事、神農の昔に異ならず、此の四大菩薩も、亦復是の如し。

（右、會谷抄、遺の一一〇三、內二十五の十三）

「爾前」とは天台宗に釋尊五十年間の說法のうち鹿苑の山に於ける華嚴經の說法以前の化導を爾前と云ふ卽ち天台五時の教判のうち前四味の說教を是れも爾前の語は法華經の序品別序に爾時世尊とある其れ以前を指して爾前と云ふ。

「三惑」とは見思、塵沙、無明、のみを云ふ

天地雲泥也

＝訓譯＝今此の大會の無量百千億なる諸菩薩等皆此の事を知らんと欲す無量の德世尊唯願くば衆の疑を決したまへ

章提希夫人の問

「提婆達多」九十九頁を見よ

「帝釋」具には釋提桓因、又は娑婆因陀羅と云ふ、梵音シヤクラデーヴアナンドラと譯す、帝釋は能天主と譯インドラの譯、梵釋漢並べて娑ヤクラ羅なる名稱なり須彌山の頂上忉利天の主にして佛法歸依喜見の城に居すと云ふ

○今此之大會無量百千億是諸菩薩等皆欲知此事是諸菩薩衆本末之因緣無量德世尊唯願決衆疑の事

一切衆生の疑網をはらす中に、此の疑ひ第一の疑ひなるべし、無量義經の大莊嚴等の、八萬の大士、四十餘年と今この、歷劫、疾成の疑ひにも超過せり、觀無量壽經に韋提希夫人の、阿闍世王が提婆にすかされて、父の王をいましめ、母を殺さんとせしが、耆婆、月光にをどされて、母をはなちたりし時、佛を請じたてまつり、まづ第一の問に云く、我れ宿し何の罪あつて此の惡子を生む、世尊復何等の因緣ありて、提婆達多と共に眷屬となり給ふ等云云、此の疑ひの中に、世尊復何等の因緣ありて等の疑ひは大なる疑ひなり、輪王は敵と共に生れず、帝釋は鬼と共ならず、佛は無量劫の慈悲者なり、いかに大怨と共にまします、還つて佛にはましまさゞるかと疑ふなるべし、而れども佛答へ給はず、されば觀經を讀誦せん人、法華經の提婆品に入らずばいたづらごともなるべし、大涅槃經の迦葉菩薩の三十六の問も、これには及ばず、されば佛此の疑ひを晴させ給はずば、一代の聖敎は泡沫に同じ、一切衆生は疑網にかゝるべし、壽量の一品の大切なるはこれなり。

（右、開目抄、遺の七八九、内三の七）

迦葉尊者の三十六の疑問壽量の一品

＝訓譯＝然も諸の新發意の菩薩、佛の滅後に於て、若し是の語を聞かば或は信受せずして法を破する罪業の因緣を起さん廣開近顯遠一品二半

○然諸新發意菩薩於佛滅後若聞是語或不信受而起破法罪業因緣の事

問ふて云く、誰人の爲に廣開近顯遠の壽量品を演說するや、答へて曰く、壽量品の一品二半は始めより終りに至るまで、正しく滅後の衆生の爲なり、滅後の中には末法、今時の日蓮等が爲なり、疑ふて云く、此の法門前代に未だ之を聞かず、經文に之ありや、答へて云く、予が智、前賢に超えず、設ひ經文を引くと雖も、誰人か之を信せん、卡和が、涕泣、伍子胥の悲傷是れなり、然りと雖も、略開近顯遠、動執生疑の文に云く、然も諸の新發意の菩薩、佛の滅後に於て、若し是の語を聞かば、或は信受せずして、法を破する罪業の因緣を起さん等云々、文の心は壽量品を說かずんば、末代の凡智、皆惡道に墮せん等なり、壽量品に云く、是の好き良藥を今留めて此に在く等云々、

「略開近顯遠」略して開近顯遠と說きたること百二十四頁を見よ

「新發意菩薩」動執生疑一百頁を見よ

「惡道」廿九頁を見よ

是好良藥

文の心は、上に過去の事を說くに似たる樣なれども、此の文を以て之を案ずるに、滅後を以て本と爲し、先づ先例を引けるなり。

（右、法華取要抄、遺の一〇四〇、内九の八）

○譬如少壯人年始二十五示人百歲子髮白而面皺是等我所生子

亦說是父父少而子老擧世所不信世尊亦如是得道來甚近の事

此に彌勒等の大菩薩大に疑ひをもふ、華嚴經の時、法慧等の無量の大菩薩あつまる、いかなる人々ならんとおもへば、我が善知識なりとをふせられしかば、さもやとうちおもひき、其の後の大寶坊白鷺池等の來會の大菩薩もしかのごとし、此の大菩薩は、彼等にはにるべくもなきなり（舊）たりげにましまし、定めて釋尊の御師匠がなんどをばしきを、令發道心とて幼稚のものどもなりしを、敎化して弟子となせりなんどおほせ（仰）あれば、大なる疑ひなるべし、日本の聖德太子は人王第三十二代、用明天皇の御子なり、御年六歲の時、百濟、高麗、唐土より、老人どものわたり（渡）たりしを、六歲の太子

譬へば少壯人、年始めて二十五なる人に百歲の子の髮白くして面皺るが如くして是れ等我が所生なりと云ひ子は父なりと云ふ子は老たる世擧も亦是れ父なりと說かん、父は少くして信ぜざる所なりんが如し、世尊も亦是の如し、得道より來た其だ近し

令發道心

聖德太子

父三十にして八十の子あり

彌勒の大疑問

「彌勒」三頁見よ

「阿耨多羅三藐三菩提」九十五頁を見よ

「華嚴經」七十六頁を見よ

我が弟子なりとおほせありしかば、彼の老人ども又合掌して我が師なり等云云、不思議なりし事なり、外典に申す、或者道をゆけば、路のほとりに、年三十計りなるわかものが、八十計りなる老人をとらへて、打ちけり、いかなる事ぞととへば、此の老翁は我が子なりなんど申すとかたるにもにたり、されば彌勒菩薩、疑ふて云く、世尊、如來太子たりし時、釋の宮を出て、伽耶城を去ること、遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を、成ずることを得たまへり、是れより已來始めて、四十餘年を過ぎたり、世尊いかん何ぞ此の少時に於て、大に佛事を作したまへり等云々、一切の菩薩、始め華嚴經より、四十餘年、會々に疑ひをまうけ（設）て、一切衆生の疑網をはらす中に、此の疑ひ第一の疑ひなるべし。

（右、開目抄遺の七八八、内三の五）

妙法蓮華經如來壽量品第十六

‖訓譯‖ 一切世間の天人及び阿修羅は皆今の釋迦牟尼佛釋氏の宮を出て、伽耶城を去ること遠からず道場に座して阿耨多羅三藐三菩提を得たまへりと思へり。

「阿修羅」九十五頁を見よ

「阿修羅」九十五頁を見よ

「隨他意」百一頁を見よ

「三惑」百廿一頁を見よ

伽耶の疑問

大莊嚴の疑問

○一切世間天人及阿修羅皆謂今釋迦牟尼佛出釋氏宮去伽耶城不遠座於道場得阿耨多羅三藐三菩提の事

是を以て本門に至つては、則ち爾前迹門に於て、隨他意の釋を加へて、又天人修羅に攝し、貪着五欲、妄見網中、爲凡夫顚倒と說き、釋の文には我座道場不得一法と云ふ、藏通兩佛の見思斷も、別圓二佛の無明斷も、並に皆見思無明を斷せざる故に隨他意と云ふ、所化の衆生の三惑を斷ずと謂へるも是れ實の斷にあらず。

（右、十法界鈔、遺の二九三、內、三十四の三十五）

一切の菩薩、始め華嚴經より、四十餘年、會々に疑ひをまうけて、一切衆生の疑網をはらす中に、此の疑ひ第一の疑ひなるべし、無量義經の大莊嚴等の八萬の大士、四十餘年と、今との歷劫、疾成の疑ひにも超過せり、觀無量壽經に、韋提希夫人の、阿闍世王が提婆にすかされて、父の王をいましめ、母を殺さんとせしが、耆婆、月光におどされて、母をはなち（放）たりし時、佛を請したてまつりて、まづ第一の問に云く、我れ宿し何の罪あつて、此の惡子を生む、世尊復何の因緣あつて、提婆達多と共に眷屬と爲り給ふ等云云、此の疑ひの中に、世尊復何の因緣あつて等の疑ひは、大なる大事なり、輪王は敵と共に生れず、帝釋は鬼と共ならず、佛は無量劫の慈悲者なり、いかに大怨と共にましまさゞるかと疑ふなるべし、而れども佛答へ給はず、されば觀經を讀誦せん人、法華經の提婆品に入らずば、いたづらごとなるべし、大涅槃經に、迦葉の三十六の問も、これには及ばず、されば佛此の疑ひを晴らさせ給はずば、一代の聖敎は泡沫に同じ、一切衆生は疑網にかゝるべし、壽量の一品の大切なるはこれなり、其の後、壽量品を說いて云く、一切世間の天人及び阿修羅は、皆今の釋迦牟尼佛は、釋氏の宮を出て、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を

韋提希夫人の疑問

此の惡子を生む

「提婆達多」九十九頁を見よ

「論王」とは轉輪王に同じ百六十二頁を見よ

「帝釋」百廿二頁を見よ

迦葉の三十六大疑問

壽量の一品

今の釋迦牟尼佛

「阿耨多羅三藐三菩提」九十五頁を見よ

「阿修羅」九九五頁を見よ

‖訓譯‖ 然に善男子我れ實に成佛してより已來無量無邊百千萬億那由佗劫なり。「那由佗」とは那由多梵音なり、百阿由多なり一那由多は或は萬億、或は千億、或は數千萬とも云ふ異說あり。

過去常顯る

各修各行

釋迦の眷屬

「大梵天王」とは色界初禪天の主、又三界の主なり、色界大梵天中の高樓閣の中に住すと云ふ。

成ずることを得たまへりと謂へり等云々、此の經文は、始め寂滅道場より、終り法華經の安樂行品にいたるまでの、一切の大菩薩等の所知をあげたるなり

（右、開目抄、遺の七八八、内三の六）

○然善男子我實成佛已來無量無邊百千萬億那由佗劫の事

然るに善男子、我れ實に成佛してより、已來、無量無邊、百千萬億、那由佗劫なり等云々、此の文は、華嚴經の三處の始成正覺、阿含經に云ふ、初成、淨名經の始坐佛樹、大集經に云ふ始め十六年、大日經の我昔座道場等、仁王經の二十九年、無量義經の我先道場、法華經の方便品に云ふ我始座道場等を一言に大虛妄とやぶる文なり、此の過去常顯るゝ時、諸佛皆釋尊の分身なり爾前迹門の時は、諸佛釋尊に肩を並べて、各修各行の佛なり、かるが故に諸佛を、本尊とする者、釋尊等を下す、華嚴經の臺上、方等、般若、大日經等の諸佛は、皆釋尊の眷屬なり、佛三十成道の御時は、大梵天王、第六天の知行の娑婆世界を奪ひ取り給ひき、今爾前迹門にして、十方を淨土と號して

此の土は本土十方は穢土壽量品なくば

「教主釋尊」廿三頁を見よ

大日は毘盧遮那化身

開顯實相

普賢經の文

迹門は末顯眞實なり

「爾前」百廿一頁を見よ

此の土を穢土ととかれしを打ちかへして、此の土は本土なり、十方の淨土は垂迹の穢土となる、佛は久遠の佛なれば、迹化他方の大菩薩も、教主釋尊の御弟子なり、一切經の中に、此の壽量品ましまさずば、天に日月なく、國に大王なく、山河に珠なく、人に精のなからんが如くしてあるべき。

（右、開目抄、遺七九〇、内三の八）

其上大日如來と云ふは、久遠實成の教主釋尊、四十二年、和光同塵して、其の機に應ずる時、三身卽一の如來、暫く毗盧遮那と示せり、この故に開顯實相の前には、釋迦の應化と見えたり、こゝを以て、普賢經には、釋迦牟尼佛を、毗盧遮那遍一切處と名づく、其の佛の住處を、常寂光と名づくと說けり。

爾前に對して、眞實と說くと雖も、而も未だ久遠實成を顯さず、此れは是れ、則ち末顯眞實の分域を得るなり、所以に、無量義經に、大莊嚴等の、菩

（右、聖愚問答抄、遺の五六〇、外一の二十五）

釋迦佛は我れ等が爲には主なり師なり親なり。（外十三の三十）

「阿修羅」九十五頁を見よ

迹門は隨他意なり

「隨他意」百一頁を見よ

釋迦は無始の古佛なり

「五百塵點」百十頁を見よ

薩の四十餘年の得益を擧げて、佛答ふるに、末顯眞實の言を以てす、又涌出品の中に、彌勒疑ふて云く、如來太子たりし時、釋の宮を出て、伽耶城を去ること、遠からず、乃至、始めて四十餘年を過ぎたり、（已上）、佛答へて云く一切世間の天人及び、阿修羅は、皆今の釋迦牟尼佛、釋氏の宮を出て、伽耶城を去ること遠からずして三菩提を得たりと謂へり、我れ實に成佛して已來（已上）、我實成佛とは、壽量品已前を未顯眞實と云ふにあらず哉、是の故に、記の九に云く、昔七方便より、誠諦に至るまでは、七方便の權と云ふは、且らく昔の權に寄す、若し果門に對すれば、權實俱に是れ隨陀意なり、（已上）、此の釋は明かに知んぬ、迹門をも、隨他意と云ふなり。

（右、十法界抄、遺の二九四、内三十四の三十六）

壽量品に云く、我れ實に成佛してより已來、無量無邊、百千萬億、那由陀劫なり、等云々、我等已心の釋尊、五百塵點、乃至、所顯の三身にして、無始の古佛なり。

「華嚴」七十六頁華嚴經を見よ

有始有終と無始無終

法身の無始無終

三身の無始無終

法華經の五百塵點（百十頁參照）

問ふて云く、大日經の疏に云く、大日如來は無始無終なり、遙に五百塵點に勝れたり、如何。

答ふ、毗盧遮那の無始無終なる事、華嚴、淨名、般若等の諸大乘經に之を說く、獨り大日經のみにあらず、

問ふて云く、若し爾らば五百塵點は、際限有れば有始有終なり、無始無終は際限無し、然れば則ち法華經は、諸經に破せらるゝ歟、如何。

答へて云く、陀宗の人は此の義を存す、天台一家に於て、此の難を會通する者、有り難き歟、今大日經並びに諸大乘經の無始無終は、法身の無始無終なり、三身の無始無終にあらず、法華經の五百塵點は、諸大乘經の破せざる、伽耶の始成之を破したる五百塵點なり、大日經等の諸大乘經には全く此の義なし。

（右、觀心本尊抄、遺の九三九、内八の十六）

（右、法華眞言勝劣抄、遺の五〇〇、内三十五の十）

‖訓譯‖我れ常に此の娑婆世界に在て說法敎化す

二十八品の肝心

本地久成の佛

我等が居住の山谷曠野、皆常寂光の寶處也（御義口傳）上の三十七才）其人所住の處は常寂光土也（內二十三の十三）

○我常在此娑婆世界說法敎化の事

問ふて云く、法華經修行の者、何れの淨土を期す可き耶、答へて云く、法華經二十八品の肝心たる壽量品に云く、我常在此娑婆世界と、又云く、我常住於此と、又云く、我此土安穩文、此の文の如くんば、本地久成の圓佛は、此の世界に在り、此の土を捨てゝ何れの土を願ふ可き乎、故に法華經修行の者の、所在の處を淨土と思ふ可し、何ぞ煩はしく陀處を求めんや、故に神力品に云く、若しは經卷、所住の處、若しは園の中に於ても、若しは林の中に於ても、若しは樹の下に於ても、若しは僧房に於ても、若しは白衣の舍にても、若しは殿堂に在ても、若しは山、谷、曠野にても、乃至當に知るべし、是の處は卽ち是れ道場なり。

（右、守護國家論、遺の二六五、內十の六十）

‖訓譯‖小法を樂へる德薄垢重の者

○樂於小法德薄垢重者の事

過去の大通佛の法華經より、乃至、現在の華嚴經、乃至、迹門十四品、涅槃經等の一代五十餘年の諸經、十方三世諸佛の微塵の經々は、皆壽量の序分なり、一品二半より外は、小乘經、邪見敎、未得道敎、覆相敎と名づくその機を論ずれば、德薄垢重、幼稚、貧窮孤露にして、禽獸に同じきなり、爾前迹門の圓敎すら尙佛因に非ず、何に況んや、大日經等の諸小乘經をや、何に況んや、華嚴、眞言等の七宗等の論師人師の宗をや、與へて之を論ずれば、前三敎を出でず、奪つて之を云へば藏通に同ず、設ひ法は甚深と稱すとも、未だ種熟脫を論せず、還つて灰斷に同じ、化の始終なしとは是れなり、譬ば王女たりといへども、畜種を懷姙すれば、其の子尙旃陀羅に劣れるが如し。

一品二半より外は邪見敎にして禽獸に同じ

迹門は佛因に非ず「爾前」百廿一頁を見よ

「種熟脫」百十四頁を見よ

旃陀羅に劣る「栴陀羅」百十三頁を見よ

（右、觀心本尊抄、遺の九四一、內八の十八）

‖訓譯‖或は己身を說き或は他身を說き或は己身を說き或は他身に示し或は己事を示し或は他事を示す

○或說己身或說佗身或示己身或示佗身或示己事或示佗事の事

法華經の壽量品に云く、或は己身を說き、或は佗身を說く等云々、東方の善德佛、中央の大日如來、十方の諸佛、過去の七佛、三世の諸佛、上行菩薩

「文殊師利」一頁文殊を見よ

釋尊は天の一月諸佛は萬水に浮べる影なり

「釋提桓因」とは百廿二頁の帝釋を見よ

「十界互具」とは地獄、餓鬼等の十界に各々他の九界を具有するを云ふ

「百界千如」百十五頁を見よ

等、文殊師利、舍利弗等、大梵天王、第六天の魔王、釋提桓因王、日天、月天、明星天、北斗七星、二十八宿、五星、七星、八萬四千の無量の諸星、阿修羅王、天神、地神、山神、海神、宅神、里神、一切世間の國々の主とある人、何れか教主釋尊ならざる、天照太神、八幡大菩薩も、其の本地は教主釋尊なり、例せば釋尊は天の一月、諸佛、菩薩は萬水に浮べる影なり、釋尊一體を造立する人は、十方世界の諸佛を作り奉る人なり、譬ば頭をふれば髪ゆるぐ、心はたらけば身うごく、大風吹けば、草木しづかならず、大地うごけば、大海さはがし、教主釋尊をうごかし奉れば、ゆるがぬ草木やあるべき、さはがぬ水やあるべき。

（右、日眼女造佛抄、遺の一八三〇、内二十八の二十）

天台宗より外に十界互具、百界千如、一念三千と談ずる人これなし、若し一念三千を立てずんば、性惡の義これなし、性惡の義なくば、佛、菩薩の普現色身、眞言兩界の曼荼羅、五百七百の諸尊は、本無今有の外道の法に同せ

何れの經に十界皆成の旨を說けるや

涅槃經云く

佛は唯だ釋迦一佛あるのみ

「三千大千世界」九十一頁を見よ

世に二佛なし國に二王なし

「十界互具」百卅四頁を見よ

ん歟、若し十界互具、百界千如を立てば本經何れの經にか、十界皆成の旨を說ける耶、天台圓宗の見聞の後、邪智莊嚴の爲に盜み取れる法門なり、才藝を誦し、浮言を吐くには依るべからず、正しき經文金言を尋ぬべきなり、是涅槃經の三十五に云く、我れ處々の經の中に於て、說いて言く、一人出世すれば、多人利益す、一國の中に二轉輪王あり一世界の中に二佛出世すれば、是の處あること無し文、大論の九に曰く、十方恒河沙の三千大千世界を名づけて一佛世界と爲す、是の中に更に餘佛なし、實には一りの釋迦牟尼佛なり文、記の一に云く、世には二佛なく、國には二王なし、一佛の境界には二尊の號なし、持地論に云く、世に二佛なく、國に二主なく、一佛の境界に二尊の號なし。

（右、眞言見聞、遺の八七六、内三十七の十五）

法華已前の諸經は、十界互具を明かさゞれば、佛に成らんと願ふには、必ず、九界を厭ふ、九界に佛界を具せざる故なり、されば必ず惡を滅し、煩惱

厭離斷九の佛

「爾前」百廿一頁を見よ

「煩惱」とは惑と云ふ身心を惱亂する精神作用を云ふ是れに根本惑と隨惑とあり又分ちて十の別あり煩惱二十隨煩惱八百八煩惱萬四千の煩惱事理に別てとす塵沙見惑無明見惑の三惑とす今十見思の煩惱は㊀欲貪瞋慢邪見戒取見疑㊁貪瞋癡慢邪見身見邊見戒取見なり

を斷じて佛に成ると談ず、凡夫の身に佛を具すと云はざるが故に、されば人天惡人の身を失ふて佛に成ると談ず、此れをば妙樂大師は、厭離斷九の佛と名く、されば、爾前の經の人々は、佛の九界の形を現ずるをば、但佛の不思議の神變と思ひ、佛の身に九界が本よりありて、現ずるとは云はず、されば實を以てさぐり給ふに、法華經已前には、但權者の佛のみ有て、實の凡夫が佛に成りたりける事は無きなり、煩惱を斷じ、九界を厭ふて、佛に成らんと願ふは、實には九界を離れたる佛なき故に、往生したる實の凡夫もなし、人界を離れたる菩薩もなき故に、但法華經の佛の爾前にして、十界の形を現じて、所化とも、能化とも、惡人とも、善人とも、外道とも、云はれしなり、實の惡人、善人、外道、凡夫は、方便の權を行じて、眞實の敎と、うち思ひなして、すぎし程に、法華經に來りて、方便にてありけり、實には見思無明も斷せざりけり、往生もせざりけり、なんど、覺知するなり。

（右、一代大意抄、遺の一九四、三十の二十）

○諸所言說皆實不虛の事

壽量品の皆實不虛を、天台釋して曰く、圓頓の衆生に約すれば、迹本二門に於て、一實一虛なり己上、記の九に云く、故に知んぬ、迹の實は本に於て猶虛なり己上、迹門既に虛なること論に及ぶべからず、但皆是眞實とは、若し本門に望むれば、迹は是れ虛なりと雖も、一座の內に於て虛實を論ず、故に本迹兩門俱に眞實と言ふなり、例せば迹門法說の時、譬說因緣の二周も、此の一座に於て聞知せざること無し、故に名づけて顯と爲すが如し、記の九に云く、若し方便敎には二門俱に虛なり、因門開し竟りて、果門に望むれば則ち一實一虛なり、本門顯れ竟れば、則ち二種俱に實なり己上、此の釋の意は本門未だ顯れざる以前は、本門に對すれば、尙迹門を以て名づけて虛となす、若し本門顯れ已んぬれば、迹門の佛因は卽ち本門の佛果なるが故に、天月、水月本有の法と成りて、本迹俱に三世常住と顯るゝなり、一切衆生の始覺を名づけて、迹門圓因と言ひ、一切衆生の本覺を名づけて、本門の圓果と

‖訓譯‖諸の言說する所は皆實にして虛しからず

迹門は虛なり

一實一虛也

本門に來れば皆實也

迹門は月の如く本門は日の如し。（三十五の十三）

修一圓因感一圓果

「六道」廿八頁を見よ
「本門」百一頁を見よ
「迹門」百五十六頁を見よ

‖訓譯‖ 諸の子毒を飲んで或は本心を失へるあり

「善無畏」は西歴六百三十七年生れ同七百三十七年寂す梵名戍羅揭僧訶浮師子と譯す、善無畏は義中なり、中印度の人、父は佛手王と云ふ、十歳にして王位を嗣ぎしが位を去り邦爛陀寺に行きて遂

爲す、修一圓因、感一圓果とは是れなり、是の如く法門を談ずるの時、迹門爾前は、若し本門顯れざれば、六道を出でず、何ぞ九界を出でんや。

（十法界抄、遺の二九、内三十四の三十六）

○諸子飲毒或失本心の事

正直捨方便の明文、豈是れを疑ふべきや、然るに人皆經文に背き、世悉く法理に迷へり、汝何ぞ惡友の教に隨はんや、されば邪師の法を信じ受くる者を、名づけて毒を飲む者なりと、天台は釋し給へり、汝能く是を愼むべし是を愼むべし。

（右、持法華問答抄、遺の四七三、内二十一の九）

若し知識に値へば宿善還つて生ず、若し惡友に値へば則ち本心を失ふ云々、恐らくは中古の天台宗の慈覺、智證の兩大師も、天台、傳教の善知識に違背して、善無畏、不空等の惡友に遷れり、末代の學者、慧心の往生要集の序に誑惑せられ、法華の本心を失ひ、彌陀の權門に入る、退大取小の者なり、過

厚拘多に謁し密教を受く、後支那長安に至る、開元寺、西明寺に住し後菩提院に入り密教を譯す、開元二十三年寂す壽九十九

‖訓譯‖ 是の好き良藥を今留めて此に在り

「閻浮提」九十六頁を見よ

「正像末」とは釋尊入滅後遺教の信奉せらるゝ程度により分ちたる三期、即ち正法、像法、末法の略語なり、正法は教行證の三具あり、成佛する時期、一千年なり、像法は教行のみあり、一千年末法は遺教のみあり、末法は行證なり、凡者なり、後の像法の後一萬年此を滅後の三時と云ふ

去を以て之を推するに、未來無數劫を經て、三惡道に處せん、若し惡友に値へば、則ち本心を失ふとは是なり。

（右、四信五品抄、遺の一五四〇、内十六の六十六）

○是好良藥今流在此の事

壽量品に云く、今留めて此に在く、分別功德品に云く、惡世末法の時、藥王品に云く、後の五百歳の閻浮提に於て、廣宣流布せん、涅槃經に云く、譬ば七子あり父母平等ならざるに非ざれども、然も病者に於て、心則ち偏に重きが如し等云々、已前の明鏡を以て、佛意を推知するに、佛の出世は、靈山八年の諸人の爲にあらず、正像末の人の爲なり、又正像二千年の人の爲にあらず、末法の初め、予が如き者の爲なり、然於病者と云ふは、滅後の法華經誹謗の者を指すなり、今留在此とは於此好色香藥、而謂不美の者を指すなり。

（右、觀心本尊抄、遺の九四七内、八の二十六）

是好良藥とは、壽量品の肝要たる、妙體宗用教の南無妙法蓮華經是れなり

壽量品の一品二半は始より、終に至るまで正しく滅後の衆生の爲め、滅後の中には、末法今時の日蓮等が爲なり、疑ふて云く、此の法門前代に未だ之を聞かず、經文に之ありや、答へて曰く（中略）壽量品に云く、是の好き良藥を今留めて此に在り等云々、文の心は上に過去の事を說くに似たる樣なれども、此の文を以て之を案ずるに、滅後を以て本と爲す。

（右、觀心本尊抄、遺ノ九四四、内八ノ廿二）

○遣使還告の事

問ふて云く、此の經文の遣使還告は如何、答へて曰く、四依なり、四依に四類あり、小乘の四依は、多分は正法の前の五百年に出現す、大乘の四依は多分は正法の後の五百年に出現す、三に迹門の四依は、多分は像法一千年、少分は末法の始めなり、四に本門の四依は、地涌千界なり、末法の始めに必ず出現すべし、今の遣使還告は地涌なり。

（右、法華取要抄、遺の一〇四〇、内九の八）

＝訓譯＝使を遣はして還て告ぐ

「四依」とは法四依人四依の別あり、人四依とは

(一)五品十信＝初依

(二)十　住＝二依

(三)十行十回向三依

(四)十地等覺＝四依

（法凝玄義）

法四依に就ては、百四十三頁を見よ

自ら惟ろに孤露にして

＝訓譯＝一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜しまず

「三大秘法」とは本門の本尊（一）本門の戒壇（二）本門の題目（三）

「傳敎」八十三頁を見よ

「龍樹」八十八頁を見よ

方便して涅槃を現ず

○自惟孤露

寂超法師

とことはに頼むかげなき音をぞ鳴

齡の林の空をこひつゝ

方便現涅槃

隆世

末の世をてらしてこそは二月の

半の月は雲がくれけれ

（右、觀心本尊抄、遺ノ九四四、内八ノ廿二）

○一心欲見佛不自惜身命の事

壽量品の自我偈に云く、一心に佛を見たてまつらんと欲して、自ら身命を惜まず云々、日蓮が已心の佛界を此の文に依つて顯すなり、其故は壽量品の事の一念三千の、三大秘法を成就せる事此の經文なり、秘すべし秘すべし、叙山の大師渡唐して、此の文の點を相傳し給ふ處なり、一トハ一道清淨の義、心トハ諸法なり、されば天台大師、心ノ字を釋して云く、一月三星心果清淨

「無作の三身」無作とは無生無滅の理、無爲の法性三身とは法身、報身、應身を云ふ。此の三身が無生無滅なるを無作の三身といふ。

云々、日蓮云く、一トハ＝妙なり、心トハ＝法なり、欲トハ＝蓮なり、見トハ＝華なり、佛トハ＝經なり、此の五字を弘通せんには、不自惜身命是れなり

一心に佛を見る、心を一にして佛を見る、一心を見れば佛なり、無作の三身の佛果を成就せんことは、恐らくは天台、傳敎にも超へ、龍樹、迦葉にも勝れたり、相構へ相構へて心の師となるとも、心を師とすべからずと、佛は記し給ひしなり、法華經の御爲には身をも捨、命をも惜まざれと、強盛に申せしは是れなり。

（右、義淨房御返事、遺の九六五、外二十五の一）

一心欲見佛不自惜身命　　藤原高倉

入月をしたふ心のまことあらば

ふたゝびてらす影はみてまじ

常在靈鷲山　　家隆

わしの山法を木のはにかきをきて

花のひもとく鹿のそのかな

○是れより自我偈の事

「法四依」とは（一）依法不依人（二）依了義經不依不了義經（三）依義不依語（四）依智不依識（法界次第）

自我偈の功德は、唯佛與佛、乃能究盡なるべし、夫れ法華經は一代聖敎の骨髓なり、自我偈は二十八品のたまひしなり、三世の諸佛は壽量品を命とし十方の菩薩も自我偈を眼目とす、自我偈の功德をば私に申すべからず、次ぎ下に分別功德德品に載せられたり、此の自我偈を聽聞して、佛になりたる人々の數をあげ候には、小千、大千、三千世界の微塵の數をこそあげて候へ、其上、藥王品已下の六品の得道のもの、自我偈の餘殘なり、涅槃經四十卷の中に集まりて候ひし、五十二類にも、自我偈の功德をこそ佛は重ねて說かせ給ひしか、されば初め寂滅道場に、十方世界微塵數の大菩薩、天人等雲の如く集まりて候ひし大集、大品の諸聖も、大日經、金剛頂經等の千二百餘尊も、過去に法華經の自我偈を聽聞してありし人々、信力よはくして三五の塵點を經しかども、今度釋迦佛に値ひ奉りて、法華經の功德すすむ故に、靈

「三世」卅一頁を見よ

「十方」卅一頁を見よ

「三千世界」九十一頁の三千大千世界參照

「唯佛與佛」とは唯佛は釋尊のこと與佛とは他の佛のこと。

「三五の塵點」三千塵點劫は五百塵點劫の略語

「爾前」とは百廿一頁を見よ

「阿防羅殺」とは梵音あばらしやす、下方可畏鬼と譯す、地獄牛頭人首の獄卒のこと、脚は牛蹄にして力壯なり、能く山を排す、剛鐵劍を持て居る鬼

「教主釋尊」廿三頁を見よ

「阿修羅」とは又は阿素羅、略して修羅、阿須倫、略して須倫とも云ふ、梵音非天、非天とは云はず、不端正と譯す、十界の六道の一、大海の底に居り、又は常に海の中に居り、三十三天と戰ふ、或は鬼類なりとも云ふ、所謂三貌三菩提を得たりと謂へり云々、此菩提は又は阿耨多羅三藐三菩提と云ふ、阿耨多羅は阿素羅、三藐は正、三は遍、菩提は覺、アヌツタラサムヤクサンボードヒ、無上正等覺と譯す、佛の覺りは無上正等覺なり、佛智慧を云ふ、佛智は轉迷開悟し、平等の眞理に於て知らざる所なく、又世に於て無上なるが故に此名ありと云ふ、「閻浮提」とは須彌山の南の一、須彌山の南方に位し、五百の中の大國、六十の小國あり、南は廣く北は狹く、地形は七千由旬に當り、人面は横に廣く、身長三肘半或は三肘なり、人壽百歳にして、中天の者は四洲に劣ること遥かに遠し、樂は東北の二洲に勝れ、法は第一とす、故に諸佛は北の洲のみに出現す

山をまたずして、爾前の經々を緣として、得道なると見えたり、されば十方世界の諸佛は、自我偈を師として、佛にならせ給ふ、世界の人の父母の如し今法華經壽量品を持つ人は、諸佛の命を續く人なり、我が得道なりし經を持つ人を捨て給ふ佛あるべしや、若し此を捨て給はば、佛還つて我が身を捨て給ふなるべし（中略）法華經の自我偈を持つ人を敵とせんは、三世の諸佛を敵とするになるべし。

（右、法蓮鈔、遺の一六四、内十五の二十二）

教主釋尊壽量品を說き給ふに、爾然迹門のきゝ（所聞）をあげて云く、一切世間の天人及び、阿修羅は皆今の釋迦牟尼佛、釋氏の宮を出でゝ伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂へり云々、此の文の意は、初め華嚴經より、終り法華經安樂行品に至るまで、一切の佛の御弟子等の知る處の思ひの心中をあげたり、爾前の經に二ッの失あり、一に行布を存する故に、仍未だ權を開せず、と申して、迹門方便品の十如是の、

一念三千、開權顯實、二乘作佛の法門を說かざる過なり、二には始成を云ふ故に、尙未だ迹を發はず、と申して、久遠實成壽量品を說かざる過なり、此の二ッの大法は一代聖敎の骨髓、一切經の心髓なり、迹門には二乘作佛を說きて、四十餘年の二ッの失、一ッを脫したり、然りと雖も、未だ壽量品を說かざれば、實の一念三千もあらはれず、二乘作佛も定まらず、水にやどる月の如く、根無し草の浪の上に浮べるに異ならず、又云く、然るに善男子、我れ實に成佛してより、已來、無量無邊、百千萬億、那由陀劫等云云、此の文の心は華嚴經の始成正覺と申して、始めて佛になると說き給ふ、阿含經の初成道淨名經の始坐佛樹、大集經の始十六年、大日經の我昔道場、仁王經の二十九年、無量義經の我先道場、法華經方便品の我始坐道場等を、一言に大妄語なりと、打破る文なり、本門壽量品に至りて、始成正覺やぶるれば、四敎の果やぶれ、四敎の果やぶれぬれば、四敎の因やぶれぬ、因とは修行弟子の位なり、爾前迹門の因果を打破つて、本門の十界の因果をときあらはす、是れ

「四敎」とは藏、通別、圓

「十界互具」百卅四頁を見よ

「華嚴經」七十六頁見よ

「一念三千」とは一念の心に三千の諸法を具すといふこと

「開權顯實」略して開顯ともいふ、法華經にして三乘方便の權教を開除して一乘眞實の實の教を顯すこと

「丈六の小釋迦」一丈六尺の佛身、佛在世の常人身長は八尺にして佛は其倍なり然るに丈六の小釋迦といふは劣應身を意味したるなり

「提婆達多」百四十九頁を見よ

則ち本因本果の法門なり、九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界にそなへて、實の十界互具、百界千如、一念三千なるべし、かうしてかへ(返)してみるときは、華嚴經の臺上盧舍那、阿含經の丈六の小釋迦、方等、般若、金光明經、阿彌陀經、大日經等の權佛等の、此の壽量品の天月のしばらくかげ(影)を大小のうつはもの(器物)に浮かべ給ふを、諸宗の智者學匠等は近くは自宗にまどひ、遠くは法華經の壽量品を知らず、水中の月に實月のおもひをなして、或は入て取らんとおもひき、或は繩をつけてつなぎとゞめんとす此を天台大師釋して云く、天月を識らずして、但池月を觀ずと、心は爾前迹門に執着するものは、そら(天)の月をしらずして、但池の月をのぞみ見るが如くなりと釋せられたり、又僧祇律の文に、五百の猨、山より出でゝ、水にやどれる、月をみて、入てとらんとしけるが、實には無き水月なれば、月とられずして、水に落入て猨は死にけり、猨とは今の提婆達多、六群比丘等なりと、あかし給へり、一切經の中に、此の壽量品ましまさずば、天に日月無

「一切經」とは華嚴經、阿含經、方等經、般若經、法華經、涅槃經等にして七千三百九十九卷あり、

「六群比丘」とは
(一)難陀
(二)跋難陀
(三)迦留陀夷
(四)闍陀師
(五)馬宿
(六)滿慈多
いは
ろは
はは
瞋多し

「不殺生戒」と五戒の一、生きたものを殺さぬこと此の戒に小乘の戒と大乘戒との別あり、小乘戒には絶對に殺生を許さず大乘にては一を殺して萬を生ずの相對的戒ある

く、國に大王なく、山海に玉なく、人にたましゐ無からんがごとし、されば壽量品なくしては、一切經いたづらごとなるべし、根無き草はひさしからずみなもとなき河は遠からず、親無き子は人にいやしまる、所詮壽量品の肝心南無妙法蓮華經こそ、十方三世の諸佛の母にて御座し候へ。

(右、壽量品得意鈔遺の六六九、外十五の十一)

○壽量品に云く、我れ實に成佛して己來、無量無邊なり等云云、此の經文に、我れと申すは十界なり、十界本有の佛なれば、淨土に住するなり。

(右、上野殿後家尼御前御返事、遺の一〇五二)外二の三十五)

○法華經の壽量品は、釋迦如來の不殺生戒の功德に當つて候品ぞかし。

(右、主君耳入抄遺の一〇五八、内十七の四十五)

○壽量品の南無妙法蓮華經を以て下種と爲す、是の好き良藥を今留めて此に在く汝取て服す可し、差へじと憂ふること勿れ、とは是れなり。

(右、教行證、遺の一一一五、外二十の四)

「閻浮提」百四十五頁を見よ
「一念三千」百四十六頁を見よ

「自受用身」とは自ら得たる法樂を獨り樂む佛身にして他受用身の對

「世間」とはよのなか、世は遷流、隔歴の義、間は隔別間斷の義なり、過現未の三世に遷されて、而も相集まりて差別間隔あるものを世間といふ

「自受法樂」とはわが證得の境界を樂しむこと

○一切衆生、南無妙法蓮華經と唱ふるより外に遊樂なきなり、經に云く、衆生所遊樂云云、此の文あに自受法樂にあらずや、衆生のうちに貴殿もれ給ふべきや、所とは一閻浮提なり、日本國は一閻浮提の内なり、遊樂とは我等が色心依正ともに、一念三千、自受用身の佛にあらずや、法華經を持ち奉るより外に遊樂はなし、現世安穩、後生善處とは是なり、たゞ世間の留難來ると雖も、とりあへ給ふべからず、賢人聖人とも此の事はのがれず、たゞ女房と酒うちのみて、南無妙法蓮華經とともなへ給へ、苦をば苦とさとり、樂をば樂とひらき、苦樂ともに思ひ合せて、南無妙法蓮華經とうちとなへゐ(唱居)させ給へ、これあに自受法樂にあらずや、いよ〳〵強盛の信力をいたし給へ。

(四條金吾殿御返事、遺の一四四一、寶外八)

「五波羅密」
(一)檀波羅密
(二)尸羅波羅密
(三)羼提波羅密
(四)毗梨耶波羅密
(五)禪波羅密
(一)は布施(二)は記浄持戒(三)は精進(四)は禪定(五)は調達と云ふ、梵音デーヴダッタ、天熱天授と譯す、斛飯王の子、釋尊の從兄弟、一説に善覺長者の子と云ふ、釋尊成道の後出家して弟子となるも佛の威勢なる嫉み五百の衆なる

○妙法蓮華經功德品第十七

傳敎大師

分別功德品

わが命ながしと聞てよろこべる
人はさながら佛とぞなる

分別功德品に爾前四十餘年の八十萬億劫の間、檀戒、忍進念佛三昧等、先の五波羅密の功德を以て、法華經の一念信解の功德に比するに、一念信解の功德は、念佛三昧等の先の五波羅密に、勝るゝこと百千萬倍なり。

(右、守護國家論、遺の二、四二内十の三十)

分別功德品の四信と五品とは、法華を修行すべきの大要、在世滅後の龜鏡なり、荆谿云く、一念信解とは卽ち是れ本門立行の初めなりと云云、其中に現在の四信の初めの一念信解と、滅後の五品の第一の初隨喜と、此の二處は一同に百界千如、一念三千の寶篋なり、十方三世の諸佛の出門なり、天台、妙

卒いて別立し阿闍太子と結び佛陀を亡ぼし醍醐の教團を握らんと企て成らず後阿闍世太子改悔して其罪を謝し事に及びてそれ〳〵非にしたがひて生きての逆罪の人間地獄に墮ちながら無間の苦を受くるが故に邊地に生れ共法華經提婆品に依れば却て善智の識であるのに天王如來となるのである

「百界千如」百七十二頁を見よ

「一念三千」百四十六頁を見よ

「新發意菩薩」とは二菩薩心したる菩薩のこと、初發心なるが故に邊地に生れ又邪見の家より出たる者は人を度すること能はずして却て自己善根を敗たる菩薩を云ふ

樂の二りの聖賢、此の二處の位を定むるに、三ツの釋あり、所謂、或は相似十信鐵輪の位、或は觀行の五品の初品の位、未斷見思、或は名字卽の位なり、止觀に其不定を會して云く、佛意知り難し、機に赴きて異說す、此れを借て開解せば、何ぞ勞しく苦に諍んと云云、予が意に云く、三釋の中、名字卽は經文に叶ふ歟、滅後の五品の初めの一品を說て云く、而も毀訾せずして隨喜の心を起すと、若し此の文相似の五品に渡らば、而不毀訾の言は便ならざる歟、就中壽量品の失心不失心等は、皆名字卽なり、(中略) 又一念信解の四字の中の信の一字は四信の初めに居し、解の一字は後に奪はる故なり、若し爾者、無解有信は四信の初位に當る、經に第二信を說て云く、略解言趣と云々記の九に云く、唯初心を除く、解無きが故に、隨つて次ぎ下の隨喜品に至つて、上の初隨喜を重ねて之を分明にす、五十人是れ皆展轉劣なり、第五十人に至つて二釋有り、一には謂く、第五十人は初隨喜の內なり、二には謂く第五十人は初隨喜の外なり、外とは名字卽なり、敎彌實なれば位彌下れりと云

「三學」とは(一)に戒(二)定(三)慧なり戒は持戒定は彌定慧は智慧なり

「闡提」とは斷善根、信不具足などゝ譯す本來解脫の因を缺きて到底成佛することゝ叶はず

「五度」とは五波羅密に同じ百四十九頁を見よ

「四事」とは供養に用ゆる四種の事物、衣服、飲食、散華燒香の稱、又は飲食、衣服、臥具、湯藥稱又は衣服、飲食、散華、燒香の稱なり

「隨他意」とは隨自意の對相手の心意にかなはしむること他意に應同すること方便

ふ釋は此の意なり、四味三敎より圓敎は機を攝し、爾前の圓敎より法華經は機を攝し、迹門より本門は機を攝すなり、敎彌實位彌下の六字に心を留めて案ずべし、問ふ末法に入て初心の行者必ず圓の三學を具するや否や、答て云く、此の義大事たり、故に經文を勘へ出して貴邊に送附す、所謂五品の初めの二三品には、佛正しく戒定の二法を制止して、一向に慧の一分に限る、慧又堪へざれば信を以て慧に代へ、信の一字を詮と爲す、不信は一闡提謗法の因、信は慧の因名字卽の位なり、(中略) 問ふて云く、末代の初心の行者、何物をか制止するや、答て曰く、檀戒等の五度を制止して、一向に南無妙法蓮華經と稱せしむるを、一念信解の初隨喜の氣分と爲す、是れ則ち此の經の本意なり、疑つて云く、此の義未だ見聞せず、心を驚かし、耳を迷はす、明かに證文を引て請ふ苦に之を示せ、答て曰く、經に云く、我が爲に復塔寺を起て及び僧坊を作り、四事を以て衆僧を供養することを須ひじ、此の經文明かに初心の行者に、檀戒等の五度を制止する文なり、疑つて云く、汝が引く

「五度」百五十一頁を見よ

「本門」とは釋尊が久遠の昔に於ける最初の成道（本時）のことことより今番出世まで度々出世し、入滅せるさまを說きて今の佛は無始、久遠の古佛なる旨を知らし彌陀、大日、藥師等の佛は全く化身なりと明し我れは五百塵點劫昔よりの本佛なる旨を說れたる法華經二十四品の後十八品の說法これなり。即ちこれ迹顯本開近顯遠の法門にして本門の開顯とはこれなり

處の經文は、但寺塔と衆僧と計りを制止して、未だ諸の戒等の五度に及ばざるか、答て曰く、初めを擧げて後を略す、問ふて云く、何を以て之を知らん、答て曰く、次ぎ下の第四品の經文に云く、況んや復人有て能く是の經を持つて、兼て布施持戒等を行せんをや、云々、經文分明に初め二三品の人には檀戒等の五度を制止し、第四品に至つて始めて之を許す、後に許すを以て知んぬ、初めに制することを。

（右四信五品鈔、遺の一五三八、内十六の六十三）

○分別功德品の六百八十萬億、那由陀恒河沙の菩薩、又千倍の菩薩、復一世界の微塵數の菩薩、又三千大千世界の微塵數の菩薩、復二十中國土の微塵數の菩薩、復小千國土の微塵數の菩薩、復四四天下微塵數の菩薩、三四天下二四天下一四天下の微塵數の菩薩、復八世界微塵數の衆生、（中略）此れ等の菩薩を委しく數へば、十方世界の微塵數の如し、十方世界の草木の如し、十方世界の星の如し、十方世界の雨の如し、此れ等は皆法華經にて、佛にならせ

「三身如來」
（一）法身如來
（二）報身如來
（三）應身如來

「三毒の煩惱」貪、瞋、痴煩惱をいふ。百三十六頁煩惱を見よ

＝訓譯＝其れ衆生有て佛の壽命長遠是の如くなるを聞て乃至一念の信解を生ぜば所得の功德限量有ること無けん。

「無作」とは無生無滅の義

給ひて、此の三千大千界の地上地下虛空の中にましまします。

（右所譯鈔、遺の八九八、内十六の四十六）

○分別功德品

御義口傳に曰く、此の品は上の品の時本地無作の三身如來の壽を聞く故に、今の品にして、上の無作の三身を信解するなり、其の功德を分別するなり、功德とは十界巳巳當體の三毒の煩惱を、此の品の時、其の儘妙法の功德なりと分別するなり、其の功德とは本有の南無妙法蓮華經是れなり云云。

（右、御義口傳下十一のう）

○其有衆生聞佛壽命長遠如是乃至能生一念信解所得功德無有限量の事

御義口傳に曰く、一念信解の信の一字は、一切の智慧を受得する處の因種なり、信の一字は名字卽の位なり、仍て信の一字は最後品の無明を切る利劒なり、信の一字は壽量品の理顯本を信ずるなり、解とは事顯本を解するなり、此の事理の顯本を一念に信解するなり、一念とは無作本有の一念なり、此の

如く信解する人の功德は、限量有る事有るべからず、信の處に解あり、解の處に信あり、然りと雖も、信を以て成佛を決定するなり、今日蓮等の類、南無妙法蓮華經と唱へ奉る者是れなり云云。

（右御義口傳下十二のお）

○是則能信受如是諸人等頂受此經典の事

御義口傳に曰く、法華經を頭に頂くと云ふ明文なり、如是諸人等の文、廣く一切衆生に亘るなり、然れば三世十方の諸佛、妙法蓮華經を頂に受て成佛し給ふ、仍て上の壽量品の題目を、妙法蓮華經と題して、次ぎに如來と題したり秘すべし云云、今日蓮等の類、南無妙法蓮華經と唱へ奉るは此の故なり云云。

（右、御義口傳下十二のお）

○佛子住此地則是佛受用の事

御義口傳に曰く、此の文を自受用の明文と云へり、此地とは無作の三身の依地なり、佛子とは法華の行者なり、佛子は菩薩なり、法華の行者は菩薩な

＝訓譯＝是れ則ち能信受せん是の如き諸人等此の經典を頂受して。

＝訓譯＝佛子此の地に住すれば則ち是れ佛受用し給ふ。

「無作の三身」百四十二頁を見よ

り、住とは信解の義なり、今日蓮等の類、南無妙法蓮華經と唱へ奉らば、妙法の地に住するなり、佛受用の身深く之を案ずべし云云。

（右、御義口傳下十二のう）

○一念信解の事

仰に云く此の經文は、一念三千の寶珠を納めたる箱なり、是は現在の四信の初の一念信解なり、さて滅後の五品の初の十心具足初隨喜品も、一念三千の寶を積たる箱なり、法華經の骨髓、末法に於て、法華經の行者の修行相貌分明なり、所詮信と隨喜とは心同じなり、隨喜すれば信心なり、信心なるは隨喜なり、一念三千の法門は、信心隨喜の箱に納めたり、又此の箱とは所謂南無妙法蓮華經是れなり、又此の箱は我れ等が一心なり、此の一心は萬法の總體なり、總體は題目の五字なり、一念三千と云ふが如く、一心三千もあり釋に云く、芥爾有心卽具三千矣、寶の箱とは我れ等が色心の二法なり、本迹兩門生死二法、止觀の二法なり、所詮信心の箱に入たる南無妙法蓮華經の箱

「一念三千」百四十六頁を見よ

「隨喜品」とは百六十二頁を見よ

「隨喜」とは百六十三頁を見よ

「色心の二法」色とは我等身體なり心とは卽ち精神なり

なり云云。

（有、日向記全、四十一う）

○分別功徳の事

文句の九に云く、佛壽量を説き給ふに、二世の弟子、種々の益を得る故に功徳と云ふ、淺深同じからざるが故に分別と言ふなり、記の九に云く、二世とは地涌は過去、靈山は現在なり、章安云く、現在、未來の弟子、益を得る故に功徳と言ふ。

二世の弟子

「章安」百五十九頁を見よ

（右、註法華經六の二十八のお）（百四十九頁の分別功徳品參照）

○妙法蓮華經隨喜功徳品第十八

最惠法親王

隨喜功徳品　　俊成

谷川のながれの末を汲入も
　　菊はいかゝはしらしありけん

同　　濟繼

うつしをく袖より袖の追風も
　　ふかき匂ひぞ花につきせぬ

五十展轉隨喜の功徳　　最惠法親王

法の花いく山風にさそはれて
　　こゝまでも猶匂ひきぬらん

同　　爲顯

さよふけて五十年につたふ濱千鳥

是の如く展轉して教ゆること第五十人に至らん

世は皆牢固ならざること水沫泡焔の如し

何に況や法會に於て

きゝつゝ人も夢はさむなり
如是展轉教
つたひ行五十の末の山の井に　慈鎮
御法の水を汲みてしる哉
世皆不牢固如水沫泡焔　讀み人不知
浮ながらしばしたゝよふ水の泡
消なですまん世とは頼まず　同じく
何況於法會
水上を思ひこそやれ谷川の
ながれも匂ふきくの下みづ

隨喜品に至つて上の初隨喜を重ねて之を分明す、五十人は是れ皆展轉劣なり、第五十人に至つて、二つの釋あり、一には謂く、第五十人は初隨喜の内なり、二には謂く、第五十人は初隨喜の外なり、外とは名字卽なり、教彌實

「隨喜品」百六十二頁參照

「章安」西暦五百六十一年に生れ同六百三十二年に寂す、姓は吳氏、諱は灌頂、臨海縣章安の人、七歳の時攝靜寺に入り廿歳の時具足戒を受けにして廿五歳の時智者大師に謁して高弟となり廿八歳の時法華文句を聽き廿二歳にして法華玄義を聞き、凡そ大師に隨ふこと十三年、講說所の百餘卷に及ぶ、博聞强記にして韓愈の記に

なれば位彌下れりと云ふ釋は此の意なり、四味三教より圓教は機を攝し、爾前の圓教より法華經は機を攝し、迹門より本門は機を攝すなり、教彌實位彌下の六字に心を留めて之を案ずべし。

（右、四信五品抄遣の一五三九、内十六の六十五）

隨喜品

御義口傳に曰く、妙法の功德を隨喜する事を說くなり、五十展轉とは、五とは妙法の五字なり、十とは十界の衆生なり、展轉とは一念三千なり、教相の時は、第五十人の隨喜の功德を校量せり、五十人とは一切衆生の事なり、妙法の五十人、妙法蓮華經を展轉するが故なり、所謂妙法蓮華經を展轉するなり云云。

（右、御義口傳下十三のお）

○妙法蓮華經隨喜功德の事

御義口傳に曰く、隨とは事理に隨順するを云ふなり、喜とは自他共に喜ぶ

実に阿難の釋尊に於けるが如しと傳へらるゝ、天台の宗義に對する智者の論説は一に章安の手によりて後世に傳へらるる其の著書の多きは八部四十書九卷あり。世に總持尊者と云ふ、章安は所名なれど一段章安大師と云ふ

「無作の三身」百四十二頁を見よ

「五百塵點」百六十四頁を見よ

「隨喜」とは百六十三頁を見よ

事なり、事とは五百塵點の事顯本に隨ふなり、所詮壽量品の内證に隨順するを隨とは云ふなり、然るに自他共に智慧と慈悲と有るを喜とは云ふなり、所詮今日蓮等の類、南無妙法蓮華經を唱へ奉る時、必ず無作三身の佛に成るを喜と云ふなり、然るに間隨とは法に約し、喜とは人に約するなり、人とは五百塵點の古佛たる釋尊、法とは壽量品の南無妙法蓮華經なり、是れに隨ひ喜ぶを隨喜とは云ふなり、總じて隨とは信の異名なり云云、唯信心の事を隨とは云ふなり、されば二の卷には隨順此經、非己智分と説かれたり云云。

（右、御義口傳下十三のお）

○口氣無臭穢優鉢華之香常從其口出の事

御義口傳に曰く、口氣とは題目なり、無臭穢とは、彌陀等の權教方便、無得道の教を交へざるなり、優鉢華之香とは、法華經なり、末法の今は題目なり、方便品に如優曇鉢華の事を一念三千と云へり、之を案ずべし、常とは三世常住なり、其の口とは法華經の行者の口なり、出とは南無妙法蓮華經なり

＝訓譯＝口氣に臭穢無くして優鉢華の香、常に其の口從り出でん

「優曇華」とは具さには優曇鉢羅華と云ふ、義譯して瑞應華と云ふ、芽出て一千年、開きて一千年、三千年に一度開く花なり此の花開けば轉輪王出るといふ、又天下に佛ある時此の花開くといふ。

＝訓譯＝佛を見奉り法を聞て教誨を信受せん

今日蓮等の類、南無妙法蓮華經と唱へ奉れば常住其口出なり云云。

「右、御義口傳下の十三のう」

○見佛聞法信受教誨の事

仰に曰く、此の經文は一念隨喜の人は五十の功德を備ふべし、而聞見佛聞法の功德を具足せり、此の五十展轉の五十人の功德を隨喜功德品に説かれたり、仍て世々生々の見佛聞法の功德を備へたり、所詮末法に入りては、佛を見るとは壽量品の釋尊、法を聞くとは南無妙法蓮華經、教誨とは、日蓮等の類、教化する處の諸宗無得道の教誡なり、信受とは法華經の行者なり、所詮壽量開顯の眼の顯れては、此の見佛は無作三身なり、聞法は萬法己々の音聲なり、信受教誨は本有隨緣眞如の振舞も是れ則ち色心の二身なり、見聞とは色法なり、信受は信心領納すれば信なり、所謂色心の二法に備へたる南無妙法蓮華經なり云云。

「色心の二法」とは百五十五頁を見よ

（右、日向記全、四十二のお）

○若復有人以七寶滿乃至其福最多の事

仰に云く、此の經文は七寶を以て三千大千世界に滿ちて、四聖を供養せんは、法華經の一偈を受持し奉らんには劣れりと說かれたり、天台大師は、生養成榮の四義を以て、法華經の功德を釋し給へり、所詮末法に入りては、題目の五字卽ち是れなり、此の妙法蓮華經の五字は、萬法能生の父母なり、生養成榮も復亦此の如し、仍て釋には爲妙爲本と釋せり、三世十方の諸佛は妙法經を以て父母とし給へり、此の故に四聖を供養するより、法華經を持つは勝れたり、七寶は世間の財寶なり、四聖は滅歸する佛菩薩羅漢なり、さて妙法の功德は、一得永不失なれば不朽、失はざる功德なり、此の故に勝れたり云云。

（右、日向記全、四十二のう）

○五十展轉隨喜の事

五十展轉の人は五品の初めの初隨喜の位と申す釋もあり、又初隨喜の位の先の名字卽と申す釋もあり、疏記第十に曰く、初めに法會にして聞く、是れ

「羅漢」とは二頁の阿羅漢を見よ

「隨喜品」とは五品位の第一位なり、諦法華經に說ける三諦妙理を聞きて隨喜しこの妙理を知り智慧を得て自ら喜び又慈悲を以て他人を喜ばしむる位の名なり

初品なるべし、第五十人は隨喜の位の初めに在る人なり文、文の心は初會聞法の人は必ず初隨喜の位の內第五十人は初隨喜の位の先の名字卽と申す釋なり、其上五種法師にも受持讀誦書寫の四人は自行の人、大經の九人の先の四人は解無き者なり、解說は化他後の五人は解ある人と證し給へり、疏記第十に五種法師を釋するには、或は全く未だ品に入らず、又云く一向未だ凡位に入らず文、文の心は五種法師は、觀行五品と釋すれども、又五品已前の名字卽の位とも釋するなり、此等の釋の如くんば、義理を知らざる、名字卽の凡夫が隨喜等の功德も、經文の一偈一句、一念隨喜の者、五十展轉等の內に入るかと覺え候、何に況んや此の經を信せざる謗法の者の罪業は譬喩品に委しくとかれたり、持經者を謗ずる罪は、法師品にとかれたり、此の經を信ずる者の功德は、分別功德品、隨喜功德品に說けり、謗法と申すは違背の義なり、隨喜と申すは隨順の義なり、（中略）四十餘年の諸經大人上聖の功德に勝れたる事を顯さんとして五十展轉の隨喜は說かれたり。

「五種法師」六十二頁を見よ

「隨喜」とは五悔の一、他人の善因を修し善果を得るを喜ぶこと、他人の善を自分の善の如へよろこぶこと

「五百塵點」とは五百千萬億那由陀阿僧祇の三千大千世界を抹して微塵となし其微塵を持して五百千萬億那由陀阿僧祇の國土を過ぎて一微塵を下し過ぎてまた一微塵を下しかくしてこの微塵盡きたるとき過ぎし時今ここに經すべて微塵の國土を碎きて微塵となしその一塵を一劫とし數へたる總數を云ふ

法華文句記箋難卷第四に云く、既に滅後の五品の初を校量す、初とは謂るなり、彼の第五十に云く、法華に四百億に施し乃至四果を得せしめんは、五品の中の隨喜品の人なり、若し輔行に據らば、則ち隨喜又入非品の人に通ず初隨喜の人に如ず、此の第五十人、隨喜の心亦何ぞ、必ず五品の初隨喜の位を脫せんや（中略）觀心論疏上に云く、經に第五十人の功德を格量するに、尙稱量すべからず、況んや最初の隨喜の人をや、卽ち是れ今の圓觀の人なり、文句十に云く前は是れ相似の位の功德、今は是れ相似の位の前の功德なり。

（右、唱法華題目抄遺の三二七、內十一の廿五）

（右、註法華經六の四十一のお）

○妙法蓮華經法師功德品第十九

法師功德品　大僧正慈鎭

いつくさの法のしわざの花の色
うつる鏡をみる人ぞなき

同　實隆

たらちねもうれしとしれなる黑かみの
思ふ筋なる法に逢ふ身は

悉見三千界　大僧正慈鎭

御法ゆゑ身の浮雲や晴ぬらん
よものみ空によるの住影

唯獨自明了餘人所不見　西行法師

ましくてさとる思ひは外ならず

わが歎きをば我しるなれば

同　　政爲

我のみとおもふもうれし法の花
なるゝ契も深き色かな

唯獨自明了　　通村

さやかなる心ひとつに見る月は
出たる山のさはりだになし

父母所生眼　　大僧正慈鎮

あまのかるみれるめにかゝる藻屑まで
清き光のさるものかは

皆與實相不相違背　　高倉

津國やなにはに生るよしあしは
いふ人からのことのはぞかし

「六卽佛」略して六卽と云ふ左の如し
(一)理卽佛
(二)名字卽佛
(三)觀行卽佛
(四)相似卽佛
(五)分證卽佛
(六)究竟卽佛
(妙宗鈔)
此外に四教の六卽圓教の六卽あれど繁雜なれば記せず大藏法數を見よ

「天親菩薩」百九十四頁の世親菩薩を見よ

○謹んで法華經法師功德品を案ずるに、當に八百の眼の功德、千二百の耳の功德、八百の鼻の功德、千二百の舌の功德、八百の身の功德、千二百の意の功德を得べし、此の功德を以て六根を莊嚴して、皆清淨ならしむ(已上經文)當に知るべし、受持の法師(一)、讀の法師(二)、誦の法師(三)、解說(四)、寫の法師是の五種法師、各〻法華經に依りて、各〻六千の功德獲る、其の六卽の中の第四相似卽の位なり、父母所生清淨肉眼明かに知れぬ、父母所生とは卽身の異名なり、偈に云く、未だ肉眼を得ずと雖も肉眼の力是の如し、(已上經文)當に知るべし、實經の力用は肉眼をして淨らかならしむ、他宗所依の經には都て此の力無し、天台法華宗具に此の力の用有り、又云く、未だ無漏法性の妙身を得ずと雖も、清淨の當體を以て一切中に於て現ず、天親菩薩謂く、諸の凡夫經力を以ての故に諸根の用を得る、(已上論文)當に知るべし、凡夫人の修學すべき經なり、他宗所依の經には都て此の力無き故に、天台法華宗具に此の力有る故に、權實檢む可く德行進む可し、互用の文論に具に說が如し、玄六

「六根」とは眼、耳、鼻、舌、身、意なり此の六根の一一に功德あり眼、鼻、身の三根には各八百の功德を具す耳、舌、意の三根は各々千二百の功德を具す

「聖とは凡」とは、聖とは四聖、凡は六凡なり、四聖とは聲聞、緣覺、菩薩、佛の四なり、六凡とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六を云ふなり

に云く、(大論の釋也)三根は(三根者)(眼、耳、意)種々の義强き故に千二百の功德有り、三根は(三根者)(鼻、舌、身)力弱き故に但八百の功德なりと云云、蓋し一途の別說なり、經の圓意に非ず文、又云く、能等、又云く、能縮、又云く、能盈、又云く、經に云く、若し能く此の經を持つ功德は則ち無量にして、虛空の無邊なるが如く、其の福限る可からず互用の意彰矣、(中略)文句の十に云く、正法華には整束して六千の功德を具し、上中下を論せず、又云く、今經の六根清淨は九品と同じ、是の功德を以て六根を莊嚴すとは、正法華と同じ、玄六に云く、正法華には功德正等にして、等しく千なり、又云く、能等は正法華に說くか如く、能縮は身眼鼻の八百の如く、能盈は耳舌意の千二百の如し、經に云く、若し能く此の經を持つ功德は則ち無量にして、虛空の無邊なるが如し、其の福限る可から、互用の意彰矣、正に云く、此の經典を受持讀書寫せば、當に千眼功德の八百の名稱千二百の耳根、千二百の鼻根、千二百の舌根、千二百の身行、千二百の意淨を得べし、是を無數百千品の德と爲す、則ち能く六根の

「南陀羅」とは梵音のチャンダーラ暴惡、殺者と譯す、印度種姓の名最下卑の種族にして四姓の下に位す漁業、守獄、屠殺等を業となす、印度種族の人の最も卑しむ所なり

「世間」とは百四十八頁を見よ

功祚を嚴淨す、又云く、八百の諸の名稱淸淨にして目明朗なり、又云く、八百の鼻の功德を得ん、又云く、身行八百の功德を逮得せん、首楞嚴經第四に云く六根の中各の功德に千二百有り、阿難汝復中に於て克く優劣を定めよ、眼の觀見するが如き、後は暗く前は明かなり、前の方は全く明かに後の方は全く暗し、左右旁觀すること三分が二なり、統て所作を論ずるに功德全からず、三分は功德言ふとも一分は德無し、當に知るべし、眼は唯八百の功德のみなり、耳の周く聽くが如きは、十方遺すこと無し、遐邇に若がへ靜は邊隨無し、當に知るべし、耳根の一千二百の功德を圓滿することを、鼻の嗅聞の如きは出入の息に通ず、出有り入有て中交を闕く鼻根を驗むるに三分に一を闕く、當に知るべし、鼻は唯八百の功德なり、舌の宣揚して、諸の世間出世間の智を盡すが如きは、言には方分有れども、理に窮盡無し、當に知るべし、舌根の一千二百の功德を圓滿することを、身觸を覺え違順を識が如きは、合する時は能く覺し、離るゝ中には知らず、離は一にして合は雙

「出世間」とは有漏の世間を解脱すること、迷ひの世界を離れたることなり

「聖と凡」百六十八頁を見よ

「大論」とは大智度論の略、龍樹菩薩の造百卷あり

「無作の三身」百四十二頁を見よ

「六根」百六十八頁を見よ

べり、身根を驗するに三分に一を闕けたり、當に知るべし、身は唯八百の功德なり、意の默して十方三世の一切世間出世間の法を容るゝが如きは、唯聖と凡と包容して、其涯際を盡さゞることなし、當に知るべし。意根の一千二百の功德を圓滿せることを、深く一門に入りて能く六根をして一時に清淨ならしむ、大論三十に云く、鼻舌身は同く覺と稱し、眼は見と稱し、耳は聞と稱し、意は知と稱す。

（右、秀句十勝鈔遺の七一六、內廿四の十六）

○法師功德品の事

御義口傳に曰く、無作の三身も、如來の壽も、分別功德も、隨喜も我が身の上の事なり、然れば父母所生の六根は清淨にして、自在無礙なり、妙法の六根なれば、十界三千の六根皆清淨なり、蓮華所具の六根なれば全く不淨に非ざるなり、此の六根にて南無妙法蓮華經と見聞覺知する時は、本來本有の六根清淨なり云云。

（右、御義口傳下十四のお）

「五種法師」六十二頁を見よ

「種熟脫」とは（一）に下種（二）に熟益（三）に脫益を云ふ下種とは先づ衆生に法華經を信じ得る種子を下すこと昔大通智勝佛の會下に於て王子か講ずる法華經に覆聞き佛種を得たるは熟益とは衆生の機根を養成し法華經を信じ得ることへ大通佛の心を整へ以後釋尊法華經を說き給ふまでの間に種々の方便を以て誘引するが如き熟益とは機の熟したる愈々脫益を見て衆生に解脫を得せしむること、釋尊が法華經を說き入らしめ果に佛を生ずるか如き是れなり

○法師功德の事

御義口傳に曰く、法師とは五種法師なり、功德とは六根清淨の果報なり、所詮今日蓮等の類、南無妙法蓮華經と唱へ奉れば六根清淨なり、されば妙法蓮華經の法師と成りて、大なる德あるなり、功も幸ひと云ふ事なり、又は惡を滅するを功と云ひ、善を生ずるを德と云ふなり、功德とは卽身成佛なり、又六根清淨なり、法華經を說文の如く修行するを六根清淨と意得可きなり云云。

（右、御義口傳下十四のう）

○六根清淨の事

御義口傳に曰く、眼の功德とは法華不信の者は、無間に墮在し、信ずる者は成佛するなりと、見るを以て眼の功德とするなり、法華經を持ち奉る處の眼に八百の功德を得るなり、眼とは法華經なり、大乘經典諸佛眼目と矣、今日蓮等の類、南無妙法蓮華經と唱へ奉れば眼の功德を得るなり云云、耳鼻